ザ・トリガー「学園サクセスストーリー」

青い鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ザ・トリガー「学園サクセスストーリー」

【Ｎコード】
Ｎ４５２３Ｔ

【作者名】
青い鴉

【あらすじ】
超能力が一般的に認知された世界。日本で唯一超能力をＰ２として認可、全て自己責任ということで使用を推奨している薙刀学園。そこに「ザ・トリガー」と呼ばれる少年　黒木シュンが入学するところから物語は始まる……。果たしてザ・トリガーは薙高に隠された秘密に立ち向かえるのか？　超能力バトル小説です。

第一話　引き金引き

昨今、引き金を引いたことの無い人間が多い。学生たるもの、せめてベレッタＭ９２くらいは取り扱えるようにしておきたいものである。

拳銃にはアクションとマガジンという二つの特徴がある。車に例えれば、シングルアクションがマニュアル車で、ダブルアクションはオートマ車である。マガジンのほうも二種類ある。確実性を重視したシングルカラムマガジンと多弾装を狙ったダブルカラムマガジンである。

ベレッタＭ９２、通称Ｍ９は、ピエトロ・ベレッタ社がライセンスを持ち、製造、販売する、ダブルアクションおよびダブルカラムマガジンを採用した米軍制式拳銃である。つまり一言で言うなら、世界中で使われているポピュラーな拳銃だということだ。

これくらいは使いこなせないと、薙刀高校で生きていくのは難しい。なぜなら、多くの部活動では、この銃を部の備品として支給しているからだ。

そう、生きていくのはとても難しい。特にこの薙刀高校では、その言葉は文字通りの意味で、そうなのである。

ザ・トリガー「引き金引き」

薙刀高校に入学した学生のほとんど全てには、明確な目的がある。なにも好き好んで、こんな異常な高校に入学する奴はいない。そう断言できる。それに、目的意識が無いアホは早急に駆逐されるだろう。

けれども、僕がこの学校に入学したのには、別の理由がある。それはほとんど自動的な理由だった。

そう。何を隠そう、僕は「引き金引き」なのだ。といっても、引

き金引きという言葉だけじゃ、まるで意味が分からないと思うけれど。そうだな、こう言った方がいいかもしれない。僕はあらゆる意味で騒乱の種であり、トラブルメーカーだ。

生来的な性質によるものか、あるいは育ちの悪さによるものか。まあそんなことは関係ない。僕は望むと望まざるとに関わらず、場の中でそういう存在になってしまう。僕は引き起こされた撃鉄であり、弾丸が込められたシリンダーであり、安全装置の無いトリガーなのだ。そして、それはとてもあっさりと暴発する。

ザ・トリガー。中学校ではそう呼ばれた。

入学式の日。太陽が眩しいくらいの晴天だった。だから、もしかしたら。そう、もしかしたら、薙刀高校に入学したら僕のそんな変な性質も、綺麗さっぱり消えてくれるんじゃないかと夢見たこともあった。だが、現実は非情である。

「動くな！」

面倒を避けようとして乗ってきた朝一のバスから降りて、少し歩いた、人気のない交差点。入学式に向かう途中の僕に向けられた銃口は、あっさりと僕の夢を――おそらく一生叶わない、普通の人生を送るという夢を――雲散霧消させた。

銃はＭ９。彼ら三人が薙高生であることは、服装から見て間違いない。

「助けてください！　私は何もしていないのにこの人たちが！」

栗色のウェーブ髪の美少女が騒いでいる。五月蠅い。何が助けて、だ。こんな無法地帯に自衛手段も無しにのこのこやってきておいて、自分だけが被害者面しやがって。彼女がもし被害者だというなら、こんないい天気の日にトラブルに巻き込まれた僕のほうが、よっぽ

ど被害者じゃないか。

「助け――」

「黙れ。ここじゃ誰が襲われて死のうと自己責任なんだよ」

僕はかまわず歩きだす。

「おい、動くなと言……！？」

喧(やかま)しい。どいつもこいつも僕の不幸を無視しやがって。お前たちは何様のつもりだ。ただの、くだらない、入学式を邪魔する障害物のくせしやがって。へし曲がれ。飴細工のように。

ぐぎん。変な音がして、男が構えた拳銃が曲がる。バレルが折れ曲がって発砲できなくなる。異常に気付いた残りの男たちも銃を構える。だが、同じく音を立てて銃がねじ曲がる。

「おいあんたら。覚悟はできてるんだろうな。人に銃を向けるってことは、そいつにどんな抵抗されても構わないって覚悟をしてきてるんだろうな。いや、関係ないか。どうせ同じだ。覚悟していようが、していまいが――あんたらはここで、倒れるんだから」

ごきん。骨が折れ曲がる。脚が曲がってはいけない方向に曲がる。痛み。怒号。悲鳴。立っていられずにどさりと崩れ落ちる三人の男。なんということもない。ただの日常。

「た、助けてくれてありが――ごふっ」

僕はそのウザイ女の腹に蹴りを入れて1メートルほど吹き飛ばすと、一人で入学式に向かった。ここから歩いて十五分ほどの場所に、その学校の校門はある。

ザ・トリガー。トラブル遭遇率が桁違いに跳ね上がる常在特殊能力。そして、その副作用として存在する、超常現象。本体〔ザ・ト

リガー」のサイコキネシス。

僕の名前は黒木シュン。ザ・トリガーと呼ばれる、いわゆる普通の超能力高校生だ。そして僕は願わくば、ただの、ごく一般的な高校生として、薙刀高校に入学したかった。

だが、その願いはおそらく、決して叶わない――。

第二話　僕はヒーローではない

ＪＯＪＯという漫画を知っているだろうか。スタンド能力という特殊能力を持った連中が、出会っては戦い出会っては戦うという、まあそんな話だ。

彼らは一生戦い続けるのだろうか。それとも、あるとき運命の糸はぷつりと切れて、平穏な暮らしが手に入るのだろうか。平穏な暮らし。僕が求めても手に入らない生活。

ところで、僕は引き金引きだ。

入学式は何も起こらずに終わった。尤も、先生たちと風紀委員が目を光らせている場所では、何も起こせないというほうが正確だが。

僕たちは先生に案内され、教室へと入った。あいうえお順に席が割り当てられる。今日から、ここが自分の教室、自分の席になるのだ。

「ロッカーは廊下にあるわ。でも……あらあら、誰かに壊されてるわねえ」

先生はまるで他人事のようにロッカーを見つめる。

特に、僕のロッカーは完全に破壊されていた。それはきっと、朝の連中からの宣戦布告の合図なのだ。しかし、僕はロッカーを「直さない」ことにした。僕の能力は、見世物ではなかったし、僕はそもそも、ヒーローでは無いからだ。

ザ・トリガー「僕はヒーローではない」

「さあ皆さん。各自の情報端末を見てくださいね。どの部活動に入るかは、一週間以内に決める必要があります。必ずどこかの部には所属しなくてはいけません。また、薙高では『兼部』が推奨されています。入りたい部活動があれば、その全部にチェックしてください。気に入らなければ、退部は自由です」

薙刀高校では、学園ＳＮＳ（ソーシャルネットワーキングサービス）によって、生徒は管理されている。
メールボックスを覗くと、さっそく、何通かのメールが届いていた。

――今朝、藤沢カオリを助けたのは、あなた？（ｙｅｓ／ｎｏ）

藤沢というのか。あの女は。僕は迷うことなく、ｎｏと答えた。
銃を持った三人の男を骨折させたのは、僕ではない。僕としては、そういうことにしておきたい。入学初日にヒーロー扱いされるのはまっぴらだ。

――あなたはどんな方法で三人を同時に相手にしたの？

出会ってもいないし、相手にもしていない。と僕は答えた。

――ザ・トリガー。あんたは誰を敵に回したか知っているのか？

知らないし、興味も無い。そう回答して、気付いた。相手は既に二つ名のことを知っている。
こいつは……誰だ？

――なら忠告しておく。できるだけ早く、平安部部長の邪（よこしま）に会え。

今日は入学式があったこともあり、午前中は学校の規則と学園ＳＮＳの使い方を教えるホームルーム、午後からは部活動見学という予定だった。
僕は学園ＳＮＳで、平安部という部活動の公式コミュニティの概略に目を通した。
「平安部は、特になにもせず、お菓子などを食べる部活です」
僕は迷うことなく平安部にチェックを入れた。特になにもしない

部活。これこそ僕にふさわしい部活動だ。邪という部長に会って、僕の話を聞いてもらおう。そうすれば、僕は何事にも巻き込まれずに、植物のような平穏を得られるかもしれない。

……しかし、僕のそんな甘い考えは、あっけなく打ち壊されることとなる。

第三話　弱いでおじゃる

「弱いでおじゃる」

うつぶせになった僕の背中を踏みつけて、邪（よこしま）は言い放った。

部室に入った瞬間に、鉄パイプを持った二三人の部員に襲われたのだ。学園内では超能力を使わないと決めていた僕は、突然の襲撃に全く対処できなかった。

頭部と腹部への直撃を喰らい、前のめりに倒れて気絶した僕が気が付くと、平安部部長の横島ツカサに踏みつけられていたという成り行きだ。

邪は長身の優男（やさおとこ）である。手にはいつも扇子を持っている。

「麿は横島ツカサ。平安部部長で、現在入部テストを行っているところでおじゃる。麿は人づてに噂を聞いて、期待して待っていたでおじゃるが……まず、基礎訓練から始めてやらねばならぬでおじゃろうか」

吹奏楽部の奏でる雅楽をＢＧＭにして、邪が自己紹介する。

僕が怒っていることを察知したのか、邪は足をどけた。

僕はむくりと起き上がる。

「あんたら何なんです？　いきなり人を襲っておいて、謝罪の言葉も無いなんて……」

「彼らは平安部実働部隊、雅（みやび）でおじゃる。それぞれ相当の手練れ揃いで、麿は重宝しているのでおじゃる」

「なにもしない部活、じゃあないんですね？」僕は起き上がりながら言う。

「寄る辺なき一般人の入部志望者には、そう言ってあるでおじゃる

が――Ｐ２は別でおじゃる」
「Ｐ２？」
「Ｐａｒａｎｏｒｍａｌ　Ｐｈｅｎｏｍｅｎａ。超常現象のことを、この学園ではＰ２と呼ぶのでおじゃる」
「誰がＰ２だと？」
「ザ・トリガー。お主の存在自体がＰ２なのでおじゃる。複雑に絡み合った因果の糸。ありうべからぬ遭遇率。これまでお主が生きてこられたこと自体、分析が必要な事象でおじゃろう」

邪はしばし間を置いた。僕に考える時間を与えているつもりらしい。

「じゃあ、僕はこの能力を使わなくちゃあならないんですね」
「訓練場があるでおじゃる」
「今、ここで、あなたを狙ったら？」
「お主が求める平穏は永遠に手に入らないでおじゃる」

なにもかもお見通しってわけかよ。僕は毒づいた。エレベータに乗り、地下へと移動する。そこには、広大な空間、訓練場があった。すぐわかるところでは、射撃練習場があった。平安部部員かどうかは分からないが、銃の練習している部員がいる。

「火器の訓練所とは別に、Ｐ２の訓練もできるでおじゃる」

通されたところには、それぞれ厚さが異なる、縦に長い鉄板がぶら下げられていた。２５６発当てると壊れると噂される、バキュラを想像させる。円が描いてあり、それが的だということが分かる。

「やってみるでおじゃる」
「まず手本を見せてくださいよ」僕は冗談を飛ばした。

ごぎん。衝撃が走り、厚さ1センチの鉄板が揺れる。ぐらぐらぐら。

僕以外にも、当たり前のように超能力者がいる。その事実に、僕は衝撃を受ける。

「ほほほ。麿は基本的に戦闘要員ではないゆえ、揺らすのがせいぜいでおじゃる」

「じゃあ、今度は僕がやってみます」

ねじ切れろ！！

僕が精神を集中すると、全ての鉄板がぎりぎりと音を立ててへし曲がる。

厚い板は歪み、薄い板はそのままねじれて、切れ落ちた。

「ふうむ」

僕は得意げに邪の言葉を待った。

「……やっぱり、弱いでおじゃる」

僕はその言葉に愕然とした。

「これでは『シークレット』の連中にあっさり殺されるでおじゃる。しばらく平安部で特訓することでおじゃるな」

第四話　シークレット

シークレットとは何か？

それを紐解くには、まず学園ＳＮＳ（ソーシャルネットワーキングサービス）に存在する機能、コミュニティについて説明せねばなるまい。まず目立つのが、各部活動の公式コミュニティである。そこでは、部活動のお知らせと予定表や、雑談、議論などが行われている。

その周囲に存在するのが、公式同好会コミュニティ。あえて部費をもらわずに成立しているそれらの数は、まさに無数。多くの「○○が好きな人集まれ」の掛け声の下に集結した彼らは、時に公式部活動を凌ぐ規模にまで膨れ上がる。

そして、表舞台から完全に隠蔽（シークレット）された、非公開コミュニティ。

薙刀高校のありとあらゆる暗部が終結しているそこは、全てのやりとりが完全に暗号化され、いかなるハッカーにも盗聴不能！

学園ＳＮＳのアンダーグラウンドとして発展した組織、シークレットは、その規模すら窺い知れないまま、薙高に巨大な影響力を行使している。

ザ・トリガー「シークレット」

薙刀高校会長の娘、藤沢カオリを誘拐しようとしたグループは、用意周到に準備を進めていた。公文書を偽造し、入学式の時刻表を偽り、藤沢カオリだけが始発バスに乗り込むよう仕向けた。計画は順調に進み、あとは藤沢カオリを誘拐するだけになったところに、そいつは現れた。

ザ・トリガー。ありとあらゆるトラブルに首を突っ込まざるを得ない特異体質。そいつの登場で、三人が太股の骨を骨折、再起不能にさせられた。

「気に入らねえな」

渡り廊下で、兵藤カツヒコは呟いた。

校則で禁止されていない電子タバコを吸っている。

「能力がありながらそれを行使しようとしない。トラブルメイカーのくせにそれを利用しようとさえしない。人生をただ漫然と普通に生きられればいいと思っている。なんつーか、俺の一番嫌いなタイプだ」

「いかがするおつもりですか」秘書のような声が、彼のイヤホンから聴こえる。

「殺せ。手段は問わん」カツヒコは命じた。

「では、そのように」秘書のような声が、了解した。

シークレットは、ある種のマフィアに近い。平安部がそうであるように、実働部隊を持ち、それが目的を遂行する。チーム「クローゼット」は、カツヒコが立ちあげたチームである。

シークレットのうち、どのくらいの位置に自分たちがいるのかは分からないし、別に知りたくも無い。

だがとりあえず、シークレットの顔に泥を塗った人物を始末すれば、その分だけ、クローゼットの名声が上がる。名声を聞きつけて入部希望者が増えれば、それだけ権力も増すことになる。

カツヒコはクローゼットを自分の道具として立ち上げた。しかし、今はどうだろう。自分がシークレットに、クローゼットに振り回される側に回ってしまってはいないか。そんなくだらない思考を停止して、彼は別の思考を開始する。

もしザ・トリガーが既に部活動（コミュニティ）の庇護下にあるとすれば。学園のトップ連中とつるんでいるとしたら。

「……さしずめ、戦争開始ってところか？」カツヒコは頬を歪めて

笑う。

少し離れたところから、一人の足音がする。カツヒコは真顔に戻る。銃のグリップを握り、いつでも引きぬけるようにして、振り向く。

「やあ、Ｍｒ．クローゼット。少し頼みごとがある」

なぜこいつは俺のチーム名を知っている？　一体誰だ？　天才ハッカー、藤王アキラではない。別の人物。思い当たる奴がいない。銀髪の、目元が左右非対称の、少年。

「僕は、ボスの使いの者だ。今、シークレットはタイムリピーターと呼ばれる存在を狩り立てている。できれば共闘してほしい。強制じゃあない。できれば、でいい」

タイムリピーター？　聞いたことがない。

「そのタイムトラベラーの親戚か何かを狩り立てて、俺に何の得がある？」

「それを君が知る必要はない。ただ、評価が上がるというだけだ。首尾良く成功すれば、シークレットの幹部にもなれるだろう」

少年はとんでもないことをさらりと言い放つ。

シークレットという存在は、それほど知られているわけではない。知名度が低いアンダーグラウンドの領域だ。その幹部？　幹部だと？　こいつはボスのお気に入りだとでもいうのか？

「誤解しないで欲しいが、僕はただのメッセンジャーだ」

心を読まれたような気がして、カツヒコは電子タバコを噛む。

「なら、ザ・トリガーの件はどうする？」

「並行して進めてくれてかまわないよ」

少年はそちらの情報も持っているらしい。

「とりあえず今現在、僕から提供できる情報は、スウマキツミという偽名を使う男が、薙高生に接触してきているという事実だけだ。本名も不明。目的も不明。タイムトラベルの原理も不明。しかし、ボスはそいつがタイムリピーターではないかと疑っている。なぜならそいつは『宝くじの一等を連続して当てている』」

「なるほどね。よほどの強運の持ち主か、タイムトラベラーか、どっちかだと言いたいわけだ」

「そういうことになるね」

「それで、なぜタイム『リピーター』と呼ぶ？」

「彼らは旅行しているわけでは、ないからね」

幹部になれるかもしれない。それはおいしい話に思えた。カツヒコは承諾した。それがどれほど危険な賭けになるかも知らずに。

第五話　告白

私こと、藤沢カオリは恋をしていた。

登校初日に自分を救ってくれた白馬の王子様に、である。助けられた後に、腹を蹴られて吹っ飛んだとか、そういったことは些細なことだ。あのまま誘拐されるのを防いでくれたというだけで、惚れてしまった。

おじい様から借りた新入生名簿システムで、似顔絵検索――似顔絵からそれに良く似た顔写真を検索する――した結果、彼が誰か、どのクラスに居るか、ということはもう既に割り出してある。

あとは、この思いを、彼に伝えるだけ――。

かくして、藤沢カオリのストーキングが始まる。

ザ・トリガー「告白」

一人の尾行。僕、黒木シュンは、尾行に気づいていた。下手糞な尾行だ、というのが感想だった。中途半端に壁に隠れ、身を乗り出して様子を伺っている。あれなら、普通に歩いていた方がよっぽど怪しまれない。

訓練用のゴム弾頭入りの銃――ゴム弾頭は一番安く買え、相手に十分な痛みを与える――をいつでも引き抜けるようにして、僕は様子を見る。制服を見て、女性だと分かる。

シークレットからの刺客だろうか。しかしそれにしては露骨すぎる。図書館のほうに移動し、人気（ひとけ）が無くなってから、後ろを振り向く。

「あんた誰だ？　尾行はバレているぞ」押し殺した声で、訊く。

柱から女性が姿を現す。この女には見覚えがある。

「あ、あの、えーと」
「藤沢カオリ。一年生。薙刀高校会長の孫、だったか」
「知ってらっしゃるんですか？」
「検索システムで調べた。それで、何の用だ？」
「あの……私と付き合って下さい！」

はあ？　というのが第一の感想だった。何をどうしたら僕に惚れることができるんだ。僕は邪魔な障害物を除去しただけで——ああ、その副作用か。僕は、ようやく思い至る。僕は会長の孫を誘拐から助けたのだ。恩人である。だから惚れたのか。単純すぎる。

「いいよ。付き合おう。ただし、僕は平安部のほうが忙しいから、あまり一緒にはいられないと思うよ」
「奇遇ですね！　実は私も平安部なんです。お茶とお菓子も用意してあります」
どう考えても僕の部活動を調べて入部したとしか思えない。まいった。やっかいな女と付き合う羽目になった。

平安部で忙しいというのは、そういう意味じゃないんだが、と言おうとして、訂正する意味が無いことに気付く。彼女はどこまで行っても一般人なのだ。超能力者の苦悩など、彼女が分かってくれるはずがない。

「今日のお昼、お暇でしたら、一緒にコーヒーでも飲みませんか？」

確かに、食堂の隣にはコーヒーショップがある。彼女はそこで初デートと洒落込むつもりらしい。やれやれ。
僕は了承した。シークレットに狙われていることなどを話しても、彼女は信じてくれないだろう。それよりは、彼女とのコネを利用し

て、僕のほうからシークレットを各個撃破する戦略を練るのも悪くない。
それに、今の僕は平安部の庇護下にある。簡単には手出しできないはずだ。

午前の授業が終わり、僕は新しくなったロッカーに教科書を放り込む。
僕は彼女との予定を思い出し、すっぽかすかどうか悩みつつ、足は自然と食堂に向かう。
食堂の入口に、彼女の姿があった。僕のことをずっと待っていたのだろうか。やはり、こいつは馬鹿としか思えない。しかし馬鹿な女は行動が読みやすいので、まあ無駄に賢いよりはマシかもしれないと、思い直す。

「私もいま着いたところなんです！」嘘つけ。
「じゃあコーヒーショップに行こうか。僕は少食だから、昼食はサンドイッチでもいいよ」
「クッキー焼いてきたんですが」訂正。手間の掛かった馬鹿だ。
「それは平安部で食べることにするよ」と、適当に相槌を打つ。

コーヒーショップは食堂の料理よりも少し割高なせいか、いつもすいている。僕と彼女はそれぞれサンドイッチとコーヒーを注文する。少し奥の席に着き、呼ばれるのを待つ。呼ばれると、彼女が取りにいった。

心配すべきなのは狙撃でおじゃる、と邪(よこしま)は言っていた。
僕のサイコキネシスには射程距離がある。その力の及ばない遠距離からの狙撃に対抗する手段は、今の僕にはまだ備わっていない。つまり、この場で狙撃されたとしても自己責任だ。ポケットの銃をいつでも引きぬけるように注意しつつ、僕は昼食を取った。

コーヒーを半分ほど飲んだ時、ふいに、本能が危険を告げる。グラスが砕ける。

「伏せろ！」

僕は自分が狙撃されていることを知ると同時に床に転がる。木製のテーブルに銃弾が二発着弾し、転倒する。間違い無い。シークレットの狙撃だ。

僕は銃を取りだす。そして念じる。銃弾にサイコキネシスの力を乗せる。

「僕を舐めるなッ！」

誘導弾。できるかどうか分からないが、やるしかない。僕は引き金を引いた。狙撃の弾道をなぞり、吸い込まれるイメージ。銃弾は曲がりくねり、食堂の柱の影に吸い込まれる。

「ぐあっ」小さな呻き声と共に、物陰から狙撃銃を持った男が転がり出る。

僕は追撃のための引き金を引く。二発撃ち、そのどちらも外れる。やはり二発同時に誘導は無理だ。一発だけ、引き金を引く。その軌道を精密にコントロールする。肩に命中する。ゴム弾とはいえ、骨に直撃を食らえば、しばらくは再起不能になるだろう。

「止めだ！！」僕が五発目を撃とうとしたその時。

「私を……私を守ってくれたのね！」カオリが思いっきり抱き付いてくる。

「ちょっ……何をする！止めろ！」

ようやくカオリを振りほどいた時には、既に男には逃げられた後だった。

（だめだこの女……早くなんとかしないと……）

第六話　軍事部

僕は昼食後、なんとか藤沢カオリを振り切った。

平安部部長の邪(よこしま)にケータイで連絡し、予期した通り狙撃を受けたこと、とりあえず撃退したことを報告する。

「お主はよくやったでおじゃる」邪はケータイ越しに、ほほほと笑う。

「しかし、『シークレット』から完全に防御することは、麿の力だけでは敵わぬ。別の部活動を紹介するから、お主の判断で入部することでおじゃる」

僕の聞いた話では、何もしない部活動、平安部は、学内で最大派閥を形成している。その実働部隊、雅(みやび)の連中は、全員が邪に忠実なチームで、手練れ揃いときている。しかも、何人いるかは知らないが、Ｐ２持ちも含まれているらしい。

邪の言葉は、僕の護衛に割くコマは無いとも取れる。そしておそらく、そういう意味だろうと解釈する。きっとそれで合っているのだろう。最後に頼れるのは、自分の能力と拳銃、それがダメなら、腕と脚だけだ。

それでも邪は、僕にいくつかの部活動を提示し、選択肢を与えてくれた。

軍事部。弾、銃、砲、その他兵器の販売や貸出。諜報／防諜活動なども行う。傭兵業を営む、水城(みずき)が所属。

情報処理部。あるいは単に、情報部。学園ＳＮＳの管理などを行う、薙高の情報処理の牙城。ハッカーの藤王(ふじおう)アキラが所属。

新聞部。薙高の広報担当。その裏では、特務取材と称したＰ２の研究や捕獲に熱心。最上(もがみ)ヒデアキが部長。

僕はその三つの部活動のうち、まず軍事部の利点を考えた。誘導弾〔ホーミング〕の撃ち方は、早急に練習しなければならないことの一つだ。射撃練習を合法的に行える軍事部は魅力的に映った。

情報部。情報は無いよりあるに越したことはない。所属するだけで開示される情報もあるとのことで、これも悪くない。

新聞部はどうか？　Ｐ２であることを明かせば、おそらく丁重に迎え入れられることだろう。だが、いくら安全が保証されるとはいえ、僕はモルモットのように扱われたくはない。

迷った末、僕は平安部の他に、軍事部と情報部に所属することにした。Ｐ２であることは伏せておく。

「それと、オカルト部には必ず所属しておくことでおじゃる」

オカルト部？　それが僕と何の関係が？　そう問いかけて、言葉を飲み込む。

確かに、僕はオカルトの知識を得ておくべきかもしれない。なにしろ、このザ・トリガーの能力が何故存在するのかさえ、自分には全く分かっていないのだ。

僕は言われた通り、オカルト部にも所属することにした。

学園ＳＮＳをケータイから呼び出し、各部にチェックを追加する。なんともあっさりした入部方法だ。この入退部のしやすさが、この薙高の独自の校風を生み出しているのだ。

放課後、僕は平安部ではなく軍事部に行った。事前に知らせていなかったにも関わらず、手厚い歓迎を受けた。具体的に言うと、皆にシャンパンを浴びせかけられた。

「あんたが例の魔弾の射手なんだろう？」と、軍服を着た先輩――学年章で分かる――が言った。

「ええ、まあ。まだ練習不足ですが……」
「そう謙遜するなって。俺達は新聞部と違って、Ｐ２に偏見なんか持ってないからよ」

僕が食堂で狙撃手を撃退したことは、さっそく未確認情報として出回っていたらしい。さすが学園ＳＮＳが存在する学校だけあって、情報が早い。情報部にも入っておいて正解だったと思う。

「身を守るために、銃の訓練がしたいんです」

僕がそう言うと、先輩は練習申請用の用紙とペンを渡してくれた。

「助けてください！　なんて言ってきたら張り倒すつもりだったんだが、案外マトモなことを言いやがる。これを見せて利用者カードを発行してもらえば、射撃練習場はフリーパスだ。しっかり練習して、シモ・ヘイヘみたいになるんだぜ」
「努力します」シモ・ヘイヘは良く知らないが、きっとすごい軍人なのだろう。

射撃練習場で、僕は耳をイヤープロテクターで覆い、定位置に立つ。遠くの的を見定めて、神経を集中させる。
僕は引き金を引く。弾は吸い寄せられるように――事実、サイコキネシスで吸い寄せているのだが――的の中央に着弾する。ここまでは予想通り。
当面の目標は、二発以上を同時に誘導できるようにすることだ。それができたなら、次は三発。そこまでいけば、対多数でも有利に戦えるようになるだろう。

だが、ふいに、それでもまだ足りないという気がした。
そうだ。僕は相手がＰ２であるケースを想定していない。この薙

高に、一体何人のＰ２がいるのだろう。
無心で射撃を繰り返しながら、少しずつ上達する自分の姿を上方から眺めながら、僕は一つの恐怖に心が支配されてゆくのを感じる。

この薙高に、シークレットに、一体何人のＰ２がいるのだろうか。そのうち、何人が僕を狙い、何回僕は修羅場に遭遇するのだろうか。

僕は、ザ・トリガー。その銃に安全装置は無く、ただひたすらに、トリガーは軽い。

第七話　情報部

次の日の放課後、僕は情報部に向かった。
僕の予定は予期されていたようで、全員がパソコンのマルチディスプレイから身体を起こして僕の方を見詰めた。まず発言したのは黒髪長髪の女だった。

「私はオカルト部も兼部しているムツキ。あなたが、ザ・トリガーね。見る限り、能力が未発達だね。色々と」
「黒木シュンです」僕は本名を言った。
「名前なんてものはどうでもいいのさ。君のその能力のほうが重要。今後どう成長していくのか……とても楽しみだわ」ムツキは断言する。

それに別の少女が割り込む。

「あらお姉さま。そんな言い方って無いと思いますよ。彼は黒木君と呼んで欲しがってるのかもしれないじゃないですか……。私は『耳鳴り』のカエデ。以後、よろしくね」

右手で握手を求められる。とりあえず握手し返しておく。

「私はヤヨイ。カップラーメンという能力を持っている。カップラーメンが食べたくなったらいつでも言ってくれー」
「またまたー。このチームで最強のくせに謙遜しちゃって……」カエデがおちょくる。

「これからチーム『ムツキ』の試験を行う」ムツキは言った。
「ヤヨイ、相手をしてやれ」

「ええー。いきなりカップラーメン使うんですかー。ちょっと痛いかもしれないけど、我慢してね」

ここに至って僕は、これが僕の戦闘力を測る試験だと気付いた。ヤヨイの能力が何であれ、それが起動されたら僕は負ける。僕はサイコキネシスで、彼女の手を縛りあげた。えー、なにこれー。彼女の声が聞こえるが、気にしない。

「これじゃカップラーメン使えないじゃん。私の負けだよー」ヤヨイがギブアップする。

「サイコキネシス、か。汎用性が高い能力ね」ムツキが冷静に分析する。

「噂じゃ、銃弾の軌道を曲げて百発百中なんだって？」赤毛のカエデが興味津々といった表情で聞いてくる。

「あなたたちは一体、何なんですか？」

「チームだよ。情報部のオペレーターは仮の姿。実際はチーム『ムツキ』として活動をしている。ザ・トリガー。あんたは入部資格を満たした。これからはチーム『ムツキ』の一員とし働いてもらうことになる」

「僕のメリットは？」

「安全になることさ。Ｐ２の集団ほど怖いものはないからな。一人殺っても、復讐は続く。どちらかが討ち滅ぼされるまで、戦争は続く。公式コミュニティのチームにせよ、『シークレット』のチームにせよ、チームってのはそういうもんなんだ。チーム対チームは、戦争になるんだよ」

戦争。話がどんどんきな臭くなってきた。射撃訓練は続けた方が良さそうだ。

「つまり僕は安全になると？」
「必ずしもそうじゃない。イカれた奴ってのはどこにでも湧く。後先を考えずにあんたを殺しにくる連中もいるだろう。だが、私たちが一緒に行動する限り、ザ・トリガーは安全を保証されるだろう」
そこまで聞いて、疑問が浮かぶ。
「でも、失礼ですが、皆さんのクラスは？」
クラス表の書き換えくらいなら、サンドイッチを齧りながらでもできるよ。そう言って、ムツキは新型パソコン――部費で買ったのだろう――に向き直る。ＯＳシルバースネイルを搭載したパソコンは、一瞬で無数のウィンドウを表示し、先生のパソコンのファイルを瞬時に書き換えた。
「ほら、これで終わり。これで私たちはあんたのクラスのただの女子校生だ」
「あの、一ついいですか」
「なんだ？」
「ついでに、藤沢カオリを、別のクラスに配置してもらえませんか」
「……人の恋路を邪魔する趣味は無いなあ」ムツキはにたにたと笑っていた。

第八話　マイスウィートルーム

「あら？　見ない顔ね」
「いえ、私たち最初からここにいましたよ？　座席表を確認してみてください」
「あらほんと。私の勘違いだったみたいね。長年教師をやっていると物忘れがひどくて困るわ……」

先生に怪しまれずに、黒髪のムツキ、赤髪のカエデ、髪を束ねたヤヨイの三人は、僕のクラスに溶け込む。全員が僕の隣の席だ。
後ろの方から、僕の彼女、藤沢カオリの妬ましい視線が飛んでくるが、気にせず僕は授業を受けた。

「シークレットのチームは、基本的に幽霊部員だ。部活動に参加せずに任務を遂行していることのほうが多い。それに、非公開コミュニティだから、統率が取れてないこともある」ムツキが僕の情報端末にチャットを飛ばす。
「四対一の状況下で襲ってくる無謀なやつはめったにいないから、授業中は安心してていいよ」カエデが付け足す。
「そんなことよりカップラーメン食いたいー」ヤヨイはいつも通り平常運転だ。

キーンコーンカーンコーン。
授業が終わると同時に、藤沢カオリが僕の席までやってきて、あからさまに嫌そうな目で周囲の三人を見回す。

「どういう裏技使ってクラスに潜入したか知らないけど、黒木君はもう私の彼氏ですからね！　近寄らないでください！」困った。こいつは嫉妬が激しいタイプだ。

「別に、近寄ってはいないが」「そうだよねー」「ねー」三人が調子を合わせる。
「まあまあ四人とも」僕がその場を収めようとするが。
「四人ともって！　黒木君はどっちの味方なのよ！？」カオリが切れ気味になる。

周囲の男どもから、あからさまな皮肉が飛ぶ。

「いーなー。入学したてで女四人に言い寄られるなんてー」
「黒木はルックスもいいし頭もいいもんなー」
「まあピクチャレスには負けるだろうけどなー」
「いや、あいつは例外だろｗ」

その会話の中のピクチャレスという言葉が気になった。

「ピクチャレスって誰のことだ？」
「なんだ知らねーのかよ黒木。成績トップで入学した瞬間記憶能力者（ピクチャレス）だよ。なんでも、教科書も参考書も全部暗記しちまってるから、テストで１００点しか取れないって嘆いてるらしいぜ。たまには９５点とか取りたいってさｗ」
「そうなのか……」

試しに学園ＳＮＳの公式コミュニティをピクチャレスで検索すると、確かにピクチャレスファンクラブなるものが存在していた。そんな便利な能力者が学内に居るのか。一度会っておきたい気もする。
僕は次の授業の準備のために、ロッカーのある廊下に出ようとした。すると。

ゴーン。鐘の音が聞こえた。

「何だ……ここは……！？」

そこはもはや廊下ではなかった。暗い。バスケットボール入れがあり、カビ臭いマットレスが積み上げてある。僕は廊下に出たはずなのに、体育倉庫に居た。もしくは体育倉庫のような場所に。

「マイスウィートルーム。この場所の名前だ」

視線を上に向ける。積み重なったマットレスの上に体育座りした女がいた。窓から差し込む太陽光のコントラストが激しすぎて顔が見えない。これはシークレットの仕業か？　仲間を集めての待ち伏せか？

「違う。そうではない。殺すつもりなら仲間を呼んでいる。今日は私一人だ」

この空間は現実から隔離されている、と女は言った。一種の夢のようなものだ、と。だが夢にしては、現実感（リアリティ）がありすぎる。

「重要なのはこれから伝える情報であって、私のプロフィールではない。私が体育倉庫のカビ臭い匂いが好きだとか、靴下を必ず右から履くようにしているとか、そういう情報は割とどうでもいい」

マットの上で立ちあがって、そのショートカットの女は言った。

「お前は、これからモノボードと対峙することになる」

「モノボード？　そんな単語、聞いたことが無いぞ」

「そう。定義不能な、およそありえぬ悪夢のような存在。それがこの学園に現出しようとしている」

女は間を置いた。女の顔は影になっていて見えない。だが美少女に違いないという確信があった。

「今のお前はただ身を守ろうとしている。それではダメだ。仲間を集めろ。多ければ多い方がいい。モノボードはあまりにも強すぎる」

「お前は何だ？」僕は問い返す。

「私は『タイムリピーター』。モノボードを遮断する者」

ゴーン。再び鐘の音が聞こえた。

目を開けると、僕を覗きこむクラスメイトの姿が見えた。

「おい、大丈夫か黒木！」「お前廊下で急に倒れたんだぞ！」「保健室行った方がいいんじゃねーか？」

「……僕なら、大丈夫」

モノボード。仲間を集めろ。タイムリピーター。その三つの言葉が、頭から離れなかった。

第九話　スウマキツミ

「ああ、俺？　俺はスウマキツミ。いやそんなことはどうでもよくってさ」

「え？　ああ。俺のサングラスが似合ってないって？　Ｔシャツもジーンズもダサイ？　まあそのくらい分かってるって。ただ、そのへんの店でセットで買っただけだよ」

「で、君、モノボードって知ってる？　このへんで有名な噂なんだけどさ」

「♪新月の晩、時計仕掛けのモノボードたちが現れる　ってね」

「ああ、知らない。そっか。残念」

「ありがと。それじゃ」

「え？　私と付き合って？　お兄さん困っちゃうなー」

「なに？　そういう意味じゃない？　ボスからの命令が来ている？」

「あー。そうか。君、敵なんだ。あっそう」

「そうだ。君の情報端末借りてくね。前のやつ使えなくなっちゃってさー」

「じゃーねー。ボスの中の人にヨロシク」

スウマキツミは薙高生に接触して情報を集める。
スウマキツミは宝くじの一等を連続して当てている。
スウマキツミは捕まらない。
スウマキツミは逃げ足が早い。
スウマキツミは時間を操作している。
スウマキツミはタイムリピーターである。
スウマキツミとは何なのか？

クローゼットの現有戦力は全て通用しなかった。至近距離から撃ち込んだはずの銃の弾丸すら当たらない。Ｐ２持ちに至っては、なぜか攻撃すら仕掛けられない。

スウマキツミとは何なのか？
兵藤カツヒコは部下からの報告を聞き、電子タバコを噛み締める。
タイムリピーターとは何なのか？

文字通り時間（タイム）を遡行（リピート）する者なのだとしたら。

俺達は「既に失敗して」いるんじゃあないのか？

兵藤カツヒコは部下に撤退を命じる。戦闘で分が悪いどころではない。メンバーの能力から癖まで、全て見透かされているという事実。
タイムリピーター。それは、深入りするにはあまりにも異常な存在だった。

第十話　藤王アキラ

放課後、藤沢カオリには、平安部には後から行くと伝えて、僕は教室に残った。
僕は情報端末の前で、学園ＳＮＳの検索エンジン、スクナヒコを起動する。

まず「モノボード」で検索してみる。
該当、なし。
次に「タイムリピーター」で検索してみる。
該当、一件。あった。

コミュニティ：タイムリピーター連絡室

１：必要な時に
２：誰が立てたの？
３：クソコミュ発見ａｇｅ
４：＜削除されました＞
５：＜削除されました＞
６：＜削除されました＞
７：＜削除されました＞
８：＜削除されました＞

僕は削除されたログが読めないか、ムツキのケータイに電話して訊いてみる。削除されたログは、手動で保存している人がいない限り読めないらしい。

しかし続けて、ムツキはこう言った。

「何を調べてるのかは知らないけど、情報部名誉部長の藤王（ふじおう）アキラなら、ログを持っているかもしれないわ」

僕は（聞き覚えはあるが）藤王アキラとは何者か、説明を求める。

ホントに何も知らないのね。そういいつもムツキさんは教えてくれた。

「通称、『魔王』よ。人が出来ることならなんでもできるって噂されてるの。天才ハッカー。数学者。物理学者。人工知能学者。ロボット工学者。学園ＳＮＳ管理者。新ＯＳ、シルバースネイルの上に学園ＳＮＳを移植したのも藤王アキラよ。でも――」

ムツキは言い淀んだ。

「――魔王と話すには対価が必要よ」

対価。それは通常の手段では入手できない、貴重な「情報」でしかありえないのだという。僕の知る限り、僕の手元には、そんな情報は存在しない。

僕が諦めかけたとき、平安部の横島ツカサ（こういうときだけは本名で呼ぶものだ）の顔が浮かんだ。彼なら、藤王アキラとのパイプを持っているかもしれない。僕は、そう考えて平安部の部室に向かった。

平安部で僕を待ち受けていた藤沢カオリと合流し、優雅な午後のティータイムが始まった。平安部の伝統として、ＢＧＭは吹奏楽部が担当している。なぜ放課後に紅茶を飲みながら「ワルキューレの騎行」を聞かなくてはならないのか、かなりツッコミたいのを我慢して、僕は邪を待った。

だが、今日の邪は忙しく、部活に顔を出せないらしい。ケータイにも掛けてみたが、圏外になっている。僕はふてくされながらクッキーを口に運んだ。意外に甘くておいしい。僕の彼女にはお菓子作りの才能がある。

「なあカオリ、モノボードって知ってるか？」

何気なく聞いたその質問に、意外な反応が返ってきた。

「黒木君……十年前の集団自殺事件を調べてるの？」

十年前？

あのタイムリピーターは、「これから対峙する」と言っていた。それが十年前ともなると、話が全く違ってくる。

あるいは、今度は二度目なのか。あの女は、「遮断」すると言っていた。すると前回は、モノボードを遮断できなかったのか。それとも――

「いや、別になんでもないんだ。忘れてくれ」

僕はお茶を濁す。心配そうな顔をするカオリ。

明日の放課後、図書館に行って十年前の資料を当たってみなければならないだろう。その情報と、モノボード再来の件の情報を魔王に渡して、僕はタイムリピーターの情報を得る。フェアな取引だ。

悪くない。

僕が最後に齧ったクッキーは、ふんわりとレモンの味がした。

第十一話　本の虫

薙刀高校の図書館は別棟になっている。
放課後、僕は図書館に向かう。

僕は日刊薙高新聞――新聞部が発行している――の十年前の記事を探しに、ここに来た。
だが、僕はその時知らなかった。情報部と図書部が敵対していることも、文芸部と図書部が親しいことも。
僕はそうとは知らないで、宿敵のテリトリーへと侵入してしまっていたのだ。
しかも図書館内ではケータイジャマーが働いていて、ケータイが自動的に圏外になることも知らなかった。

僕は書架の中を進む。ここには本当にたくさんの本が取り揃えられている。
「黒死館殺人事件」「ドグラ・マグラ」「虚無への供物」「匣の中の失楽」「エイボンの書」「無名祭祀書」エトセトラエトセトラ。
あまり本を読まない僕には、どの本が有名なのかは分からない。
厳重な鍵が掛けられた防弾ガラスのケースに入れられた本は、世界に数冊しか無い希少な本だったりするのだろうか。
僕は当初の目的も忘れて、色々な書架を見て回った。

そして、最初の攻撃は、僕が本棚と本棚に挟まれた場所に居る時に起こった。

コトリ。一冊の本が傾く。
コトリ。一冊の本が動く。
コトリ。一冊の本が飛び出る。

バサリ。一冊の本が落ちる。

なんだ？　今何が起きた？

バササササササ。周囲の書架の全ての本が磁石に引き寄せられるかのように引きずり出され、空中で支えを失っては落ちてゆく。

超常現象！　シークレットのＰ２持ちの襲撃か！

落ちた本は積み上がり、山を形成する。それが、次第に集まり、起きあがり、巨大なムカデのような形態を取った。

その虫の口から、分厚いハードカバーの本が、高速で射出される。僕は咄嗟にサイコキネシスを起動し、眼前にまで迫った本を静止させる。

だが。

「くっ……強い……」

本を動かす力は、僕がサイコキネシスで止めている力を僅かに上回っていた。

そこに、第二射目が襲う。僕は一冊目の本を躱し、サイコキネシスを解除する。同時にサイコキネシスで二冊目の本の軌道をずらした。ありえない速度で単行本が飛んでいく。直撃を食らえばひとたまりもない。

「『本の虫』と、私はそう呼んでいるのよ。ザ・トリガー」

僕から見えない位置から声が響く。

「誰だっ！　どこにいるっ！」

「私は図書部と文芸部に所属する、チーム『クローゼット』の一人、本田マユミ。あなたに、図書館の地理を熟知したこの私が倒せるかしら？」

「お前……本を武器にして使うなんて……本が悲しむぞ！」

その台詞に反応したかのように、虫は停止し、攻撃が少しの間止まる。しかし、それは嵐の前の静けさに過ぎなかった。

「あなたなんかに！　私の気持ちが分かってたまるもんですか！」

「子供の頃から本の中に逃げ込み！」

「本の中で暮らし！」

「本にしか救いを見つけられなかった私の気持ちを！」

次々に射出される様々な本を、紙一重で躱す。躱しきれない本は、腕でガードする。痛さを通り越して、腕の感覚が無くなる。折れてはいないが、ダメージが積み重なれば、このまま倒れてしまうだろう。

僕は別の本棚の後ろに逃げるが、無数の本の集合体、本の虫も追ってくる。自動操縦型のＰ２か。厄介すぎる。

「遅れけど、助けに来たわよ！」

ムツキの声がする。そう。僕達はチーム。あらかじめムツキたちと一緒に行動しておけば、こんなことにはならなかった。全ては僕のミスだ。

「ヤッホー！　到着ぅー！」

ヤヨイが僕の元に駆けつける。そのヤヨイをめがけて、すぐさま本が射出される。

「危ない！」
「平気だよー。ヤヨイ、強いもん」

ボクシングスタイルを取ったヤヨイは、高速で飛来する本を次々と拳で撃ち落としていく。まるで、拳が、ボクシンググローブのような不可視の力場で覆われているようだ。
確か、カップラーメンとかいうふざけた名前が付いていた能力だったはずだが、単純戦闘にも応用できるらしい。

「カップラーメンは三分間待つんだよー」

意味不明なことを呟きながら、ヤヨイは徐々に前進し、本の虫を射程に捕えた。

「ラッシュの速さ比べ、しようぜー」ヤヨイがくいくい、と挑発する。
「くっ！　本の虫よ！　そのまま敵を押し潰せ！」
「じゃーいくよー。オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！」

ヤヨイのそのラッシュは圧倒的だった。本の虫の手足は吹き飛び、胴体もまた、次々と削り取られていく。本は補充されていくが、そのスピードが破壊の速さに間に合わない。

「そんな……本の虫が……崩れる！？」

「チェックメイト！」本棚の後ろで、カエデの声がする。

後で知ったが、ムツキの遠隔視能力（リモートヴィジョン）で本田マユミの位置を発見し、

カエデが騒音消去能力（クリアノイズ）で近寄って、本田マユミの背中に銃口を突き付けたのだ。

「私には、私には……本しか無かったのよ……」眼鏡を掛けた、三つ編みの、本田マユミは泣いていた。

「あんたにはチーム『クローゼット』とやらの情報を吐いてもらう……。でもまあ、とりあえずは、本を片付けなきゃな」

僕は本の山のほうへと歩いていく。振り返り、一言台詞を投げ掛ける。

「あんたも手伝えよ、本田マユミさん」

「へ？」

こうして僕は、初のＰ２戦で、仲間に助けられつつ、辛くも勝利したのだった。

第十二話　世界監視機構

某月某日　某チャットルーム

［ｍｏｉｍｏｉ］　モノボードは増えるよ。
［ｍｏｉｍｏｉ］　モノボードは溢れるよ。
［ｙｕｔａｋａ］　その、モノボードって何？
［ｍｏｉｍｏｉ］　モノボードはモノボードだよ。
ｍｏｉｍｏｉ　Ｑｕｉｔ　（”Ｌｅａｖｉｎｇ．．．”）
［ｙｕｔａｋａ］　……何だったんだろ

世界監視機構。そんな冗談のような公式コミュニティがある。
世界各地の戦争、紛争情報から、今日どこそこに虹が出た、というような本当に些細な変化まで、文字通り総てを取り扱うコミュニティである。分類としてはオカルト系コミュニティに属しているが、その実態は違っていた。
世界監視チーム「エトピリカ」が、そのコミュニティを運営している。

問題の言葉は、モノボードというものだった。
最近急に聞かれ出した言葉だが、その意味も語源も、何の符牒として存在しているのかも分からない。
チーム、エトピリカのエージェント、駒鳥スズムは、その単語の意味を探し出すという、途方も無い仕事を任されていた。

「ｍｏｎｏ－ｂｏａｒｄ。こんなラテン語と英語がくっついた妙ちくりんな言葉の意味を探せと言われてもな……なんというか、うちチームのリーダーは馬鹿なんじゃないか……」

学園ＳＮＳを特権モードで操作しながら、駒鳥ススムは悪態を吐く。

世界監視機構を主催しているのが誰なのか、実のところ駒鳥ススムは知らない。というか、リーダーを始め、他のエージェントに会ったことさえ無い。

それでも業務を続けているのは、自分が何か、本質的に巨大なものに所属していたいという意識からだ。学園ＳＮＳを特権モードで動作させる許可を出せるほどに、巨大で謎めいた組織。

それとも、全ては学園ＳＮＳの内部でだけやり取りされる、記号遊びの結果なのだろうか。

だが、疑っていても愚痴をたれていても、指示はやってくる。

ほぼ日課のようになった、「モノボード」での全文検索。それが、今日だけは結果が違った。

検索結果、一件。

黒木シュンの検索履歴

タイムリピーター

モノボード

黒木シュン。こいつがモノボードに関する、何らかの手がかりを持っている。

世界監視チーム「エトピリカ」のエージェントである駒鳥ススムは、ケータイを取りだし、リーダーに確認のメールを送った。

一方、黒木シュンは、ムツキたちと一緒に、図書館で十年前の日刊薙高新聞の記事を調べていた。概要はこうだ。

何の関連も無い生徒達が突如、屋上に集まって起こった、集団飛び降り自殺事件。

警察は自殺の線で捜査を進めるも、全員のプロフィールはばらばら。全員が遺書無しで自殺している。アルコールもドラッグも検出されず。集団幻覚でも見ていたのか。そもそもなぜ彼ら彼女らが屋上に集まったのか。誰も止める者はいなかったのか。など、全てが謎のまま残されていた。

その記事の中に、モノボードという単語があった。

亡くなった少年の一人と特に親しかった匿名希望者は、「モノボードのせいじゃないですかね」と語っている。

モノボードのせい。

つまり、モノボードが集団自殺を引き起こした、ということ。

モノボード。その言葉の意味を、黒木シュンはチームに説明する必要に迫られた。

とりあえず、自分が見て、聞いた話を、そのまま、ムツキたちに伝える。

「モノボード。そして、学園ＳＮＳでのタイムリピーターのコミュニティ。どちらも証拠が実在している。夢を見ていた、というわけではなさそうね」

「これからモノボードが起こる――それって、また原因不明の集団自殺が繰り返されるってことなのかしら？」

「そんなことよりカップラーメン食べたいー」

僕はこの情報を元に、藤王アキラと接触するつもりだ。と皆に語った。

ムツキは反対した。魔王に目をつけられるということは、かなりのリスクがある。ただでさえＰ２は興味を引くのに、さらに興味を引いたら、魔王のコマにされかねない。

しかしカエデは賛成した。これ以上のモノボードの情報が無い以上、タイムリピーターの削除されたログを見て、情報を得るしか方法は無いということだった。

ヤヨイも賛成した。

「とりあえずやるだけやってみよーよ」

僕も同じ気持ちだった。

ムツキは、しぶしぶ藤王アキラへの連絡先が入ったケータイを取りだし、その後、ここが図書館であることを思い出した。ケータイジャマーのせいで、外に出なければ、ケータイは繋がらない。

そして、僕たちが図書館から出たところで、僕は駒鳥ススムと出会った。

黒いスーツを着込み、黒いサングラスを掛けている。

「俺はエトピリカの駒鳥ススム。なあ、黒木シュン。モノボードについて、あんた何か知ってるんだろ」

「いいえ。知りませんね。何です？　モノボードって」僕はしらを切った。

この情報は取引に使うものだ。こいつがシークレットであれ、誰であれ、容易に情報を渡すことはできない。

「ノーって言うのが速すぎるぜ。黒木シュン。『何か知ってる』って顔に書いてある」

僕は黙った。駒鳥ススムがチーム「ムツキ」と対峙したまま、二十秒が経過する。

「ススム、とか言ったな」僕は切り出した。

「この情報は魔王との取引に使うものだ、と、あんたのリーダーに伝えろ」

駒鳥ススムは素直に従った。ケータイを取り出し、少し躊躇った後、リーダーに電話を掛ける。

「ええ、はい。この情報は魔王絡みらしいです。どうしますかね？　え？　今から出向く？　直接？　図書館前にですか？　はい、俺は帰ればいいんですね。分かりました」

「俺は帰ることになった。その代り、うちの――世界監視機構――エトピリカのリーダーが五分後にここに来る。それまで待っててくれ」

僕たちは待つことに決めた。そしてやってきたのは、意外な人物だった。

第十三話　情報交換

「魔王と魔女の密会なんて、すっぱ抜かれたら大ニュースになるわよ」
「この店に盗聴器は無い。少しくらいは大丈夫さ」

藤王アキラは魔女に問う。
「モノボードって何だ？」

魔女はパフェを掬う。
「どんなに手を伸ばしても届かなかった全てのものよ。言語化も思考化も不可能なもの。語りえぬもの。よく言えば可能性の麦束。悪く言えば絶望の怨嗟」

魔王はさらに問う。
「モノボードに触れたら？」

魔女は気だるそうに答える。
「モノボードに触れると、人は人で無くなってしまうの。人は弱い生き物だから。そして、モノボードは増殖する」

「ここの勘定、払っておいてね」
魔女は席を立つ。
水城アキラ。ウェーブのかかった金髪のショートカットの少女は、傭兵にして魔女。魔女にして傭兵。薙高の魔女は戦場より帰還せり。鉄火の十字架を持って、いざ、参る。

黒木シュンは目を丸くしていた。学内巡回バスから図書館前に降

りてきたのは、どうみても銀色の人型ロボットだったからだ。その挙動は人と見紛うほどに人間らしく、その頭部は丸い。てくてくてく。それが滑るように、器用に歩いてくる。

「ま、まる!?」ムツキが驚く。

「やっほームツキ。お久しぶり。元気してた？　俺はロボットの『丸』。三角と四角は現在別行動中だ。で、お前が藤王と取引したいって言ってた黒木シュンか」

「あ、ああ」僕は動揺を隠して答える。

「俺と藤王は基本的に同一人物だと思ってくれ。音声回線も映像回線も全部藤王のアトリエに繋がっているからな」

「で、情報というのは?」声の質が変わる。たぶんこれが、藤王の肉声なのだろう。

「僕が提供できるのは、モノボードという言葉の意味だ。十年前、この学校で集団自殺事件があった。モノボードはその原因となったものだ。タイムリピーターの一部は、それを遮断するために存在しているらしい。だから、僕はタイムリピーターのログが欲しい」

「へえ。それを図書館で調べたのか。十年前の事件とは、盲点だったな」

藤王は僕の努力に感心したようだった。

「ログか……えーと。タイムリピーターコミュニティのログは、あるにはある。俺も見たいから、いちど復活させてみようか。十秒待ってくれ」

そう言うと、丸は情報端末を取りだして、ホログラム・ウィンドウを開いた。映画スターウォーズで見たことがあるが、まさか実用

化されていたのか。人型ロボットの丸、三角、四角といい、ホログラム・ウィンドウといい、藤王の周囲技術はオーバーテクノロジーすぎる。それゆえに、魔王と呼ばれるのか。

「あった。これだ」ホログラム・ウィンドウに、ログが表示される。

コミュニティ：タイムリピーター連絡室

1：必要な時に

2：誰が立てたの？

3：クソコミュ発見ａｇｅ

4：猫殺しのエイラ

5：鴉殺しのティガ

6：探偵のスウマキツミ

7：魔術のイズマエル

8：遮断のトキコ

「この名前に見覚えは？」藤王が問う。

「遮断のトキコとは、一度、会ったことがあります。たぶん、彼女だと思います。自分はタイムリピーターで、モノボードを遮断すると言っていました。それと、仲間を作れ、と」

「俺はスウマキツミとイズマエルを知っている。前者は薙校の生徒に執拗に接触してモノボードの噂を集めている。後者は……このOS、シルバースネイルのカーネル開発者だ。伝説のプログラマだよ。バグがやけに少ないOSだと思っていたが、そうか、時間遡行者（タイムリピーター）が何度も何度も作り直していたわけか……」

丸は天を仰いだ。OSの開発には多大なリソースが必要とされる。イズマエルは、藤王も少なからず尊敬していた人物なのだろう。

「他の二人は……まさか猫や鴉を殺すとタイムリピート（タイムリピート）するとか？」

そんなことで時間遡行が可能になるとは、俄かには信じがたい。

「その可能性も否定できないだろう」丸はしっかりと僕のほうを向いて、答えた。

「有意義な情報交換だった。ザ・トリガー。今度は生身で会うことになるかもな……」藤王の肉声が途切れる。

「……ってなわけで、用事が済んだので俺は帰る。お前らも帰るんだろ？　あと一分で、また学内巡回バスが来るぜ」

僕らは丸と一緒にバスに乗り、降りて別れ、情報部に戻った。

考えるべきことはたくさんあった。モノボードのこと。タイムリピーターたちのこと。遮断のトキコと名乗るタイムリピーターのこと。

情報部に戻ると、僕は急に眠気に襲われた。しばらく、僕は椅子の上で眠った。

第十四話　オカルト部

次の日の放課後。そういえばオカルト部に顔を出していなかったな、と僕は思った。

前回のようにシークレットに襲われるといけないから、ムツキ、カエデ、ヤヨイの三人も連れて行こう……と思っていたら、藤沢カオリが僕の腕を掴んでいた。軽くウェーブのかかった髪の毛を、僕の肩に押しつけてくる。

「昨日はどこに行ってたんですか？」

「と、図書館で調べ物を……」僕は少し挙動不審になる。

「言ってくれたら私も一緒に行ったのになあ」恨めしそうにカオリは言う。

「えーっと……」

「じゃあ、今日は平安部でお菓子を食べるんですよね？」と、カオリは確認してくる。

「いや、今日はオカルト部に顔出しに行く予定なんだ」僕は予定を告げる。

「占いに興味があるんですか？　私も興味あります。一緒に行ってもいいですよね？」

何か悪い予感がする。連れて行ってはまずいような気がする。

だが、助けを求めようとムツキのほうを見やると、ムツキは肩まで垂らした黒髪を弄りながら、僕のことを見てにやにや笑っている。

カエデはなぜか恥ずかしがっているようだ。

「ラブラブですねー」ヤヨイ。お前は黙ってろ。

結局、僕は藤沢カオリを振り切れず、一緒にオカルト部に行くことになった。

何か悪い予感がするのだが……仕方がない。

学園ＳＮＳで経路探索する。オカルト部は、地下二階にあった。射撃練習場といい、Ｐ２訓練場といい、この学園には地下に謎の施設が多すぎる。エレベータにカオリと二人で乗り、地下二階に到着する。天井を見ると、オカルト部はこちら、と書いてある。矢印に沿って歩いて行くと、禍々しいオーラが発せられた扉があった。

「『この門をくぐる者は一切の希望を捨てよ』って書いてありますねー」

カオリに聞くまでも無い。ダンテ・アリギエーリの代表作「神曲」の、地獄の門のパクりだ。悪趣味にもほどがある。

「とりあえず入るか……って、取っ手がないぞ」

すると、ドアが勝手に開いた。

「自動ドアですね」

そうなのだろうか。そうなのだろう。内部で部員が来客を確認、操作して扉を開け閉めしているような気もしたが、さすがにそんな面倒なことはやっていないだろう。と、信じたい。

薄暗い室内に入る。所々、ぼんやりとした、松明のような橙色の明かりがある。頼むから普通に蛍光灯か白色ＬＥＤ電球を使ってくれ。頼むから。

すると、今まで開いていた入口の扉が勝手に閉じた。光源が減り、目が慣れるまでほとんど何も見えなくなる。

「ようこそ！　私はオカルト部部長の金沢という者です。君の噂は

かねがね聞いているよ、黒木シュン君！」

おそらく天井に備え付けられたスピーカーから、謎の野太い声が響く。

つまらない演出だが、カオリはきゃーこわいーとか言いながら抱き付いてくる。お前それ絶対わざとだろ。

音響からして、かなり広い空間のようだ。松明が等間隔に並んでいて、道を形成していることに気付く。

「さあ、前に進むのです、黒木シュン君。いや、Ｐ２、ザ・トリガー」

「僕をその名で呼ぶな！」なぜだか、藤沢カオリにだけは知られたくなかった。

僕は普通の人間だ。普通に産まれて、普通に育ち、普通に学び、普通に大きくなった。僕は人間だ。確かにトラブルメーカーなのかもしれないが、決して超常現象の付属物じゃあない。藤沢カオリには、そんな苦悩を知られたくはなかった。

「まあいいでしょう。それでは入部テストです。君には、悪魔アガリアレプトと戦ってもらいます。戦いに勝てば、貴殿の入部を認めましょう！」

がるるるる。前方の、松明が円を描いている場所から、野獣のような声がする。不味い。Ｐ２同士の戦闘に、藤沢カオリを巻き込んではいけない。彼女を庇いながらでは戦えない。

「逃げろカオリ！　奴の狙いは僕だ！　僕を信じて扉のところで待っていてくれ」

「え？　何？　何が起こってるの？」

「いいから逃げろ！　カオリ！」混乱したカオリに、僕は叫ぶ。

僕は前方に向き直り、言い放つ。

「お前は僕を怒らせたぞ。無関係なカオリを巻き込みやがって！」

僕はＭ９を腰から引き抜き、二発、射撃する。だが、当たった気配は無い。恐る恐る前方の、松明の円の中に移動する。相変わらず野獣のような声が響いている。

目が慣れてきたからか、足場ははっきりと見て取れる。だが、敵の姿が無い。

どすっ。ボディに重い一撃を食らう。そして理解する。こいつは、悪魔は、目に見えないのだということを。あるいは、普段は透明になっていて、攻撃の時だけ実体化するのかもしれない。

「どうする？　銃を乱射するか？　それでも効果は薄い、か……」

ぐぎっ。次は効き腕を捻られ、僕は拳銃を取り落とす。だが、やはり、見えない。不可視の悪魔は、僕の攻撃手段を着実に奪っていく。

「それなら……こうするまでだ！」

僕は目を瞑った。僕のサイコキネシスは、これまで専ら目視で照準を定めていた。目で見ながら、曲がれ、捻じれろと、念じていた。だが、今回はそうはいかない。やったことのないことだが、やるしかない。

（さあ、攻撃してこいよ。その瞬間、その方向に、僕の本当の全力

を叩きこんでやる）

どがっ。今度は背中だった。その刹那、僕の背後でサイコキネシスが炸裂した。物体がそこにあるかないか、分からない場所への、無差別サイコキネシス。キュゴッ。空気が高速で空回りをし、悪魔の身体がバキボキとへし折れる音がする。瞳を開け、その音を頼りに、さらなる追撃を行う。

空間よ回れ！　その場にいる全てを巻き込んで、回転しろ！

その作戦は上手く行ったようだった。よくわからない不可視の悪魔は、地面に叩きつけられ、動かなくなった。僕は落とした拳銃を拾い、そこに転がっているであろう存在に対して、引き金を引いた。三発撃ち込んだところで、声が響いた。

「おめでとう。黒木シュン君。君は悪魔アガリアレプトを倒してみせた。入部を認めよう」

「黙れ。さっさと照明点けて土下座しろ。無関係な藤沢カオリを巻き込もうとしやがって……貴様もミンチにされたいのか！」

パッと、照明が点いた。藤沢カオリの横には、扇子で顔を隠した邪（よこしま）がいた。ムツキ、カエデ、ヤヨイもいる。

「そう吠えずとも、藤沢カオリは麿の名にかけて無事でおじゃる。オカルト部の入部試験、麿も見学させてもらったでおじゃるよ」

カオリは、僕の元へと駆け寄ると、僕のことをぽかぽか殴り始めた。

「バカ！　バカバカバカ！　Ｐ２のこと、なんで話してくれなかったのよ！」

「藤沢……僕のこと、嫌いになったか？」
「そんなわけないじゃない！　私は、私にちゃんと話してくれなかったから怒っているの！　最初からＰ２だって言ってくれれば、私、今日みたいに足手まといにならなくて済んだんだよ？」
「ごめん……カオリ」
僕は藤沢カオリをしっかりと抱きしめた。
その背後では、神出鬼没な吹奏楽部の奏でるＢＧＭ、アントニオ・ヴィヴァルディの「四季：春」が、けたたましく鳴り響いていた。

第十五話　オカルト部その2

「やあやあ黒木君。私が部長の金沢だ」

オカルト部の最奥。クマのぬいぐるみが、椅子の上で喋っていた。

「映画チャイルド・プレイのチャッキーか」僕はため息を吐く。

「なかなか理解が早い。いや、色々魔術の実験をしていたら自分の体に戻れなくなってしまってね。はっはっは。金沢先輩ならぬクマ沢先輩と呼ばれるようになってしまった」

「えー。それは何年前の話でしたっけー」ヤヨイが聞く。

「五年ほど前の話だ。さすがに体がクマのぬいぐるみでは卒業できんらしくてな。私は意識不明ということで留年を繰り返している。はっはっは」

「それは自慢になるのか……」僕は頭痛がしてくる。

「ところで、だ。黒木君。悪魔アガリアレプトを倒した者には、一つの質問権が与えられるのだよ」

悪魔アガリアレプトは、ヨーロッパの伝承に伝わる悪魔の一人である。グリモワールという文書によれば、アガリアレプトはルシファーの配下の悪魔であり、世界中の政府や組織が抱えている秘密を明らかにし、どんなに崇高な謎でも解明してしまう力を持つとされる。

この悪魔を召喚し、従えた者は、一つの質問をすることができる。

クマ沢が蘊蓄を語った。

僕は、顔をひきつらせて笑う。悪魔を倒したら質問ができる？

そんな都合のいい話が、本当にあるのか？

「とりあえず問うてみることでおじゃる」と邪は促した。

それで僕は何を問うか考えて――問いが最初から決まっていることに気付いた。

「ならば問う。悪魔アガリアレプトよ。なぜ僕はＰ２なんだ？　なぜ僕がザ・トリガーでなければならないんだ？」

「……では汝の問いに答えよう……」

虚空に声が響いた。それは時には嘲る赤子のようであり、時にはしわがれた老人のような声だった。

「……お前は自分の力と役目をまだ知らぬ……タイムリピーターは、ザ・トリガーたるお前を選んだ……お前は多くのトラブルに遭遇し、成長するだろう……お前はアンチ・モノボードとして周到に準備された者なのだ……」

突如として疾風が渦を巻き、僕は目を瞑った。

目を開けた時、悪魔はもう既に去っていた。

「タイムリピーターが、僕をアンチ・モノボードとして選んだだと？　僕は……僕は、他の誰かの道具じゃない！」

僕は言う。だが、答える声はもうなかった。

「さて、君の能力『ザ・トリガー』だが……破壊力Ａ　スピードＢ　射程距離Ａ　持続力Ｃ　精密動作性Ａ　成長性Ｓ　といったところかな？　銃弾を的中させる能力、そして見えないものを倒す能力……君のＰ２はまだまだ成長の余地がありそうだ」

クマ沢が冷静に分析する。

「僕はこんな能力を望んだわけじゃない……」

「だが、現実として能力はある。君は戦いの運命（さだめ）から逃げ出すことはできないのだよ」

クマ沢はひょいと椅子から降り、僕の周りを歩き回りながら、言葉を続ける。

「準備することだ。君は軍事部にも籍を置いている。武器と仲間を集めることだ」

クマ沢は僕の目の前に立ち、片手を上げて、僕を指さす。

「そして警告しておく。新聞部に注意することだ。君は新聞部に入部するという選択肢を蹴った。つまり事実上、君は新聞部と敵対していることになる。彼らの『特務取材』は、生易しくは無いぞ」

「そうかよ。シークレットの他に、新聞部までもが敵に回るのか……僕はよっぽど人気者らしいな」僕は皮肉る。

「そうだとも。君は常に人気者なのだよ。それが、『ザ・トリガー』。ありとあらゆるイベントを引き寄せる、君の能力だ」

そこで、僕はオカルト部ならこの能力を消し去れるのではないかと期待していたことに気付いた。僕はすがるようにクマ沢を見つめて、言葉を紡ごうとする。

だが、クマ沢は僕の言葉を先読みしたかのように言い放った。

「君の能力は消し去れないよ。君は永遠に、ザ・トリガーだ」

だから僕は、小さく畜生と、呟いた。

第十六話　魔女、水城

薙高には、毎年、新聞部戦争と呼ばれるイベントがある。

タイムリミットは最初の部活動（初期部活動）が決まる、入学から一週間目。

それまでに新聞部に所属していないＰ２は、もれなく新聞部から特務取材、いわゆる「Ｐ２狩り」を受ける羽目になる。尤も、新聞部に所属したからといってＰ２持ちに平穏が訪れるわけではない。基本的に、Ｐ２持ちは対Ｐ２チームに投入される。いずれにせよ戦闘要員である。つまり、静かに潜伏していることが最適解なわけだが、僕はもう既に、新聞部にマークされるに十分な厄介事に巻き込まれまくっている。

ともかく、入学から一週間後に起こる、Ｐ２特務取材。別名、新聞部戦争。

僕はその迎撃準備のために、軍事部を訪れていた。

「名誉部長、水城殿に、敬礼！」

今、僕たち軍事部部員一同は、直立不動のまま、敬礼の姿勢を取っている。

「休め！」

足幅を広げ、手は後ろに組む。僕は少しだけ、肩の力を抜く。

そう。何を隠そう、薙高トップメンバーの一人、軍事部の最高権力者、通称「魔女」水城が、いま僕の目の前に立っているのだ。

ウェーブのかかった金髪。整った美しい顔立ち。間接的に話した

だけの「魔王」とは訳が違う。ただそこに存在しているだけで、強烈な威圧感（プレッシャー）を感じる。僕は緊張のあまり、声が出せない。

「それで、彼が入部してきたP2持ちなわけね」

「イエスサー！　そうであります！　サー！」

「能力名、ザ・トリガー。あらゆるイベントを引き寄せる特異体質に、付属能力はサイコキネシス」

「イエスサー！　そのとおりであります！　サー！」

「……別に、普通に話してくれればいいのに」

「ノーサー！　これは敬意の表明であります！　サー！」

僕としても先輩たちに普通にしていてほしいが、部のプライドとか、後輩の教育とか、色々ややこしいものがあるらしい。

「それで、彼は使えそうなの？」

「ノーサー！　彼は自分の身を守るので精一杯であります！　サー！」

言われて少し悔しくなる。軍事のプロフェッショナルが揃う軍事部において、確かに僕は足手まといだ。これまでにいくつかの能力を開発してきたとはいえ、僕にはまだまだ実戦経験が足りなさすぎる。

「黒木君、あなたから何か質問はあるかしら？」

水城先輩はうつむき、至近距離から、上目遣いで僕を値踏みする。僕は僅かに戸惑ったのち、皮肉を口にするか考える。いいや、考えるな。言ってしまえ。どうにでもなれ。

「水城先輩は、藤王アキラ先輩と付き合ってるんですか？」

一瞬にして、部室内の温度が下がる。部員の全員が凍りつく。絶対に、魔女と魔王、お似合いのカップルですよね、とか言える雰囲気ではない。

「……面白い冗談ね。新兵君」

ごすっ。僕の腹部に。水城先輩の重いジャブがめり込む。

僕は痛みに耐えかねて床に崩れ落ち、呻き声を上げる。骨は折れていないだろうが、内臓が痛い。とにかく痛い。

「上等兵！　新兵全員にグラウンド二〇周！　その後サバイバルゲームワンセット！」

新入部員に、恨めしそうな目で見られる。

でも、僕はその罰を甘んじて受け入れる。甘やかされても始まらない。まず、自分の身を守れる程度に鍛えてもらわなくては。

「すいません。入部を希望する者ですが」

そんなとき、誰かが扉を開けて中に入ってきた。その時僕は知らなかったが、彼の名と顔はもはや薙高では有名であった。全員が呆然とした顔で、ピクチャレス、と呟く。

音無（おとなし）ヨウイチ、通称、瞬間記憶能力者（ピクチャレス）と僕との出会いは、そんな感じで始まった。

第十七話　ピクチャレス

グラウンド二〇周。
この罰ゲームのような仕打ちに、突如乱入したピクチャレスは、むしろ喜んで参加したように見えた。

ピクチャレスは、厳密に言えば、Ｐ２持ちではない。瞬間記憶能力を持つ一般人に過ぎない。しかし、彼の瞬間記憶能力は勉学にもスポーツにも（！）応用が効くため、むしろＰ２である僕の方が気後れしてしまう有様だった。
しばらくの間、ピクチャレスは、僕と並走した。僕はピクチャレスが何か言葉を発するのではないかと、びくびくしながら走っていた。

「ザ・トリガー。実は個人的な相談事がある」

ピクチャレスが僕を指名する。

「どこで僕の名を？」
「日刊薙高新聞は読んでいないのか？　なら読んだ方がいい。学園ＳＮＳで購読できる。君のことが特集されてる」

驚いたことに、僕が知らないうちに記事が書かれていたらしい。新聞部員には会ったことが無いと思ったが、一体どこで何を見ていたというんだろう？　あるいは、誰かが情報を売ったのか。僕は邪島（よこしま）が扇子の後ろでほほほと笑う姿を想像した。

「単刀直入に言おう。実は、俺には入学以前の行動の記憶が無い」

僕は唖然とするより他無かった。

一瞬、走るのが乱れて転げそうになったほどだ。他に何ができただろう。学園最高の知識を持つであろうピクチャレスが、実は記憶喪失だったなんて。

「勉学の類の記憶はある。だが、おそらく俺が所属していたであろう組織の情報が無い。何が起こったか分からないが、組織ごと消滅したらしいと予想している。俺には仲間が必要だ。自分の記憶を探すためにも。自分の能力を生かすためにも。だから、ザ・トリガー。俺と友達になってくれないか？」

僕は喜んでオーケーした。薙高の有名人、ピクチャレスの友人。もちろん、そのことが今後どういう意味を持ち始めるかについて、漠然とした不安はあったが、それでも僕はオーケーした。モノボードにしろ新聞部にしろ、いつか誰かと戦うなら、仲間は多い方がいい。

「それと、この後のサバイバルゲームでは、僕が指揮を執ることにする。これはグラウンド二〇周が終わるまでに、全員に通知する予定だ」

言われて、僕はサバイバルゲームの件を思い出す。

新入生、対、先輩たち。明らかに勝たせるつもりがないその戦いのことを、僕はすっかり忘れていたことに気付かされた。

ピクチャレスは、実戦経験のほとんど無い僕ら新入生を率いて、先輩たちにまさかの一矢を報いるつもりらしい。僕は、若き司令塔となるであろうピクチャレスを想像し、胸を躍らせた。

ピクチャレスは、速度を上げた。先行する新入生にも、指揮を執る旨を伝えるためだろう。その走りには無駄が無く、一流のアスリ

ートを思わせた。後で聞いた話だが、ピクチャレスは運動選手の動きをモーション・キャプチャすることで、コピーすることができるのだという。僕には、ピクチャレスが余程の余裕を持ってギアを上げたように見えた。

グラウンド二〇周が終わるころには、だいぶ日も落ちてきていた。僕らは疲れ切った様子で、先輩たちの誘導を受け、サバゲー場に集合する。

サバゲー場は基本的に林である。軍事部が実習を行うための施設の一つで、ロープで区切られた林の区間に、いくつかの障害物を置いたような設計になっている。

これから始まるのは、サバイバルゲームの基本となる、フラッグ戦である。旗を取った方が勝ちになるゲームだが、実際は旗を取ることはまずない。制限時間内により多くの敵に弾を命中（ヒット）させ、優勢勝ちに持ち込むのが一般的な決着方法だ。

今回は、双方が同じ薙高御用達のハンドガン、M9だけを使う、ワンメイクゲームという形式で開催される。また、最初に支給されるカートリッジには上限があることから、事実上の弾数制限戦でもある。

全員が顔まで覆うゴーグルを支給され、それを掛ける。これは安全のため、ゲーム終了時まで決して外されることはない。

しかし一つ重要な、一般的なサバゲーと全く違う点があった。このM9は本物の銃なのである。撃つのは訓練用のゴム弾とはいえ、弾速は速く、当たれば割とマジで倒れる。当たり所が悪ければ、即保健室行きである。サバゲーでは、当たれば「ヒット！」と叫んでゲームから離脱しなければならないが、担架で運ばれる事態も十分ありえた。

先輩の号令で赤（新入生）と青（先輩）のそれぞれの陣地に散ると、もう僕たちは走り疲れたなどとは言っていられなくなる。ピク

チャレスを司令塔とした赤チームは、先輩たちに決して勝てないとしても、どうにか意地を見せつける以外に道は無いのだ。

サバゲー場にホイッスルが鳴り響き、ピクチャレスの掛け声で、僕たちは散開する。日が落ちたサバゲー場で、要所に先回りした先輩たちを見つけ、反撃するのは至難の業だ。だが、やるしかない。僕たちは、今、間違いなく戦場に居るのだから。

第十八話　サバイバルゲーム

「邪魔しちゃ悪いですかね？」

ひょろりと長い男、エトピリカの駒鳥ススムが、水城に問いかける。

黒いスーツにサングラスという、一種の職業的な恰好は、この学園ではむしろ目立っていた。

「観戦するくらいなら、かまわないわよ」

「……ここに来る途中、新聞部部員を四人ほど始末しました。死んではいないはずです」

「そう」

「狙いはやはりピクチャレスですかね？」駒鳥ススムは問う。

「そうね……あるいは、ザ・トリガーかも」水城はくすりと笑う。

パンパンと、銃撃戦が始まる音がする。

ノートパソコンのディスプレイ上で動く赤と青の光点を覗き込んで、駒鳥ススムは面白そうな顔をする。

「時代はハイテクですか」

「ゴーグルにＧＰＳが埋め込んであるの。戦闘後の反省会には必須ともいえるわね」

確かに役に立つだろう。と、駒鳥ススムは思う。まあ、自分には関係ないが。

「しかしあなたも、出世欲の無い男よね」

「まあ、俺は秘密組織に属してるってだけで満足ですから」

「それで今回は何の用なの？」
「指令は、ピクチャレスの護衛です。彼はＰ２持ちではないですが、それゆえに、万一新聞部からＰ２認定を受ければひとたまりもないでしょう」
そうかしら、と水城は言った。
こうしている間にも、彼は仲間を造り上げていっているわよ、と。

「ポイントマン！　あまり前に出すぎるな！　フロントマン！　ポイントマンを援護しろ！」
ピクチャレスの指示が乱れ飛ぶ。サバゲー経験者と、未経験者で、アタッカーとディフェンダーを形成している。ディフェンダーは旗の周囲を警戒するだけで良いので、比較的楽なポジションだ。
僕が驚いたのは、軍事部に所属していながら、銃器の取り扱いに詳しくない者がいたことだ。既に支給されていた銃を、飾りか何かだと思っていたらしい。やれやれ。引き金を引くのが初めてだという連中は、さすがに戦力として計算できない。

「ヒット！　やられました！」
「同じくヒット！　戦線を離脱します！」
「アタッカー！　死ぬなら弾を使いきってから死ね！　出し惜しみするな！」
「了解！」
「アイアイサー！」
僕の担当はスナイパーだ。Ｍ９は拳銃であり、決してスナイプ用の銃ではない。が、僕のＰ２と組み合わせれば、長距離のスナイピングも可能になる。

尤も、そんなに簡単に位置バレをしてくれる先輩たちではない。僕はただ、時折視界に入る動く標的に、ピンポイントで数発ずつ狙撃していくだけだ。距離が遠すぎて、戦果の確認はできない。

「スナイパー、後退してディフェンダーの援護に回れ！」

あっという間にアタッカーは摩耗し、不慣れなディフェンダーまでもが先輩たちの餌食になっていく。せめて旗を取られることだけは防ごうと、ディフェンダーたちは必至の迎撃を行う。僕は、そのサポートに回る。

しかしそのとき、僕の肩に弾丸が着弾する。

「ヒット！　スナイパーやられました！」

僕は宣言して、セーフティーゾーンへと移動する。ボロ負けだ。ピクチャレスの指示はなるほど的確だが、それを実行に移す為の個人の技量が全く追いついていない。

ホイッスルが鳴り響き、僕たちはようやくゴーグルを外す。赤チームの負けが確定する。

結論から言えば、赤チームの戦果はゼロであった。青チーム、先輩たちの完全試合である。

全員が集合し、校舎の壁面を巨大なスクリーンとして、どのように赤チームが敗北していったかの映像が映し出される。先行し過ぎたポイントマン。援護できなかったフロントマン。終始役に立たなかったディフェンダー。動きを悟られたスナイパー。散々である。

その事実を噛みしめながら、僕ら新入生は水城先輩の薫陶を受ける。

「新兵諸君。今回は、個人の技量不足が敗因となったことは言うま

でも無いだろう。だが、戦略的、戦術的に負けていたということはなかった。司令塔たるピクチャレスは、各タイミングでの現有兵力を適切に運用すべく最大限努力した。その努力に報いられなかった者たちは、己のやるべきことを悟っているかと思う。明日からの、射撃訓練などの各自の努力を期待する」

「イエスサー！　努力します！　サー！」全員が斉唱する。

そこには、軍事知識に甘えるだけのなんちゃってミリオタは、一人もいなかった。我々は一心同体の戦力であり、ピクチャレスの指示に応えるべく、無限に努力すべきことは明らかだった。

そうして、僕たちのサバイバルゲームは終了した。もはや言葉は要らなかった。戦友たちと、僕らは笑い合った。

その夜。僕は初めて学園ＳＮＳで日刊薙高新聞を読んだ。学園ＳＮＳ自体はインターネット上に存在するので、薙高生なら寮からでもチェックできる。

「特集！　ザ・トリガー！　彼は戦争の引き金を引けるのか？」

「ザ・トリガーは藤沢カオリと熱烈交際中！？」

僕は赤面した。こんな記事が人目に晒されていたのか……僕はクッションに顔を埋めて、しばらくの間、じたばたと悶え苦しんだ。

こうして、薙高の夜は更けてゆく……。

第十九話　凍結者（フリーザ）

僕と音無ヨウイチ（ピクチャレス）は、食堂で昼食をとっていた。
僕らを中心に、軍事部の面々が食堂に集って円陣を組んでいる。
新聞部戦争の時期に入ったため、新聞部の襲撃を警戒しているのだ。
その周囲には、駒鳥ススムもいる。任務、ピクチャレスの護衛は、まだ続いているらしい。

シーザーサラダを食べながら、
「新聞部に囲まれているぞ」と、ピクチャレスが告げる。
「そうなんだ。僕ら人気者だね」と、僕はおどけてみせる。

「フリーズ！」

声が響くと、僕らを中心とした半径十メートルのものが静止する。
僕とピクチャレスは、いわゆる金縛りに遭う。

「俺は新聞部の――凍結者（フリーザ）。俺の指定したモノはその場で静止する……。ピクチャレスは回収させてもらうぞ、ザ・トリガー。あんたのサイコキネシスの能力は把握している。妙な抵抗はしないほうが身の為だぜ……」

ザラッ。音がする。何かが始まる。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

僕は口元を歪めて笑う。これから始まることを考えると、笑わずにはいられない。ピクチャレスは本当に頭が切れる。朝のうちに、こんなものを軍事部から借りてくるなんて。白くて丸いもの。それ

が本当に、沢山。

「く、首から上の行動だけを許可する！　いま何をした！　答えろ！」

「ザ・トリガー。答えろだってさ」ピクチャレスが促す。

「何って……ちょっと軍事部から借りてきたＢＢ弾をこぼしただけですよ……３５００発入の袋入りのやつをね……」

ザアアアアア……

ＢＢ弾は、足の踏み場もないほど、床一面に広がる。

それで、新聞部の後衛たちは、突っ立ったまま動けなくなる。歩けば転ぶと分かっているからだ。

「僕はこう考える……『俺の指定したモノはその場で静止する』とあんたは言った。では、あんたはいくつまで指定できるのか？　このＢＢ弾の全てを止められるのか？　無理ですよね。なら、僕たちの勝ちだ」

ＢＢ弾は浮遊し、立ち上がり、白い人の形を取る。

「ザ・トリガー、ＢＢモード。今日、いや、ついさっきピクチャレスが発案したんです。面白いでしょう？　僕のサイコキネシスには、なるほど、まだまだ成長の余地があるらしい」

「ＢＢ弾が人型になって……そんな……静止しない……そんなバカな！」フリーザは焦って汗を流す。

「一個止めても十個止めても無駄ですよ。全部止めなきゃ、こいつの動きは止まらない……なにしろ、ＢＢ弾全部がこいつの本体なんですから」僕は説明する。

「じゃあ、そろそろ本気で戦いましょうか」

ＢＢ弾は凝集し、無数の拳を形作る。

オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！

フリーザは、ＢＢ弾が固まってできた「拳」の突きの連打（ラッシュ）を直に食らう。

一つの拳を止めても、意味は無い。そのすぐ後ろには、新たな拳が控えているのだから。フリーザは殴られ続ける。能力の通じない相手と戦ったことがないのか、ボロボロになっても助けを求めようとしない。

「止まれ！　止まえええええええええ！」

フリーザがＢＢ弾のほうに集中しているからだろうか。僕らの身体は、既に動くようになっている。そのために、僕は彼のほうに向きなおり、サイコキネシスの狙いも、ますます的確に、強力になる……という悪循環にフリーザは嵌っている。

「クソぉおおおおおおお！　撃てえええええええええ！」

そこでフリーザは、初めて新聞部部員に指示を出す。僕は僕の周囲の空間をサイコキネシスで歪める。

キュゴッ！　僕のサイコキネシスで進路をずらされ、新聞部の撃った全弾が外れる。

そこで立ちあがったのが軍事部だ。彼らもまた、金縛りが解け、動けるようになっていた。

銃を発砲した新聞部部員に狙いを定め、次々と撃ち抜いていく。

狙いと発砲に躊躇いは無い。『死ぬなら全弾使いきってから死ね！』
昨日のピクチャレスの教訓が、ここで生かされていた。
新聞部員は床のＢＢ弾で動けず、あるいは転び、ろくな抵抗もできずに、全員が銃撃を受けて行動不能に陥った。

「まあ、今日はこんなところかな」僕は呟く。
「黒木君……君と友達になっておいて、心底良かったと思っている。いや、マジでそう思う」ピクチャレスが尊敬の台詞を述べる。
「そんなに褒めるなよ。次からはもっと厳しくなるんじゃないかな。だってほら、僕、ザ・トリガーだし」

新聞部　凍結者（フリーザ）、リタイア。

ＴＯ　ＢＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＥＤ……

第二十話　ロスト

「イズマエル……タイムリピーター……必ずその尻尾を掴んでやる」

藤王アキラは自身の寮、通称「アトリエ」に籠っていた。藤王は、目を覆うヘッドセットを付けている。藤王の角度を検出して表示する、全方位型デスクトップが眼前に展開されているのだ。

午前と午後の授業は、人型ロボット「丸」に代理で受けさせている。これは先生たちも渋々ながら容認していることだ。丸は、藤王の代理として機能するだけの知性を持ち合わせていた。国語で当てられれば朗読もするし、数学で当てられれば解を述べた。

単にデスクトップ、という表現は適切ではない。全方位型デスクトップは、三百六十度の作業用空間を提供する。そこに浮かんだ四十個を越すヴァーチャルコンソールをてきぱきと操作しながら、藤王は薙高校内を移動する物体を洗い出す。全ての物体をマーキングして、挙動不審な物体をピックアップしてゆくのだ。

その結果。

ロスト。そう呼ばれる現象が、薙高校内で頻発していることが判明した。

どこかの建物に入ったまま、出てこない生徒。出てきたとしても、全く別の建物から出てくる生徒。この全く理由が掴めない神隠しのような現象に気付いたのは、タイムリピーターを、特にイズマエルを探し出すべく、校内の全体マーキングを開始してからすぐのことだ。

最初はプログラムのバグを疑ったが、三角と四角を派遣して調査した後、重大な事実が判明した。彼ら彼女らは、違和感なく、確かに開始地点から終了地点に移動したと信じ、そう記憶しているのだ。彼らは実際にロストし、その後に、再出現していることが分かった。

藤王のヘッドセットの向こう側に可視化された薙高の３Ｄ全体図は、「ロスト」の発生位置のマーキングで真っ赤に染まり、一つの重大な疑問を提示していた。

薙刀高校は、実はワームホールだらけなのだろうか。それともこのワームホールのような現象は単なる前兆や派生物でかなく、実際は薙高そのものを巻き込む、ありえないほど巨大なＰ２が発生しているのだろうか、と。

「だが、スウマキツミ。いつもフラフラしている、こいつの尻尾は掴んだぞ」藤王はにやりと笑った。

彼は使われなくなった旧校舎の一部インフラを復活させて、そこで寝泊まりしているらしい。

問題は、誰をぶつけるか、だった。藤王はモノボードの情報を持っている。フェアな取引ならば、スウマキツミが応じる可能性は高いといえる。

さてどうしようかな。呟いて、藤王はザ・トリガーを思い出す。そうだあいつにしよう。そう決めて、世界監視機構に指示を出す。そして、藤王は久々の仮眠を取った。

システムの人工知能が、スクリーンセイバー代わりに禅問答を始める……。

ザ・トリガー「ロスト」

僕は授業の合間に、学園ＳＮＳで、日刊薙高新聞の特集に目を通す。

「ザ・トリガー、ピクチャレスを狙う凍結者（フリーザ）を撃破！」

「軍事部は新聞部と敵対か！？　そのとき情報部は？」

さすがに、自分たちで襲ってきただけあって、情報が早い。

「私たちも助けに行きたかったんだけどねー」ヤヨイが呟く。

「パフェ当日割引券を貰っちゃって……つい……」ムツキが言い訳する。

「ごめん！　ホントごめん！」カエデが謝る。

「別にいいですよ。一日くらい新聞部に買収されたって」僕のジト目は嫌らしく、声は冷たい。

「ま、今日からは本格的に護衛するからさー」ヤヨイが提案する。

「そうですね……今日は情報部に行く予定ですから、護衛をお願いします」

「あ、うちに来るんだ。彼女が嫉妬するわよぉ」ムツキがおどける。

「藤沢カオリの許可は取ってあります」僕は言い返す。

「彼女公認のハーレムかぁ……い、いやなんでもありません！」カエデが変な妄想をしている。まあこれもいつものことだ。

「一応、どの部活にも均等に顔を出すことにしているんですよ」僕は建前を述べる。

本当は、エトピリカの駒鳥ススムからのメールが理由だった。

世界監視機構のトップ――駒鳥ススムは知らないようだが、藤王アキラだ――からの依頼がある。情報部にて待機せよ、とのことだ。

僕は放課後、三人の美少女を従えて、情報部に向かった。

新聞部は、昨日の今日で襲ってくるほど間抜けではないらしい。

僕たちはスムーズに情報部の部室に着いた。

「やあ。待ってたよ。ザ・トリガー」

そこには「四角」が居た。丸、三角、四角は、それぞれ藤王の持つ人工知能搭載の人型ロボットで、四角の顔は名前の通り、四角形をしている。

「俺は四角。情報処理、論理学、推論に特化した人工知能を搭載している、藤王の分身の一人だ」

「それで、要件は？」

「『ロスト』という現象が、薙高全体を覆っている。この件について、スウマキツミと交渉、情報を取得してきて欲しい」

「スウマキツミ？」

「そう。忘れたのかい？　タイムリピーターの一人だよ。居場所はもう割れている」

これがその男の写真だ。そう言って、四角は一枚の衛星写真を手渡してきた。

「この、空に向かってピースしている男が？」

「そう。彼にとって何度目の、何万回目の交渉になるのかは、俺にも良く分からないけどね」

タイムリピーター。同じ時を延々と繰り返す、人ならざる者。

僕は、これから、そいつに遭いに行くことになる。

第二十一話　イズマエル

スウマキツミの朝は早い。
朝のシャワーを浴び、使い捨てカミソリで髭を剃る。シェービングクリームは高いので使わない。使うのは水である。毛がカミソリに詰まった時は、もう使えなくなった歯ブラシで、水で流しながらごしごしと詰まった毛を取り除く。この方法で使い捨てカミソリは半永久的に使えるのである。毎回捨てて買い換えるだなんてとんでもない。

「さて、今日も噂話の蒐集に出掛けますかね～」

スウマキツミの朝は早い。
それは薙高生の登校時間に合わせた生活をしているからだ。薙高生の通報で、とっくに不審者リストに載っているのだが、それでもスウマキツミは構わず薙高生との接触に出掛ける。さながら、それが義務でもあるかのように。いや、あるいは、それは義務なのかもしれないが。

ザ・トリガー「イズマエル」

登校時間の三十分前、僕は「四角」によってケータイにインストールされた対タイムリピーター・ナビゲーションソフトを活用して、スウマキツミに接触を図っていた。
僕の背後には、ムツキ、カエデ、ヤヨイ、四角もいる。

「というわけで、僕が早起きしてわざわざ出向いてきてやったわけだ」僕は告げる。
「何が『というわけで』、なんすか。黒木シュンさん」

「あんたがタイムリピーターだってことは分かっている。自己紹介は不毛だろう」
「ま、そうなんすけどね。形式的なことは毎回やってもらわないと……こちとら記憶が曖昧なもんで」
頭をポリポリと掻きながら、Tシャツを整え、ジーンズを引きずり上げて、スウマキツミはこちらを見つめる。
「取引したくないって言ったら、怒ります？」スウマキツミはにやける。
「そのときは力づくで情報を吐かせることになるな」
「お～怖っ。うかつに冗談も言えないとは……」真顔に戻る。
僕らは知っている。これは彼のお遊びなのだと。同じ事象は、過去に何度も起こっているのだと。
「ちなみに、これまでに何回くらいリピートしてるんだ？」
「三万とんで一回くらいですかねえ……いちいち数えちゃいませんが」
「じゃあそのキリのいい数字に免じて、先に『ロスト』について知っていることを話してもらおうか」
「モノボードの情報は、後回しってことっすか。いやはや厳しい取引だ……ははは」
スウマキツミは笑う。人を見下すような態度。僕は気に食わない。
「あんたら、P2ってもんが何で存在するのか、考えたことありますか？」
スウマキツミは根源的な問いかけをする。

「人類だけに与えられた物理法則を乱す力？　そんなうまい話があるわけないでしょう？　あのイズマエルが創ったんですよ。自分自身の目的のために。Ｐ２を――」

「そうだなあ。例えば、アスファルトと電柱に意識があるって言ったら、あんたら信じますか？」スウマキツミは突如哲学的なことを言いだす。

「どちらもニューロンとシナプスのようにネットワークを形成していて、内部を車や情報が流れている。脳みそと何の違いも無い――まあこれはイズマエルさんからの受け売りですがね。要するにそういうことっすよ」

僕には訳が分からない。すると、四角が答える。

「イズマエルの開発したＯＳ、シルバースネイルのネットワークのことか」

「御明察。何かご褒美あげましょか？」スウマキツミが口元を歪める。

シルバースネイルがＰ２を生み出している？　だが、シルバースネイルが存在する以前からＰ２は存在している。因果関係が当てはまらない。

「そこなんすよ」スウマキツミは僕の思考を読み取る。

「なんで因果律を超えて、シルバースネイルだけが過去に干渉し、全てのＰ２を生み出し得る源泉足りえているのか。それがあっしにも分からない。それで私もイズマエルさんを探してるんですがね。見つからないんだなあ、これが」

「まるで最初から存在しなかったかのように？」僕は呟く。
「そう。まるで最初から存在しなかったかのように」スウマキツミは答える。

困ったことに、とスウマキツミは言った。

「彼はもう存在していないのかもしれない。あるいは存在したいときだけ存在するのかもしれない。残されたのは巨大な儀式の痕跡だけで、それはもう成し遂げられてしまったのかもしれない。十年前のモノボードの召喚。それが目的だったのかもしれないし、そうではないのかもしれない。これから起こる現象こそが、イズマエルの目的なのかもしれない」
「これから何が起こるか知っているのか？」僕が問うと。
「モノボードの再現出」

スウマキツミは答えた。そして肩をすくめる。

「何万回ループしても分からないことってのもあるんですよ」
「それがモノボードだと？」
「そういうことです。イズマエルをとっ捕まえて、Ｐ２も全部無かったことにして、私はさっさと愛しの我が家へと帰りたいんですがねえ」

「ならば『ロスト』とは何だ？」四角が問う。

「ただのシルバースネイルの副作用じゃないですか？　誰も被害を受けていないんでしょう？　なら、そんなこたあ私にとっちゃあどうでもいいことですよ」

モノボードは、と僕は言った。

「『遮断のトキコ』が遮断する。彼女が無理なら、僕が仲間を集めて打ち倒す。その次に起こることは何だ？　この薙高は最終的にどこに向かっている？」

スウマキツミは一瞬迷ったようだった。彼らしくない。

極秘情報ですよ、と前置きして、彼は言った。

「世界接続（ワールドポータル）」

どうやらイズマエルさんは、「故郷」に帰りたがってるみたいなんですよねえ、と、スウマキツミは言った。

第二十二話　会話（チャット）

岡崎キョウコは、ｍｏｉｍｏｉというハンドルネームを使用している。そして今日もチャットルームに出没し、いつものように呟く。

［ｍｏｉｍｏｉ］　モノボードは増えるよ。
［ｍｏｉｍｏｉ］　モノボードは溢れるよ。

だが。今日はいつもと様子が違った。

［ｏｕｒｏｂｏｒｏｓ］　キョウコ
［ｍｏｉｍｏｉ］　！？
［ｏｕｒｏｂｏｒｏｓ］　岡崎キョウコだろお前
［ｍｏｉｍｏｉ］　違う！
［ｏｕｒｏｂｏｒｏｓ］　ｋｙｏｋｏ＿ｏｋａｚａｋｉ　@ｌａｐｉｓ．ｌａｚｕｌｉ．ｏｎｃ．ｎｅ．ｊｐ　ｐａｓｓ：ｋｕｍａｓａｎ17
［ｍｏｉｍｏｉ］　ハッキング！？
［ｏｕｒｏｂｏｒｏｓ］　お前が、モノボードなのか？
［ｍｏｉｍｏｉ］　……

ブルースクリーン。情報端末の応答なし。

ザ・トリガー「会話（チャット）」

「でね、モノボードに触れると、モノボードになっちゃうんだってー」
「えーなにそれー。モノボード増えまくりじゃん？」
「岡崎キョウコは、もうモノボードらしいよ」

「えーD組のあの子？」
「そうそう」
「モノボードになると、どうなるわけ？」
「なんか孤独じゃなくなるらしいよー」
「一体感ってやつ？」
「でも、一度モノボードになったらさ、戻れるの？」
「さあ。私も聞いただけだから詳しいことは……」
「でも岡崎キョウコ、昨日事故って死んじゃったらしいよ？」
「え、嘘。私、昨日会って――」

岡崎キョウコは、深夜、自分の情報端末を破壊し、寝巻姿のまま逃走。
直後、車道でトラックに撥ねられ、重症を負う。
薙刀大学付属病院に搬送されるも、依然、意識不明の重体。
持ち歩いていたのは、目の無い笑う黒猫のキーホルダーがついたケータイのみ。

目の無い笑う黒猫。
第一次モノボード事件との共通点あり。

薙高生徒会は、第三者からの善意の情報提供に基づき、この事案を、第二次モノボード事件として取り扱うことを決定。
関係者と見られる藤王アキラなどから、引き続き事情聴取を継続。

翌日、第二次モノボード事件対策本部を設置。
主要部活動部長に、モノボードの感染被害拡大を防止する運動を開始する旨を通達。
自殺予防ポスターの配布、お悩み相談室の設置など、個別の対策チームの発足を進める予定。

「……そんなことしても、無駄なのに。大人たちって、ほんとうにバカ」

雨が降っていた。
岡崎キョウコは、深夜の学校の校庭を一人歩きながら呟く。
その姿は、漆黒。強い雨にも関わらず、彼女は雨に濡れてはいなかった。

彼女は既に、モノボードだった。
モノボードになってしまっていた。

「肉体（コード）になんて、もう意味は無いのよ。だって私は――」

そのまま彼女は浮かぶように飛び上がり、学園のてっぺんに位置する屋上へと着地する。フェンスの内側、そこは濡れてびしょびしょで足場は無い。彼女は浮遊している。

「――もう、モノボードなんだもの」

「モノボードは増えるよ」そう。モノボードは増えた。
「モノボードは溢れるよ」そう。モノボードはいずれ溢れる。

呪文を呟くたびに、ぷくりぷくりと増えてゆく。ふうっと吹くと、それはしゃぼん玉のように、空を舞い、床に落ち、増える。溢れてゆく。

突如、パッヘルベルのカノンが鳴り響く。吹奏楽部の仕事だ。

「そこまでだ！モノボード！」屋上に遮断のトキコの声が一声響く。

「タイムリピーター……何度やっても無駄だということが、なぜ分からないの？」

雨の中、二人は対峙する。

かたや宙に浮かび、かたや地に足を着けて。

「モノボードは人の理を超えたもの。人の枷すらも超えたものよ。モノボードは誰にも認識できない。ゆえにモノボードは遮断できない。簡単な理屈じゃないの」

「それともまさか、あなたも『ザ・トリガー』に賭けているのかしら？　あの哀れなＰ２持ちに、全てを任せてしまうつもりなのかしら？」

「……少なくとも、お前はここで遮断させてもらう」

「無理ね。噂は広がった。私はこうして実体化した。あなた程度の戦力で、私を遮断できるわけがないもの」

「さあ、それはどうか……な？」

ピアノ線より強靭な特殊アミラド繊維が、屋上には蜘蛛の巣のように張り巡らされていた。

ひょうっ。トキコが鞭のようにしならせるアミラド繊維が、ぶつん、岡崎キョウコの腕を切断する。

だが。

岡崎キョウコは笑うだけだ。腕はぶくぶくと、沸き立つように再生されてゆく。

「痛みも無い。再生もできる。増殖もできる。溢れるのは時間の問

題。それでも立ち向かってくるの？　哀れなタイムリピーター、遮断のトキコ」

岡崎キョウコは、どうしようもない馬鹿を見る目で、遮断のトキコを蔑んだ。

「消えろ」槍のようになった腕は、しなり、遮断のトキコを貫いた。刺を展開し、内側から全身を貫く。

鮮血が屋上に散る。

「ぐっ！せめて、相打ちにしてやるッ！」遮断のトキコは起爆スイッチを押した。屋上は、コンクリートに罅（ひび）を入れるほど、壮絶に爆発した。

第二十三話　プロソパグノシア

「ま、たまにはこういう日も必要よね」

黒髪を手櫛で梳きながら、小早川ムツキがゴザの上でお茶をすする。

「そうですねお姉さま。平安部ってクラシックのＢＧＭも流れてて、居心地いいですもんね」

赤い髪をした木村カエデがクッキーを食べながら言葉を継ぐ。

「カップラーメンできた！」

髪を縛った天川（てんかわ）ヤヨイが、いまお湯を注いだばかりのカップラーメンを開けようとするので、僕はそれを制止する。

「ああ、ヤヨイのカップラーメンはすぐ出来るのよ。それが能力名カップラーメンの名の由来なの」

ムツキが補足する。どうやら殴った物体の時間を三分間先に進める能力らしい。無駄に実用的なＰ２もあったものだ。

「私が焼いたクッキー、皆さんのお口に合いましたか？」

ウェーブのかかった髪の藤沢カオリがひょっこりと登場し、皆の湯呑茶碗にお茶を注ぎ足し始める。

「ええ、おいしいですよ」ピクチャレスが答える。

彼が、僕たちに残された最後の良心だった。

男二人に女四人。というか、ピクチャレスは僕が呼んだ。呼ばなかったら男一人に女四人になるところだった。どんなハーレム状態だ。周りの席のひそひそ声が凄いのは気のせいか。

「で、モノボードの件だが、実質情報部の部長をやっている私のところにも情報が回ってきた。岡崎キョウコは車道に飛び出て意識不明の重体。屋上の爆発は、ガス漏れによるものだそうだ。だが、噂ではたくさんの人工繊維が見つかった、と」ムツキが説明する。

「そして、ここからが魔王のリーク情報。岡崎キョウコは、モノボードの噂を広めていた張本人らしい」

早速、モノボードの再現出が始まったのか？

「屋上で、モノボードとの戦闘があったとは考えられないか？」ピクチャレスが問う。

「そこまでは断定できないわ。でも、もし戦闘があったのだとしたら、相当無茶な戦い方よ」ムツキが言い切る。

「屋上そのものが木っ端微塵になるほどの爆発だもの。あれでモノボードが死んだならともかく、あれでも死なないとしたら、モノボードってのは相当やっかいな代物（しろもの）ってことになるわね」

「それが、増殖する可能性があるわけだ」僕は言った。

生徒会からの狂ったような指示が正しいとすれば、モノボードはなんと、接触感染するらしい。僕はペストを想像する。それはどんなやっかいな疫病だというのか。

「単なる疫病だというなら、まだマシよ」ムツキが言う。
「誰がモノボードで、誰がモノボードでないか、見分ける手段が必要。増えすぎてからでは遅いもの」

言い忘れたが、この集まりはお菓子を囲んだ集会などではなく、モノボード対策会議なのだ。

「それでだな、学園ＳＮＳを『人相鑑定』で検索すると、こんな同好会がヒットしたんだが……」僕はおずおずとケータイを見せ、提案する。
「プロソパグノシア同好会？　相貌失認症の患者が、モノボードかどうか人相鑑定してくれるってわけ？　それはいくらなんでも信じられ――」
「実はもうコンタクトは取ってある。もうすぐ着く。待ち合わせ時刻まであと1分」僕は宣言する。
「え？」

「どうも、相貌失認症（プロソパグノシア）の山岸ミノリです」

ショートカットにカチューシャを付けた山岸ミノリは、そうして僕らの集まりに顔を出した。
非公式、対モノボード・チームは、こうして結成されることになる。

第二十四話　ハンティング

薙刀大学付属病院。岡崎キョウコの病室。
岡崎キョウコは、依然、意識不明。栄養剤の点滴が続いている。

「すぅ……はぁ……すぅ……はぁ……」

マスクが呼気で曇る。生命維持装置は静かに稼働を続けている。

そこに、レンズには映らない存在が一人。
岡崎キョウコの姿をした別の人影がある。
先日の攻防のためか、およそ半分に欠けたモノボードは、彼女の首を絞める。

「しぶとい身体（ほんたい）……できることなら絞め殺してやりたいけど――」

だが、それは叶わない。手は首をすり抜け、むなしく空を切る。

「――位相が違うから触れられないか……自殺しそこねたことが、仇となったか？　まあ、いい……私の回復が終わるころには、既に増殖の段階は完了しているはずだ……あとは羽化さえ上手くいけば――」

病室の余白、ベッドの隣に体育座りして、モノボードは眠る。
岡崎キョウコと、そのモノボード。
かつて一つであり、永遠に分かたれてしまったもの。

彼女たちの見る夢は、悪夢でしかありえない。

ザ・トリガー「ハンティング」

「これは生徒会権限の処置です！　現在、モノボードの隔離処置を行っています」

「繰り返します。生徒会権限です！　現在、モノボードの隔離処置を行っています」

授業中、教室という教室に響き渡る声で、僕は大ウソを並べ立てる。

「世の中には事後承諾というものがあるわ」

屋上爆破事件の遠隔視（リモートビューイング）に失敗したムツキはそう嘯（うそぶ）き、偽造した（たぶん、してあった）生徒会ワッペンを僕の胸に張り付けた。どうやらこの偽造ワッペンには、ムツキが所属するオカルト部が一枚噛んでいるらしい。あのクマ沢部長の顔が脳裏をよぎる。

それで、僕に任された大任は、ひたすら大声で喚（わめ）きたてることだった。

「色々と手遅れになる前に行動に移す！　これが奇襲の鉄則だよー」

ヤヨイもノリノリである。

「ごめんなさい。お姉さまが暴走してしまってすみません。本当にごめんなさい」カエデも口で謝るだけで、反対はしていない。

山岸ミノリは、目の前に群がる人間たちを見定めている。この中にモノボード感染者（キャリア）が居ないかどうか、確認する作業に忙しい。

山岸ミノリが言うには、通常の人間はカラフルに見え、モノボードだけは黒くのっぺりした形に見えるため、すぐ見分けがつくのだという。

岡崎キョウコが黒く染まっているのを事前に見ていたという証言が、その根拠である。
他に根拠は無い。
全部当て推量である。
でたらめにもほどがある。

それでも小早川ムツキが動いたのは、自分の自慢の遠隔視（リモートビューイング）が、例の屋上爆発事件に通じなかったためである。ムツキが言うには、その時空間だけが切り離されているということらしい。よく分からないが、そんなことは滅多に起こらないのだそうだ。
それで、既にモノボードが発生していることが確実になったとして、今回のモノボード狩りが企画されたわけだ。

「あ、そこのひと……」山岸ミノリが反応する。
「どこ？」ムツキが確認する。
「窓際二番目に座っている人と、掃除用具入れの前の席の人……」

そうなのだ。山岸ミノリは、指さすことはできるが、顔と名前までは判別できない。相貌失認（プロソパグノシア）症とは、そういう奇妙な病気なのである。

「この二人ね？」ムツキが問う。
「そう」山岸ミノリが肯定する。
「ヤヨイ、この二人をオカルト部まで誘導してあげて！　触っちゃダメよ！」
「ラジャー」

基本的に、この繰り返しである。
無論、途中で生徒会権限という嘘はバレたが、「モノボード狩り」

というありえぬ事態に生徒会側は混乱。僕たちの行動は、半ば黙認されることとなった。

最終的に発見、隔離されたモノボード感染者（キャリア）の数は、二十一名に及ぶ。

だが、手伝わされただけの僕は、まだ良い方だ。

生徒会から、隔離された連中の「処分」を依頼された邪（よこしま）こと横島ツカサは、イケメン顔を引きつらせて、心底嫌そうな表情をしていた。

「麿はただの陰陽師でおじゃる！　ゴミ処理係ではないでおじゃる！」

結局、彼らは邪の邪気封じの儀式を受けた後、自宅謹慎を言い渡された。

事故に遭った岡崎キョウコとの接触による精神不安定、というのが、その建前の理由であった。

第二十五話　化け猫のモーツァルト

黒木シュンがモノボード狩りに勤しんでいた日、邪（よこしま）による邪気封じの儀式が終わった、放課後。

「猫払いをしたでおじゃる」と、邪は言った。

「要するに、薙高に結界を作って普通の猫が入れないようにしたでおじゃる」

邪は簡単そうに言うが、それは高難易度の呪術であった。

ピクチャレスこと音無（おとなし）ヨウイチは、平安部の昇進試験を受けていた。平安部実働部隊、雅（みやび）に所属することを条件に、自分の過去の情報を調査してもらうという取引である。

「お主には、この猫の護衛を頼みたいでおじゃる」

檻の中には、すらりとした一匹の黒猫が居た。

猫の護衛。簡単な任務だ。ピクチャレスはそう思った。

「もしこの猫、モーツァルトに危害を加えた者がおれば、捕まえるでおじゃるよ。では、麿はこれにて失礼するでおじゃる」

ピクチャレスは一人、猫と取り残される。

「鍵、外すわね」猫が呟く。

呟く……猫が？　ピクチャレスが違和感を持った時にはもう遅かった。

カチャン。鍵は開いた。猫は外に歩き出した。

「さよなら、ピクチャレス」猫はそう言うと、たたたたと走り去る。

まずい。逃げられてしまう。邪は『普通の猫が入れないようにした』と言っていた。

予想してしかるべきだった。モーツァルトは人語を話す化け猫なのだ。ピクチャレスは猫の後を全力で追う。

細い路地に入りこまれる。ピクチャレスは大きく迂回することを迫られる。得意の運動神経をフルに使って、先回りをする。だが。

「路地に入ったのはフェイントだったか……くそっ、逃げられたぞ……どうする？」

こんな状況で学園内の猫を探せる男がいるだろうか？

いた。

「そうだ。魔王なら……藤王アキラなら……あるいは見つけ出せるかもしれない」

「よう。俺がどうしたって？」

そこには藤王アキラ本人がいた。

丸、三角、四角の三体を引き連れている。

「邪（よこしま）に呼ばれたんだが、居ないのか？」

ピクチャレスは平安部の試験のことをかいつまんで藤王に伝える。

猫払いをしたこと。

人語を話す化け猫の護衛を頼まれたこと。攻撃してくる者がいれば捕まえること。

あっけなく鍵を外され、逃げられてしまったこと。

「あー、邪のやつ、猫殺しのエイラを狩ろうってのか」

エイラ？　ピクチャレスには初耳である。

タイムリピーターだよ、と藤王は補足する。

「要するにその猫を見つけりゃいいんだろ？　時給五十万でいいぜ」

ピクチャレスはその条件で承諾する。

法外な値段だが、藤王なら猫を分単位で見つけ出せるに違いない。

「見つけました」三角が答える。秒単位だった。

「猫は屋内プールの屋根の上を疾走中。ここから二十秒です」

こいつらの背中に乗れよ。藤王は言った。

せっかくだから移動も手伝ってやる、と。

ザ・トリガー「化け猫のモーツァルト」

金髪、長髪のエイラは焦っていた。タイムリピートに必要な猫がいないのである。

一匹くらいはすぐ見つかるだろうと思っていたのが間違いだった。

猫が、居ない。

どれほど探しても、猫が居ない。

こんなことはタイムリピーターとして初めてのことであった。

いつも猫を銃で撃つことでタイムリピートしてきた。理論も何も無い。ただ、その方法が使えるから、使っているだけ。もう、猫が

可哀想とも思わない。

電線には鴉がたくさんとまっている。鴉殺しのティガならばいつでもタイムリピートできたのだろう。だが、自分はティガではない。猫殺しのエイラなのである。

猫が居なければ始まらない。

この時点で、エイラはまさかこれが自分を捕えるための罠であるとは思っていない。

ただ、猫を見つける。そして銃でその動きを止める。餌を与えて延命する。そして、必要になったら殺す。タイムリピートする。

いつもいつも、ただそれだけのことだったはずだ。しかし何かがおかしい。

猫が、居ない。

相棒のティガに連絡を取るべきか。異常事態の発生を告げるべきか。

そんな思案をしていたところに飛び込んできたのが、化け猫のモーツァルトだった。

「見つけた……」エイラは呟く。

エイラの背後に、透明な人型の幻影が浮かび上がる。西部劇のガンマンのようなそれは、二挺の拳銃を――米軍旧制式拳銃改良型、Ｍ１９１１Ａ１（コルト・ガバメント）を――エイラの腰から引き抜き、手に持っている。

Ｐ２「スピリット・オブ・ガンマン」。狙撃モード。

銃声が、響いた。

藤王とピクチャレスが現場に着いた時には、もう既にモーツァルトは地面に横たわっていた。
昇進試験はダメになったな。
ピクチャレスはそう冷静に分析しつつも、エイラを敵と認め、M9の銃撃で反撃する。

「はっ！　銃で私に勝とうなんて、百年早いんだよ！」

襲い来るピクチャレスの弾丸を全てコルト・ガバメントの弾丸で撃ち落とし、エイラは吠える。

「この猫は私のものだ。子供はさっさとお家に帰りな！」

この猫さえいれば。この猫さえ殺せば。タイムリピートできる。
この猫さえ……！？
猫が居ない。確かに銃弾は命中したはずなのに。

「～ッ！　痛いじゃないの。クソアマ！」モーツァルトは藤王アキラの足元で鳴く。

化け猫は魂をたくさん持っている。そんな伝説がピクチャレスの脳裏をよぎる。

「悪いが、『詰み』だ」藤王が言う。

三方向からの丸、三角、四角の十字砲火が、猫殺しのエイラの脚を吹き飛ばした。
こうして、タイムリピーター・エイラは行動不能になり、捕獲されたのである。

第二十六話　ボーダーレス

「本の中は見てみたでおじゃるか？」

邪（よこしま）はピクチャレスに問う。

タイムリピーター・猫殺しのエイラは捕獲し、藤王に預けた。手錠を掛けた後、ホテルに連れていくという。黒猫のモーツァルトもなんとかなだめすかして寮に連れ帰った。そこでピクチャレスは、邪にケータイで簡易報告を行う。

「雅（みやび）への昇任試験は、合格でおじゃる」

その一言に、ほっと安堵の息をつく。

「それで、お主の記憶の件じゃが、麿の手助けが要るようには思えんのでおじゃる」

「どういう意味です？」

そして、冒頭の台詞へと続く。

「本の中は見てみたでおじゃるか？」

言われて、気付く。実家から持ってきたものといえば、ケータイと辞書、大学ノートくらいのものだ。大学ノートはチェックした。ほとんどが白紙で、有用な情報は何もなかった。だが、まだ、辞書の中までは確認していない。

「本には、魂が宿るものでおじゃる。よく確認してみることでおじゃる」

唐突に切れた通話を気にすることも無く、ピクチャレスは辞書ケースを手に取る。辞書をケースから抜きとる。重い。だが、どこかにメモや走り書きがあるかもしれない。ピクチャレスは辞書の中央を開き――思いがけないものを見た。

辞書の中央が綺麗に切り抜かれ、スペースができている。そしてそこには、小さなｍｉｎｉＳＤカードが収められていた。

誰がこんなところにｍｉｎｉＳＤカードを隠したのだろう。

いや、自分以外にはありえない。記憶が無くなる前に、記憶が無くなることを見越して、いつも持ち歩いている辞書の中にこの記録（メモリ）を残したのだ。

こんな周到な手段で情報伝達を試みるとは、一体過去の自分は、何に所属し、何と戦っていたのだろう。

恐る恐る、情報端末にｍｉｎｉＳＤカードを差し込む。

ウイルスを警戒したが、意外とすんなりカードは認識され、メニューが出現した。フォルダを開く、を選択する。

フォルダを開くと、「日記」と書かれたフォルダに、大量のテキストデータが存在することが分かった。

とりあえず、最後の日記、一月の日付のファイルをメモ帳で開く。

――この日記を読んでいるということは、おそらく俺は、記憶を消されてしまっているに違いない。その前提で、ここに必要な情報を残す。

一月某日。俺は時永（ときなが）ケイコ、通称、境界不要（ボーダーレス）と組んで、薙刀高校の入試問題を盗みに行くことになった。

時永ケイコ。その名前にはデジャブがある。

――反政府テロリスト「バジリスク」の指令で、Ｐ２養成組織である、薙高の入試を混乱、破綻させるのが目的だということだった。だが、いくらボーダーレスがあらゆる扉をすり抜けることができたとしても、今回はリスクがでかすぎる。発見されれば、薙高のＯＢ連中に、どのような目にあわされるかは分かったものではない。

あらゆる扉をすり抜ける能力。ボーダーレス。そんな能力が存在するのか。

――最悪、俺は殺されるか、廃人になるだろう。あるいは、記憶を消されるだけで済むかもしれない。いずれにせよ、相棒のボーダーレスと分断されることは間違いない。バジリスクからも、今回の計画が失敗すれば足切りされるだろう。

事実、俺は記憶を消された。組織からのサポートも受けられなくなった。

時永ケイコ。ボーダーレス。分断された相棒。

俺は情報の奔流に振り回される。

――お前は、薙刀高校に生徒として潜入しているのかもしれない。もしかすると、それでいいのかもしれない。

冷酷非情なバジリスクと縁を切って、優良生徒として、自由気ままに生きるのも悪くないのかもしれない。金は別記の口座にうなるほどある。生まれ変わったお前には、それを使う権利がある。

そう。今の僕は優良生徒だ。テロリストとは何の関係も無い、ただのピクチャレスだ。

――だが、どうか忘れないで欲しい。ボーダーレスは俺を好いていた。そしておそらく、俺もボーダーレスが好きなのだろう。今のお前には分からないかもしれないが。

ボーダーレスを、時永ケイコを探し出し、救ってやってほしい。頼む。

最後の日記は、そこで終わっていた。

自分は薙高の入試問題を盗むことに――ボーダーレスの能力によって侵入し、ピクチャレスの能力によって記憶することに――失敗したのだ。

そして記憶を消され、ボーダーレスと分断された。

ボーダーレスは、時永ケイコはどこにいる？

それは、ピクチャレスの中に初めて芽生えた、明確な疑問だった。

第二十七話　射撃練習場

放課後、僕はピクチャレスと、地下の射撃練習場に出向く。
イヤープロテクターを付け、ピクチャレスと定位置に向かう。

僕は軍事部から支給された自動拳銃ベレッタＭ９２をそのまま使っているが、ピクチャレスは最近、自分の手に合うグロック１９に乗り換えたらしい。グロックシリーズは有名な銃なので、軍事部で安く貸し出してくれる。

特に、グロック１９は、プラスチック素材を多用した自動拳銃グロック１７の小型版で、日本人の手によく合う。ベレッタＭ９２と同じく９ｍｍパラベラム弾を使用する銃だ。

グロック１７は、登場したての頃はプラスチック製の玩具のような銃だと思われていたが、次第にその信頼性が実証されてくると、アメリカを含む西側諸国の警察機構により制式採用が進められた。今では、ベレッタＭ９２やマカロフＰＭ（９ｍｍマカロフ弾を使用）と並ぶ大ヒット自動拳銃の一つである。

尤も、薙高では安い暴徒鎮圧用ゴム弾が主流なので、殺傷能力という点では他の自動拳銃と大差は無い。最終的には、銃の選択は自分との相性で決まる。

約一時間の射撃練習が終わり、休憩室に戻ってイヤープロテクターを外す。

今日は、ピクチャレスが僕を呼びだしたのだ。何か相談事があるに違いない。

「君のボディーガードの駒鳥ススムが立ち聞きしてるけど、ここでいいのかい？」

「大丈夫だ。彼は任務に関係ないことは喋らない」ピクチャレスが

請け合う。

「黒木君（ザ・トリガー）。時永ケイコという女性、ボーダーレスという名に心当たりは？」

「無い」僕は即答する。

「やはりそうか。学園ＳＮＳで検索しても出てこなかった。どうもこの学校の生徒ではないらしい」

「その女性を探しているの？　過去の記憶絡みで？」僕は訊く。

「ああ。昨日、邪のアドバイスで記録メディアを発見してね。状況がだいぶ分かってきたんだ」

ピクチャレスは、平安部の邪と取引したらしい。僕が知らないうちに、彼は彼なりに薙高の暗部に深入りしてきているのだろう。Ｐ２持ちではないにせよ、瞬間記憶能力者（ピクチャレス）がある意味で「特殊」であることには変わりは無い――ことによると、いずれＰ２を発現させるかもしれない。

「時永ケイコは、彼女は――俺と同い年で、Ｐ２持ちだ。かなり昔から今年の一月まで、一緒に組んで危ない仕事を請け負っていた。それと、どうやら俺はけっこうな金持ちらしい」

「へえ」

僕は興味の無さそうな返事をして、時間を稼ぐ。僕の頭の中では、次の対応を考えて思考が進んでいる。薙高生でないとしたら、全く別の学校に進学したか、それとも。重い病気で入院しているか、既に死んでいるか。そんなところだろう。

いずれにせよ、記録に全く残っていないということは有り得ない。

「日刊薙高新聞のほうは探したのかい？」

「ざっと検索した。彼女の名前でも、彼女の二つ名でも、一件もヒ

ットしなかった。だが言われてみれば、検索漏れがあるかもしれない。電子データ化されているのは数年分だけだから」

「じゃあ、一度、図書館に出向いてみるべきだな」僕は提案した。

「図書館？」

「ああ、知り合いが一人いる。眼鏡を掛けた、三つ編みの、本田マユミという子だ」

「友人か」

問われて、僕は一瞬固まる。彼女は友人ではない。僕は慎重に言葉を選ぶ。

「いや……彼女は地下組織（シークレット）構成員で、敵だ。確か、クローゼットという組織に所属している」

ピクチャレスは眉を寄せる。シークレットの悪い噂を聞いたことがあるのだろう。

「だがまあ、僕らは本を一緒に片付けた仲だ。お願いすれば一つくらい聞いてくれるかもしれない。あるいは、聞いてくれないかもしれないが。情報部と図書部は、伝統的に仲が悪いからね」

それじゃあ、武装して行くことになりそうだな、とピクチャレスは自分の銃、グロック１９を取り出して言った。

まあ、準備はしておくには越したことは無いだろうね、と僕は答える。今回の図書館への来訪が、ただの調べ物で終わるとは、僕には思えなかった。

なにしろ、この僕は、ザ・トリガーなのだから。

第二十八話　図書館

――少し調べ物を手伝って欲しい。図書館にて待つ。

翌日。僕は昼休みに、本田マユミ宛にメールを送った。

（入学時に配布されるメールアドレスは、初期設定から変更していなければ誰にでも公開されている）

それは、シークレットに対して、チーム「クローゼット」に対して、僕を襲撃するチャンスを与えることに等しい行為だった。

彼女は、ザ・トリガー用迎撃部隊を引き連れてくるだろうか。

それとも、ただ単に僕の調べ物を手伝ってくれるのだろうか。

そのどちらに転ぶのかは、神のみぞ知るといったところだ。

ただ、本と一体化する能力を持った彼女は、強いて言えば、図書館そのものだ。もしこの比喩が正しければ、彼女は利用者に対する守秘義務を守るだろうという、確信めいたものがあった。

放課後、僕はピクチャレスと合流して、図書館に向かった。

少し後ろを、スーツ姿の男、駒鳥ススムがついてくる。薙高に公然と存在しているコミュニティ、世界監視機構。魔王こと、藤王アキラが組織する、チーム「エトピリカ」の構成員である彼もまた、ある意味ではシークレットのようなものだ。

この学園は、とにかくチーム単位で組織されている。

チーム「ピクチャレス」は、軍事部の新入生が立ち上げた組織だ。

その目的は、基本的には軍事部でのサバイバルゲーム向けの鍛錬である。が、今回のような場合には、任務はピクチャレス（と僕）の護衛になる。実際、彼らは先行して、図書館までの道を確保して

いる。
もし進路に異常があれば、ピクチャレスのケータイが鳴るという取り決めだ。こういうところでは、ピクチャレスは本当に頭が切れる。もしも僕だけだったら、簡単に襲撃されていただろうし、前回のこともあるから、チーム「ムツキ」からの許可も下りなかっただろう。

そして、僕たちは何事も無く図書館に入った。
本、本、本。その眺めは、いつ見ても壮観である。

「べ、別にあんたのために待っていたわけじゃないんだからね！今日は図書部の担当日だったから……」

眼鏡三つ編みの本田マユミが、恥じらいながら図書カウンターから出てくる。
こんなキャラだったか？　前回の戦闘の後片付けを一緒にしたからか？
疑問は尽きないが、僕たちには目的があった。

「知っていると思うが、俺は黒木の友達の音無ヨウイチ。通称ピクチャレスだ」

ピクチャレス様！　本田マユミが短く叫んで固まる。どうやらピクチャレス・ファンクラブに加入しているうちの一人らしい。根暗な子だと思っていたが、意外と面食いなのかもしれない。

「ピ、ピクチャレス様のためなら喜んで！」
「過去の新聞を検索したい。キーワードは、『時永ケイコ』または『ボーダーレス』」
「分かりました。私の情報端末なら、図書部権限で全ての新聞を全

文検索できますので、少々お待ち下さい」

ヒット1件

薙刀中学一年生　時永ケイコ　詩の部門「扉の向こう」で金賞。

「実在してたみたいだね」僕は呟く。

「ああ。この時点では普通の学生で……薙高に入学する予定だったわけだ」

「行方不明なんですか？」本田マユミが訊いてくる。

「ああ。別の高校に行ったか――」ピクチャレスが言い淀む。

「重病か、死んでいるか」僕が言の葉を繋ぐ。

重苦しい雰囲気がたれ込める。

「あら？」

「どうした？」ピクチャレスが問うと。

「図書館利用者の中に、時永ケイコの名前があるわよ。最終貸し出し日は……今年の二月二十日」

「時永ケイコは、生きているんだ」僕は呟く。

「生きていて、本を借りて行っている。本が読める程度の状態にあるということか。なら――俺と同じく、記憶を消されている可能性が高いな」

しかし、ピクチャレスは眉を寄せた。

住所こそ分からないが、こうも簡単に調べがつくとは……引き離し方が、あまりにあっさりしすぎている。薙高の記憶消去のＰ２持ちがどの程度の実力と自信を持っているのかは知らないが、わざと再会させたがっているようにしか思えない。

そんなことを、ピクチャレスは語った。

「明日土曜日に、薙刀大学付属病院に行って、入院か通院していないか調べてみよう。親戚だということにすれば、たぶん居るか居ないかくらいは教えてもらえるよ」僕はプランを示した。

だがピクチャレスは、「こんなに簡単なはずが無い」と呟き、怪訝な顔をするばかりだった。

第二十九話　兵藤カツヒコ

兵藤カツヒコは電子タバコを吸う。そして、吐く。

「気に入らねえな」兵藤カツヒコは吐き捨てる。

「そうでしょうか？　合理的な作戦に思えますが」秘書のような声が彼のイヤホンから聴こえる。

図書館をタダで利用させてやる代わりに、土曜日に徹底的に叩く。薙高ＯＢ、記憶抹消者（イレイサー）からの指示だ。

シークレットのチームリーダーの中で、イレイサーの二つ名を聞いたことが無い奴はモグリである。

記憶抹消者（イレイサー）。ターゲットの記憶を消去してしまうその能力は、あまりにも応用力が広すぎた。単純戦闘では、非接触（リモート）での短期記憶の抹消は攻防において致命的であるし、諜報戦でも、触れられただけで長期記憶を完全抹消されるのはやはり致命的である。

何より、その能力は底が知れない。

噂では――あくまで噂ではあるが――記憶抹消後の疑似記憶の植え付けや、記憶の抽出、これまでの敵を今日からの味方として取り込むことまで可能だという。

現在の薙高四天王は、異論はあるものの、平安部の邪（よこしま）、情報部の藤王（ふじおう）、軍事部の水城（みずき）、新聞部の最上（もがみ）である。

だが、彼らが束になっても、イレイサーに勝てるかどうかは怪しいところだ。

なにしろ当時の薙高は、イレイサー一強だったのである。

あまりに強すぎて、イレイサーという名を呼ぶことが禁忌になり、

「あの御方」という奥ゆかしい表現が徹底されたほどだ。

それが、そんな存在が、チーム「クローゼット」に命じてきたのだ。

薙刀大学付属病院の前で、ピクチャレスを撃破せよ、と。

なりふり構わず現存戦力を投入して、ただ一人の非Ｐ２（いっぱんじん）を打ち倒せと。

「気に入らねえな」兵藤カツヒコは繰り返す。

「気に入る気に入らないの問題ではありません」秘書のような声が、カツヒコを嗜める。

「今回のメールのデジタル署名――本人にしか出し方が分からない秘密の暗号――は、間違いなくイレイサーのものです。これはボスも公認しています。幹部昇進も賭かった大勝負なんですよ」

兵藤カツヒコは渡り廊下の窓越しに、遠くの山々を見ながら呟いた。

「なら手前（てめえ）で出てくりゃ済む話だ。なぜ俺ら三下風情まで動員して、非Ｐ２（いっぱんじん）を狩ろうとする？　俺には何か裏があるように思えてならねえ」

「それは……」

「考えろ、秘書。病院には『何か』がある。俺達みてえなクズチームをぶつけてでも、絶対に守らねばならない『何か』があるんだ。そうとでも考えなきゃ辻褄が合わねえ」

それに、とカツヒコは言った。

「ＯＢからの薙高への干渉は、いくらイレイサーといえども御法度だ」

それは、薙高創設時から、連綿と続くルール。
薙刀高校を卒業し、薙刀大学に上がるにせよ、市井（しせい）に下るにせよ、薙高ＯＢは決して現在の薙高に干渉してはならない。

「気に入らねえ。ホントにそれはイレイサーからのメールなのか？どっかからパスワードが漏れて、俺たちは誰かさんに踊らされてるだけじゃねえのか？」兵藤カツヒコは問い続ける。

薙刀大学付属病院前。バス停にはそう書かれている。
藤沢カオリ、小早川ムツキ、木村カエデ、天川（てんかわ）ヤヨイの四人が、バス停の傍で手を振っている。
僕とピクチャレス、黒猫のモーツァルトは、少し遅れて、薙刀大学付属病院に到着した。

これから、どんな戦争が起こるのか。僕たちは、まだ知らない。

第三十話　薙刀大学付属病院前戦争

「あなたたち、囲まれてるわよ」黒猫のモーツァルトは警告する。

発砲音。「ぐっ」ピクチャレスの腹部に弾が命中する。

「ピクチャレス！」僕は崩れ落ちるピクチャレスを支える。

「敵襲！　警戒態勢！」ムツキが叫ぶ。「そんな！　数が多すぎる！」

僕は呻くピクチャレスを寝かせ、Ｍ９を取りだし、周囲を警戒する。医者は？　と僕は問う。

「何？　あんたら、傷の回復すらできないわけ？」黒猫のモーツァルトは軽蔑したような声で鳴いた。

そのくらいの傷、あたしが舐めればすぐ治るわよ。貸しなさい。

ムツキ、カエデ、ヤヨイもそれぞれ銃を抜き構える。藤沢カオリも、慣れた手つきでＭ９を取り出し、それを握る。足手まといにならないために、彼女も必死で練習したのだ。

周囲は、遮蔽物や茂みだらけである。待ち伏せ。こんな単純な手に引っ掛かってしまうとは。

立て続けに発砲音がして、バス停の時刻表に着弾する。バス停が歪む。

「お前たちは包囲されている。大人しく投降しろ」スピーカーからの声が響く。

やなこった。僕は弾が飛んできた方を見定め、誘導射撃（ホーミング）で時間を稼ぐ。それは、一定の戦果を上げた。だが、弾数には限りがあり、チーム「ムツキ」は銃撃戦用には造られていない。こちらの戦力で、包囲網を突破できるかは怪しい。

「ハロー。俺達ゃ援軍だ」

突如、僕のすぐ横に、数人の人が立っていることに気付く。光学迷彩!?　僕は銃を向けようとして、軽く手で制される。

「繰り返す。俺達ゃ援軍だ。昨日までは敵（シークレット）だったが……ちょいと気が変わったもんでな」

「おい秘書。俺は自分が気に入るようにやるぞ。口出しは無用だ」

兵藤カツヒコが宣言する。

「分かっております」秘書のような声が答える。

また、銃撃。しかし、弾丸は届かない。空中で謎の防壁に弾かれる。

兵藤カツヒコは息を思い切り吸い込むと、周囲に向けて叫んだ。

「悪いな、チーム、ブレーメン、クラシック、ポリリズム、マーリン、それとその他の泡沫チームども！　俺たち『クローゼット』は、現在（いま）からピクチャレスの側につく。刃向う奴は容赦しねえから覚悟しろ！」

ざわ……ざわ……。敵に動揺が広がる。

「フラクタル・シールド！」

空中に無造作に設置された印は、銃撃を受けて雪の結晶のような

シールドを展開し、能力者を守る。何発もの銃弾が、防壁に遮られて地に落ちる。

「ああそうだよ防御一辺倒の能力（スキル）だよチームのリーダーが無能で悪いかこのボンクラ部下どもが！」

「いいえリーダー！」「火力のほうは任せてくださいよ」

部下たちは苦笑する。

兵藤カツヒコらチーム「クローゼット」とチーム「ムツキ」は、防壁の内側から射撃を続ける。この盾は一方通行なのだ。盾と矛。シールドと拳銃。兵藤カツヒコ自身は無能と開き直っているが、それはなかなかどうして、強力な能力であった。

「燃えろ！」遠方から声が聞こえる。だが。焦点が合う前に、発砲音。

「ソーラレイか。ま、悪くない能力だが……次からは防御も考えることだな」

藤王配下の丸、三角、四角に瞬間発火能力者（パイロキネシスト）は撃たれ、倒れる。人型ロボットたち特有の赤外線視覚は、人間の体温を瞬時に察知し、無双の索敵能力を誇る。それにコンピュータ制御の精密射撃が加われば、敵う者は多くない。

「さあ、日頃の訓練の成果を見せなさい！」自らも銃を握る水城が、軍事部に指示を出す。

「イエスサー！　歓喜の極みであります！　サー！」一同は斉唱する。

チーム「ブリッツ」は戦争に飢えていた。いかな薙高でも、実弾

を使用しての大規模戦闘は、滅多にあることではない。彼らは戦争を貪欲に喰らう構えだ。

特に、小隊に二丁配備された、軽機関銃ＦＮミニミの制圧力は圧倒的である。茂みや、木陰、病院の外壁ごと、敵を殲滅してゆく。

「麿は戦闘要員ではないでおじゃるゆえ」邪(よこしま)が扇子を開いて前置きする。

「麿の手駒、雅(みやび)の連中が相手をするでおじゃるよ」

能面を被った白装束。異様な連中が立ち上がる。

式神、白虎(びゃっこ)、飯綱(いずな)数匹、そして無数の管狐(くだぎつね)が、圧倒的な勢いで面を制圧してゆく。いずれも目視不能の生物たちである。それらが自律的に、敵を噛み砕き、あるいは転ばせ、駆逐してゆくのだ。それは現代戦の――銃で対処できる戦闘の――範囲を明らかに超えていた。

「新聞部に内緒で戦争おっぱじめようなんて――十年早いんだよ」

バカほど上に登りたがるものである。病院屋上に陣取った新聞部の最上(もがみ)は、主力部隊「ジャーナリズム」遊撃部隊「オピニオン」のそれぞれをケータイで指揮し、ガンカメラで戦場の様子を撮影しつつ、攻撃の手を強めてゆく。

「我らは剣道部、チーム『禅』！　能力名『十牛図』いざ参る！」

銃弾をも斬り捨てる日本刀使いが走り寄る。近接戦闘ではフラクタル・シールドは効かず、銃では不利だ。僕の誘導射撃(ホーミング)をも躱し、その刀は僕らを両断するかに見えた。

だが、飛び掛かってきたチーム禅の動きは突然止まり、そのまま空中に磔にされる。

「凍結者（フリーザ）！？」
「ザ・トリガー……ここは俺に任せて先に行け！」

黒猫に傷を舐められていたピクチャレスが起きあがる。傷が回復したらしい。もう大丈夫、とモーツァルトが保証する。
周囲に弾をばら撒きながら、兵藤カツヒコが叫ぶ。

「ピクチャレス！　三〇二号室だ！　そこに時永（ときなが）ケイコは居る！」

そこで、僕はまた、サイコキネシスの新しい使い方を思いつく。
ピクチャレスを抱きかかえたまま、僕は僕の骨格自体を、サイコキネシスで動かす。うん、たぶんイケる。僕はサイコキネシスを応用し、ピクチャレスごと浮遊する。

「目標、浮上！？」
「馬鹿な！」
「と、飛んだだとぅ！？」
「撃て！　撃てー！」

僕とピクチャレスは眼下の声を無視して飛翔し、三階の窓ガラスを突き破って、病室の中へと転がり込んだ。
そこには、一人の少女がいた。

第三十一話　一瞬の再会

ベッドの上には、一人の少女がいた。パジャマ姿の、美少女である。

割れた窓ガラスのことなど無視して、彼女は窓辺に転がる僕とピクチャレスを落ち着き払って見つめている。

刹那、ベッドの名前を見やる。

「あんたが……時永(ときなが)ケイコか」僕は呻く。やはりサイコキネシスでの飛翔には、無茶があった。身体への負荷が半端ではない。

「あなた……誰？」その視線はピクチャレスを射抜く。

「俺は音無(おとなし)ヨウイチ、ピクチャレスだ」ピクチャレスが自己紹介をする。

改めて見直してみると、その病室は異様だった。魔法陣。そう呼んでいいものか。壁と床には、古代ルーン文字を想起させる文字が幾何学的に配置され、扉には何重にも護符が貼ってある。

「誰だか知らないけど、ピクチャレスさん、ここから出してくれてありがとう。私、退屈だったの」

にっこりと微笑むボーダーレス。

ボーダーレスは、ベッドから降りると、壁に手を翳(かざ)す。

壁に書かれた魔法陣が力場を形成して反発するも、僕らが侵入してきたことで力が弱まったのか、ボーダーレスはそれを意に介さない。

ばばばばば……。

全ての病室を隔てる白い壁はことごとく消滅し、柱と床、天井だけになる。向こうの相部屋の老人たちが、驚いた目をしているのが

見える。

「壁が……消えた！？」僕は立ちあがりながら、驚いて声を出す。

「間違いない。境界不要（ボーダーレス）の能力だ」ピクチャレスも、腹部の痛みを我慢して立ちあがる。

病院の壁という壁が消失している。強度を失ったかに見えた病院は、しかし崩れようとはしない。壁は透明に、透過可能になっただけで、まだ存在しているのかもしれない。

「待ってくれボーダーレス！　俺は……お前に伝えたいことが……」ピクチャレスが声を振り絞る。

しかし、かまわずボーダーレスは歩き出す。隣の部屋のベッドのそのまた向こう。壁の無い青い空へと。

「その外壁の向こうに床は無いぞ！？　自殺する気か？」僕は叫ぶ。

「私はボーダーレス。あらゆる障害は、私の前では意味を無さない」

青空だった風景が、漆黒の闇に包まれる。ロスト。そんな言葉が僕の脳裏をよぎる。

「ピクチャレスさん。今回のお礼は必ずするわ。いつかきっと、近いうちに」

彼女は、その闇の中に消えた。と、同時に、一切の超常現象が消失する。

壁は、全て元通りになっている。

「き、消えた……のか」僕たちは、茫然とすることしかできなかった。

同時刻。

岡崎キョウコの病室。回復途上のモノボードは、この超常現象に遭遇していた。

「――なんだ。なんなのだこれは！　一体何が起こっている！？　病院の壁という壁が消滅しているぞ！　なんなのだこのＰ２は！　こんな規模のＰ２はありえない！」

モノボードは立ち上がり、状況を把握しようと廊下に出ようとする。だが。

「少し黙れモノボード」

銀髪の、左右非対称の目元をした少年は、フランフルトを齧り、５００ｍｌパックのコーヒー牛乳を飲みながら、終始リラックスしているように見えた。

「たかが『現象』如きには、知らなくていいこともある」

「まさか……まさか貴方は！？」口に出そうとして、その名を引っ込める。

「全ては――計画通りだ。僕にとっても、ピクチャレスとボーダーレスにとっても。それに、君もそろそろ動くんだろう？　モノボード」

戦争の趨勢は、薙高四天王がピクチャレスの味方についた時点で、

ほぼ決していた。
兵藤カツヒコの事前のリーク――ＯＢからの薙高への介入――は、それが真実であるにせよ欺瞞であるにせよ、四天王を激怒させた。ある意味で、ピクチャレス陣営の勝ちは前日のうちに決まっていたともいえる。

ブリーフィングルーム代わりに選ばれたのは、病院付属の大食堂であった。
そこに、それぞれのチームのリーダーだけが集う。

それじゃあ話を整理しようじゃねえか。兵藤カツヒコは場を仕切る。

時永ケイコ、通称ボーダーレスはある種の結界となっていた病室を抜け出し、Ｐ2を発動して失踪した……。
行き先を知る者はいない。だが、パジャマ姿で街を歩けるはずはねえ。
どこかに必ずまた現れる。俺たちにできることは、ピクチャレスの似顔絵を参考に捜索を続けることだけだ。

藤王アキラの提供した情報によれば、タイムリピーター・猫殺しのエイラはなかなか口を割らねえが、予定は着々と消化されていっているらしい。
モノボードの現出はモノボード狩りが功を奏して予定より多少遅延。
俺たちがモノボードの情報を共有して、事に当たれば、あるいは十年前の悲劇は――集団自殺は――繰り返さずに済むかもしれねえ。

だが、次には世界接続（ワールドポータル）とやらが待っているわけだ。
時永ケイコの能力は未だ成長中。おそらく学内で頻発している「

ロスト」の元凶であり、意図的に、任意の地点と地点を繋ぐワームホールの生成も可能。
その能力を突き詰めて成長させていけば、そのうち世界接続（ワールドポータル）とやらも、本当に実現してしまいそうだ。

「イレイサーのメールの件は、偽の情報でした。さきほど連絡が取れまして、本人がメールの事実を否定しています。おそらくパスワードが漏れていたんでしょう」

全員の顔が、天才ハッカー藤王アキラに向けられる。

「残念ながら俺じゃない。イズマエルがやったというのが俺の推理だ。そして――イズマエルも、タイムリピーターの一人だ」

境界不要（ボーダーレス）と、イズマエルの捕獲。薙高のチームというチームは、同一の目的を持って、初めて本格的に共闘に動き出した。

第一章　完

第三十二話　イレイサー先生

「おまえらよーく聞け。俺はなぁ、今日から新任教師になった、イレイサー先生だ」

白髪、長身の男は、いきなり正体を明かした。とりあえず僕は、ものすごい勢いで頭を机にガンガン叩きつけた。

ムツキから事前に噂を聞いて以来、夢であってくれと切に願ってきたことが、目の前に展開されていた。どうやら神様は今日は不在らしかった。ことによると、明日も明後日も不在かもしれない。

「ん？　どうした？　具合でも悪いのかぁ？　少年」

「僕の具合とかそういう問題じゃあないでしょう！　イレイサー先生。ＯＢ不介入の原則はどうなったんですか！？」

「ああ？　俺が教師やるのに不満があるってのか？　少年よ。いちおう俺だってなぁ、教員免許くらいは持ってるんだぜ？」

「だーかーらー」

僕はなんとかして言わんとすることを先生に理解させようとする。だが、その努力は無駄だった。

「だから？　俺を騙る奴が現れたってことで、本人様（イレイサー）が直々に、急遽、薙高生徒会の依頼を受けて、わざわざアメリカから舞い戻ってきたんだぜ？　文句は言わせねえぞ？　少年」

「でも、あなたがピクチャレスとボーダーレスの記憶を消したんでしょう？　そのせいで現に、色々と困ったことになっているんですよ！？」

「あぁぁー。そんなこともあったっけなあ、少年。良く知ってるなぁ。偉いぞ少年」

「少年少年言わないでください。僕にも名前が――」
「じゃあ名前で呼ぶがな、ザ・トリガー。しばらく俺の話を『黙って聞け』」

その瞬間、僕の頭は真っ白になっていた。
記憶消去（イレイサー）。その名前は伊達や酔狂で名乗っているのではなかった。イレイサーは、そのあまりに強力な能力ゆえに、「名乗らずに居ること」自体が済まされないのだ。その事実が、僕には、背中にツララを突っ込まれたように良く理解できた。

「あー、とりあえず、お前。自己紹介しろ。宇宙人」
「どうも。ご紹介に預かりました宇宙人の、星野ハルカです。もちろん偽名ですが、まあ適当によろしくお付き合いのほどお願い致します」
「なんか耳が地球人と違うねー」「ねえねえ、電波とか受信できる？」「日本語うまいねー。睡眠学習したの？」「ＵＦＯの動力源と移動方法は？　やっぱりアイザック＝アシモフ式の超空間ドライブ？」「日本の漫画とかアニメは好きですか？　エヴァ萌えですよねー」

クラスメイトから質問攻めにあう宇宙人。

「だー！」僕は精いっぱいの声を張り上げて抗議した。

「なんで宇宙人が先生のついでのように、ごく当たり前に薙高に転校して来るんですか！　非常識すぎると思うんですけど！　っていうか僕ってこんなキャラでしたっけ!?」
「はっはっはー。アメリカ、ネバダ州の砂漠で拾ってきてからの付き合いだから、なかなか長い付き合いだなー。大人しそうに見えて、けっこう非常識な行動する奴だから気ぃ付けろよぉ、みんなー」

「どうして宇宙人なんですか！　地球人じゃ駄目なんですか！」

僕が疑問を口に出すと。

「私にはイレイサーの能力が効かないから。一緒に居ることには保険の意味がある」

さらっと、とんでもないことを言い返す星野ハルカ。

「ま、そういう事だぁな」

にやにや笑いながら、イレイサーは言葉を続ける。

「俺が暴走したら、止められるのは、せいぜい宇宙人くらいってこったなぁ。哀れなるかな人類よ。その命運は宇宙人に託された――ってね。いやぁ、人気者は辛いなぁー。はっはっはー」

「いいですよ。あなたが暴走したら、僕が敵に回りますから」

「ほぉう。大きく出たな。少年」

「そうなったら、チーム『ムツキ』も敵に回すことになりますよ」

ムツキ、カエデ、ヤヨイが立ち上がる。

「そうかい、そうかい。いやぁー、持つべきものは友だねぇー」

目を閉じてうんうんと頷くイレイサー先生。

「気が変わった。着任早々いきなりどでかいのをぶちかまそうかと思ってたが――どうしてどうして、少しは骨のある奴らが居そうだ。当面はこのまま事態の推移を見守る方向で検討してみようじゃあないか」

全員をジェスチャーで着席させて、イレイサーは問う。

「じゃあ、お前らの中で、イズマエルの名を聞いたことがある奴、手を上げろ」

イレイサーの最後の台詞は、まるで死刑を宣告する裁判官の声のように、教室に響き渡った。

第三十三話　罠

学校の屋上。見晴らしのいい、立ち入り禁止区域。
晴天の青空の下に、イレイサーと、人型ロボット丸が居た。

イレイサーの脳髄覗き（ブレインリーディング）の結果。
シルバースネイル開発者という御大層な肩書きにも関わらず、イズマエルと直に出遭ったものは誰もいないことが判明した。

結論：イズマエルは存在しない。

それは藤王アキラの衛星監視網の観測結果とも一致していた。
この学園に、イズマエルの行動した痕跡は存在していない。にも関わらず、メールは学内で偽装され、発信されていた。

「いまどき幽霊（ゴースト）でも住み着いてんのかねぇ。この学校には」

イレイサーは呟く。人型ロボット丸は、藤王の意見を代弁するためにここに居る。
藤王が直接出向かないのは、記憶を消されるリスクを考えてのことだった。この学校に、イレイサーと直に向きあう覚悟のある奴など――そのリスクを考慮できないバカを除いて――いるわけがない。

「しかしその推理は、あながち間違っていないのかもしれませんよ」
「というと？」
「こうは考えられませんか？　イズマエル自体が、Ｐ２、超常現象だと」
「はっ！　Ｐ２がＯＳをプログラミングし、偽メールを出すってか」

イレイサーは笑い飛ばす。

「でも、人型のＰ２が居ないわけじゃあありません。どちらも可能性としてはあり得ることです。とりわけ――自身が開発したＯＳ、シルバースネイル自体に順応したＰ２ならば」

丸は自説を開陳する。

「じゃあ、何か？　シルバースネイル・ネットワークが、敵ってことか」

イレイサーは心底めんどうくさそうな表情をする。

「人間のＰ２持ちが相手じゃねえのかよ。俺の能力、イレイサーが泣くぞ」

事実、そうなのだった。人類相手には無双を誇るイレイサーも、ハードウェアやソフトウェアにはてんで弱いのであった。

「イレイサー。兵藤カツヒコには会いましたか？」丸が尋ねる。

「あ？　誰だそれ？」

「二年生です。シークレットのチーム『クローゼット』のリーダー。薙刀大学付属病院前戦争の後始末で、パブリックとシークレットのチームを取り仕切り、まとめ上げた人物ですよ。今では、彼がシークレットのポスト『ボス』と呼ばれています。まあ成り上がりの小物ですが、面白い情報を提供してきました」

へえ、とイレイサーは呟く。

「銀髪で目元が非対称な少年が、『ボス』の使いを名乗って、兵藤

カツヒコに接触。スウマキツミ――タイムリピーターですが――への攻撃を依頼してきたそうです」

ほう、とイレイサーは呟く。

「しかし、『ボス』はこの事実を否定。この少年だけが浮いているわけです。そして衛星監視網には、この少年が存在していたと確認できるだけの証拠が無い」

「存在したいときだけ現出できる存在。そんな人型のＰ２が居るとすると、ひょっとして――」

「そう。彼がイズマエルではないでしょうか？　この学園で、タイムリピーター、スウマキツミの存在を知る者は限られています。彼が、同じくタイムリピーターのイズマエルならば、全ての辻褄が合います」

イレイサーは言った。

「じゃあ後はイズマエルの現出を待つだけか？」

「実は、もう罠を張ってあります。ＯＳ、シルバースネイルの修正パッチをイズマエル宛にメールしました。これを処理する間、イズマエルはどこかの情報端末の前に現出し、ログインせざるを得ません」

「各学年の個人アカウントにはステルス・ボットネットを敷いてあります。イズマエル名義か、本校に不在の生徒の名義でログインした瞬間、位置が特定できます」

途端に、アラームが鳴り響く。

「『当たり』です。位置は三階。特別情報室。この屋上から落下し、壁を蹴って跳躍し、窓を割って侵入すれば、ここから１２秒。同行

してくれますね？　イレイサー」
「ジェットコースターは苦手なんだがなぁ」
「安心してください。乗り心地は保証しかねますが、もっと早く終わります」

丸は、イレイサーを抱きかかえると、屋上から飛び降りた。

第三十四話　特別情報室

特別情報室。それは、薙高のサーバ群が置かれた、サーバルームだった。常に冷房が効いているその場所は、春先でも寒々しい。防犯上の理由から、入口には二重にオートロック鍵が掛かっている。が、窓側からの侵入は想定されていなかった。

そこに、人型ロボット丸とイレイサーはガラスを突き破って侵入した。

「やあ。待ってたよ」

そこには少年が居た。銀髪の、目元が左右非対称な少年。脇目も振らずにディスプレイに向かい、キーボードをタイプしながら、少年は返事をした。

「やっぱり何度見ても面白いパッチ（修正、機能追加プログラム）だ。君に敬意を表すよ。藤王アキラ」

「タイムリピーター、イズマエルか？」丸が問う。

「ああ。ネットではそう呼ばれることが多いね」イズマエルが返答する。

「なぜ世界接続（ワールドポータル）を望む？」

それはもう、丸の声では無かった。藤王が、丸を通して、語りかける。

「故郷に戻りたいのさ」イズマエルは、依然ディスプレイに向かい、

キーボードを叩きながら言った。

「僕の故郷は思考するだけでなんでもできる場所でね。そこで、僕は神様のように振る舞うことができた。まさに楽園だったんだ。きっと君たちには想像もつかないくらいに、僕はパワフルな存在だった」

そこで、イズマエルは言葉を区切る。

「でも今はダメだ。僕は単なるタイムリピーターにまで堕ちてしまった。ＯＳシルバースネイルや、誰かの力を借りなければ、存在さえできないような身体になってしまった」

「それで、ボーダーレスか」イレイサーがため息交じりに言った。

「そう。彼女は素晴らしい。僕が必要とする能力を全て持っている。まだ未発達だけれど、その才能が開花するのは時間の問題だ。イレイサー。君が記憶を消したことで、彼女は自分の能力への思い込みから解き放たれた。彼女が持っているのは、壁をすり抜ける程度の能力じゃない。いずれ彼女は、世界接続（ワールドポータル）を生成する程度の能力を持つだろう。そこに、僕の帰還の可能性が残されている」

丸は、藤王の声で言った。

「何度失敗しても、か」

そこで、初めてイズマエルは藤王アキラのほうに振り向いた。

「何度失敗しても。何度邪魔されても。何度繰り返しても。絶対に」

それは少年の顔というには、あまりに悲哀に満ちていた。見るだけで、苦痛さえ感じられる顔だった。それは断固とした決意のようであり、永遠の諦観のようでもあった。誰かに老人の顔だと言われれば、藤王とイレイサーはきっとそう信じただろう。

「ボーダーレスはどこだ?」藤王は質問した。

「安全な場所に保護してある」イズマエルはやんわりと回答を拒絶した。

「イズマエル。取引をする余地は無いのか? 俺たちと協力していくつもりは?」

藤王アキラは提案する。

「それはもう何度も試したんだよ。だがダメだった。ボーダーレスの能力がついには薙高全体を巻き込み、ロストは目に見えて頻発し、最終的に生徒会はボーダーレスの処分を決定する。ボーダーレスの居場所が誰かに知られているというだけで、僕の計画が破綻するには十分なんだ。彼女は必要な時まで隠されねばならないんだ」

「それで薙高を犠牲にして、魔術を成功させるってわけか」

「そうだ」イズマエルは言った。

「僕はこんな学園にも、モノボードの増殖にも、増え続ける超常現象にも興味はない。そんなことはどうでもいい。世界接続(ワールドポータル)だけが僕の望みなんだ」

「結局、ただお家(うち)へ帰りたいだけのガキか。思ったより――薄っぺらい奴だったな」

イレイサーは呟く。と同時に、ポケットに差した拳銃――グロック17――を引き抜き、射撃する。だが、弾丸はイズマエルの身体をすり抜け、床にめり込む。

「妨害は無意味だ。世界接続（ワールドポータル）は必ず成功させる」

イズマエルは立ち上がり、立ち去ろうとする。それでも、藤王アキラは説得する。

「もう一度だけ、俺たちを信じてみないか？　なにしろこの学園には『ザ・トリガー』が居るんだぜ？」

「『ザ・トリガー』？」イズマエルは初めて、耳慣れない言葉を聞いたような反応を示した。

第三十五話　星野ハルカ

ネバダ砂漠の地下にいた時、私を名前で呼んでくれる人など、誰も居なかった。

私はただ単に「ケース２８」と呼ばれ、檻の中に居た。

地図も無く。仲間も無く。外に出て行くことなど、とてもできそうになかった。なにより、私はこの施設に来る前のことを、何一つ思い出せなかった。

自分の身体を眺めまわし、触れていると、私を眺めている人々とは違う特徴があることに気付いた。まず耳の形が違っていた。手の形も少し違うようだ。肌の色は彼らより少し濃く、しかし血液は同じ物質によって循環しているようだった。

それは彼らが私に注射をするときに分かった。血液が赤いのだ。ヘモグロビンである。

そして、私の髪の毛だけが緑色をしていた。観察した結果、私の髪の毛には節があることが分かった。これは後から知ったことだが、ほぼケラチンから成る彼らの髪の毛と、違うものの一つだった。

私は手元にあった情報から推理し、自分が宇宙人であるという結論に達した。

そんな私を外の世界に連れ出したのが、イレイサーだった。

「Ｄｏ　ｙｏｕ　ｓｐｅａｋ　ｅｎｇｌｉｓｈ？（英語、分かるか？）」

「Ｙｅｓ」そう答えると喜ばれることを、私は学習していた。

「Ｄｏ　ｙｏｕ　ｗａｎｔ　ｔｏ　ｅｓｃａｐｅ　ｗｉｔｈ　ｍｅ？（俺と一緒に逃げたいか？）」

「Ｙｅｓ」逃げた先に何があるかは分からなかったが、私はその申

し出を喜んで受けた。私は窮屈な世界と繰り返される質問に退屈していたのだ。

そして、私たちはスムーズにネバダ砂漠から立ち去った。誰も後を追う者はいなかった。たまに銃口を向けてきた者たちは、途端に電源が切れたかのように、棒立ちになって呆けていた。全てはイレイサーの能力故だった。私は恐怖した。そしてその事をイレイサーに正直に話した。彼は、そのときの私には理解できない言葉で、私に向かって言った。

「はっはっはー。ようやく俺がこわーい奴だと気付いたのか？」

私には、そのときイレイサーが、少し悲しそうな顔をしたように見えた。

「ま、あんまり気にしないこった。ケセラセラ。なるようになる。そういう風に世の中はできてるんだからよぉ」

私は星野ハルカという偽名と偽造パスポートを与えられ、日本に入国した。中学校に転校し、友達が出来た。イレイサーとは常に連絡を取り合っていた。

私は比較的早く日本語を覚えたと思う。学校では、基礎的な学問の知識を学んでいった。私は――それを既に別の形で知っていたので――ひどい違和感を受けたが、以前の窮屈な暮らしよりは何百倍も楽しかった。

そして、私はあるとき唐突に、自分の過去を思い出した。

捕獲された時、自分自身で記憶を防衛（プロテクト）していたのだ。それが、外れた。

この地球を観察しに来たこと。人類の善悪を――有害か無害かを――判断すること。ＵＦＯから離れて行動していたところを捕獲されたこと。ＵＦＯがまだ、私の指示を待って軌道上に待機していること。私がその気になりさえすれば、地球は反物質反応弾によって木っ端みじんになるのだということ。

そして同時に。

私は記憶消去（イレイサー）が人類最強の戦力の一つなのだという事実を理解するに至った。

秋葉原で買った材料で交信器を作り、ＵＦＯの人工知能――それはおよそ間違えるということがない――と相談した結果、私は地上に留まり、私を救ってくれたイレイサーを、むしろ積極的に監視、管理するという任務を自ら定めた。

正直に言えば、私はイレイサーと離れたくなかったのだ。これを、この感情を、地球人は恋と呼ぶのだろうか。

私は星野ハルカ。私は宇宙人であり、今ではれっきとした、薙刀高校の一年生である。

第三十六話　ゴールデンウィーク

人生はあまりにも短い、とは誰の言葉だったか。

薙刀大学病院前戦争が終わってから、僕の毎日はあわただしく過ぎ去り、いつもどおりの登校日がやってくる。

ピクチャレスは、せっかく会えたボーダーレスにいきなり逃げられたことがショックなようで、昼食を一緒に食べるのを断ってきた。あるいは、何かしらピクチャレス的な予定があるのかもしれない。

結果、僕は毎日、藤沢カオリ、小早川ムツキ、木村カエデ、天川ヤヨイとのハーレムお食事会状態に陥っている。それだけならまだしも、毎日、藤沢カオリが手作り弁当まで持ってくる。

断りたいが、こと恋愛に関しては無知である僕には、とても断れない。食堂での周りの視線がとても痛い。僕は、人から羨ましがられるのには、慣れていなかった。

「はい、あーん」藤沢カオリの攻撃。

「そんなことしなくても、自分で食べられるから！」僕は防御する。

「まあまあ」「様式美ですし」「くえくえー」

四面楚歌。味方は誰も居ない。

「ところで、みんなはゴールデンウィークの予定はどうするの？」

僕は話を逸らす。

「地元に戻るわよ」小早川ムツキが答える。

「お姉さまと同じく、地元に戻ります」木村カエデが答える。

「地元に帰るー」天川ヤヨイが答える。

「私は黒木君と毎日デートします！」藤沢カオリが満面の笑顔で答える。

えっと、僕も地元に帰りたいんだけど……と言いたかったが、そんなことを言えば藤沢カオリまで地元についてきそうであったし、帰っても両親に会える以外に特に何かがあるわけでもなく。結局僕は自分の予定を言い出せなかった。

「ピクチャレスも地元に戻るだろうし、僕とカオリの二人きりか……」

「あら、ご不満ですか？」カオリが不安げな表情を浮かべる。

「いや、誰かに襲われないかなーと思って」

「確かに、ザ・トリガーと薙高会長の孫……襲われるには十分な組み合わせね……」ムツキが分析する。

「こんにちは」

うおっ。僕はびっくりした。食堂の隣の席には、例の宇宙人が居た。耳の形が尖がっているので、すぐにそれと分かる。それに、緑色のショートカットが、風景に映えている。どうして今まで気付かなかったのだろう。

「……何か用ですか？」ムツキが訊ねる。

「チーム『ポリリズム』からの指令で、ゴールデンウィーク中、ザ・トリガーの護衛をすることになりました。星野ハルカ（偽名）です。宜しくお願い致します」

「それはありがたいけど……」僕は申し出を受けるかどうかで困惑する。

「「失礼ですが、Ｐ２持ち相手に、護衛ができる実力はお持ちです

か？」」

ムツキが問う。それに合わせて、星野ハルカが喋る。声は完全に一致して、見事にハモっている。

「……Ｐ２というわけではありませんが、未来予知を、少々」

その現象に、ムツキはしばらく茫然としていた。

「銃は何を？」僕は聞いた。

「イレイサーと同じ、グロック１７を」

彼女は、それはもう誇らしく、銃を取り出して言った。

狙えば百発百中しそうな、見事な構えだった。そしてその僕の見立ては、間違っていなかったことが、後に判明する。

第三十七話　薙刀商店街

ゴールデンウィーク初日。僕は藤沢カオリと一緒に、ショッピングセンターで買い物を楽しんでいた。藤沢カオリの買い物に付き合っているだけで、時間は飛ぶように速く過ぎる。

薙高周辺には、駅ビル付きの大きな薙刀駅と、それに隣接する屋根付きのショッピングセンター、通称、薙刀商店街がある。今日は駅の中は帰省客で、薙刀商店街は休みの人々で、それぞれ賑わっていた。

薙刀商店街は細長い。薙刀商店街の始まりから終わりまで歩けばけっこうな距離になるが、すぐ隣にある専用道路を無料の送迎バスが往復しているので、距離はあまり気にならない。疲れたらバスに乗って駅に帰ればいいのだ。

僕は本を――暇つぶしに読む短編集が好きなのだ――買いたかったが、書店ではカオリを退屈させてしまうだろう。だからそれはまた別の日にしておくことにして、僕はカオリの行く先々についていった。洋服店、小物やアクセサリーの店、パワーストーンの店。

僕はパワーストーンなんてものを信じていなかったが、せっかくなので、記念に丸く加工されたカーネリアンを買った。カーネリアンは赤い石で、カオリが言うには七月の誕生石なのだそうだ。カーネリアンはまた、活力をもたらす石とのことで、かのナポレオンもこの石で印章を作らせたのだという。

その他にも僕らは、色々な店を巡った。

そこでいつも、脇に控えているのが、星野ハルカだ。

彼女は僕たちの迷惑にならないように物陰に立ち、終始周囲を警戒していた。

食事時になり、食事に誘ったとき、彼女はこう言った。

「食事は不要です。既にレーションを用意してあります」

彼女は自分から喋りかけるということをしなかった。喋りかけられても、任務ですから、と斬り捨てた。気安く心を許さない、孤高さが感じられた。実際、彼女はイレイサーとペアを組んで活動してきたのだろう。僕らの護衛なんていうのは、本当にごく簡単な任務なのかもしれなかった。しかし基本的に、任務は任務であり、妥協する余地は無い、というのが彼女の主張だった。

「ムツキさんたちがいないと、静かになりますね」

生まれて初めてのハンバーガーと、つけあわせのサラダを食べながら、藤沢カオリがぽつりと呟いた。

「そうだね。でも、こうして二人きりになれるのは嬉しいよ」

リップサービスも多少含んだ言葉を、僕は返す。最初会った時こそ、痛い女だと思っていたが、僕は次第にカオリに好意を抱き始めていた。

パン。発砲音。立て続けに、数発の発砲音がする。僕は椅子を蹴って立ち上がり、M9を構える。すると、そこに星野ハルカが現れた。

「チーム『クラシック』の所属者が襲撃してきたようですが、問題ありません。三人仕留めました」

あの一瞬で三人も。僕は眩暈(めまい)がした。

「おそらく私のチーム『ポリリズム』がザ・トリガーの護衛に回っ

たのが気に入らなかったのでしょう。ご迷惑をおかけしたことをお詫び致します」

「迷惑だなんてそんな……」僕は驚く。

「そうですよ！　星野さんは身をていして私たちを護ってくださっているのに……そうだ！」

藤沢カオリは何か思いついたようだった。

「これから映画を見に行きましょう！　これなら護衛の星野さんも楽しめますし！」

映画か。悪くない。僕は同意する。無料送迎バスに乗り、映画館を目指す。

ショッピングモールの端に、映画館があるのだ。

上映されていたのは、「スネイプ先生の銀河帝国興亡史」「ウインターウォーズ」「ドラえもん　のび太のナメック星探索記」だった。カオリはウインターウォーズが観たかったようで、僕もまだ見ていないんだと答える。

「それじゃ、チケットを買ってきますね」

藤沢カオリと星野ハルカは、チケットを買いに行く。僕は、その間にお菓子とジュースを買っておくのが役割だ。護衛の観点から言えば、戦力を分断されるのは良くないことだが、僕は自分で自分の身を護れる自信があったし、星野ハルカにならば、安心して藤沢カオリを任せられる。

「お菓子とジュース、買ってきたよ」

僕はロビーに居るであろう藤沢カオリと星野ハルカを探す。居な

い。僕は焦る。まさか敵のＰ２持ちに襲撃されたとか？　銃でも未来予知でも成すすべがないような相手に？　ケータイを取り出して連絡を試みるも、圏外のため通話はできないと表示される。

僕は愛用の銃、Ｍ９を引き抜き、慎重に辺りを見回す。見知った人は誰も居なかった。

いや、居た。凍結者（フリーザ）だ。

第三十八話　映画館

「おい、フリーザ」僕は声を掛ける。
「ん？　なんだザ・トリガーか」どうでもよさそうな声。
「このへんで藤沢カオリと星野ハルカ――例の宇宙人を見なかったか？」

映画を見終わってご満悦といった表情のフリーザに、僕は思い切って質問してみる。

「見てないね。って、まさか、またトラブルに巻き込まれてるのか？」
「その通り。さっきチーム『クラシック』に襲撃された。何か情報はあるか？」
「さあ。分からないな。俺が所属しているのは『ブレーメン』だから……って、何で俺がお前に自己紹介しなきゃならないんだ！」
「藤沢カオリと星野ハルカが消えた。ケータイも通じない。お菓子をやるから捜索に協力しろ」
「そんな餌で釣られるか！　と言いたいところだが、会長の孫に貸しを作っておくのも悪くないな。手分けして探そう」
「ありがとう。助かる」

僕らはロビーにいる客に目を光らせる。
明らかに場になじまない格好をした男が一人いた。タキシードを着て、黒い蝶ネクタイをした男だ。格好は紳士と言ってもいいが、頭がフクロウだった。壮絶すぎて思わず納得してしまうほどの違和感がある。
フリーザが僕に声を掛ける。

「あのフクロウ男、怪しくないか？」
「僕もそう思っていたところだ」

「やあ君たち」フクロウ男のほうから声を掛けてきた。
「私はチーム『クラシック』のリーダーだ。先ほどは部下が迷惑をかけて済まない」
「先ほど？　現在進行形の問題には関与していないと？」僕は問いただす。
「ふむ。何か問題があるのかね？」彼は上品に返す。
「大問題だ。藤沢カオリと星野ハルカが消えた」
「なるほど。そして君たちは私を疑うべくして疑っており、私は疑われるべくして疑われているというわけかね」
「その通りだ」
「まあ、とりあえず銃は仕舞いたまえ。話し合いで解決しようじゃないか」

そう言うと、彼は僕とフリーザの銃を取り上げてしまった。まるで手品でもするかのように、僕の銃は彼の手に収まっており、彼はゆっくりとそれを空中の見えないテーブル――そうとしか形容できない――の上に置いた。

「考えてみようではないか。妙齢の子女が、男を一人残して消えた。答えは一つしか無いように思えるがね」
「どういう意味だ！」僕はいらつく。
「だから、よく考えてみたまえよ。困った時が、頭の良くなるチャンスだと、ＮＨＫ教育テレビのペカリンさんも言っていたではないか」
「答えを知っているなら教えてくれてもいいんじゃないか？」
「これはエチケットの問題だよ、君。これだけ言ってもまだ分からないのかね。察しが悪いのは良くないことだよ、君」

「君君うるさい！　お前はイレイサーか！」
「イレイサーは関係ない」
「まさか星野ハルカが裏切って……」
「それも違う。どうも君には『Ｐ２持ちに襲われた』という固定観念があるようだね」
「他にどんな可能性があるというんだ！」
「まあ、それもすぐに分かることだよ」

不意に、僕の肩を叩く者がある。
僕は素早く、そいつのほうに振り向いた。星野ハルカだった。

「その……藤沢カオリとトイレに行ってきた」少し照れくさそうな星野ハルカ。
「ごめーん」藤沢カオリが笑って謝る。

張り詰めていた緊張の糸が途切れて無くなって。僕は脱力し、その場に崩れ落ちた。

「ほら、言った通りだろう？」フクロウ男はくつくつと笑った。
「では、問題が解決したところで、銃を返そうではないか」フクロウ男がそう言うと、銃は僕の手の中にあった。

見上げると、フリーザが呆れた表情でこちらを見下ろしていた。

第三十九話　ＭＩＢ

モノボードに関する定期報告書。
今回の第二次モノボード事件では、相貌失認症（プロソパグノシア）の少女、山岸ミノリらによるモノボード狩りの成果により、急激な増殖は起こらなかった。
しかし、思春期の青少年たちに接触感染するという危険性は未だ健在。ゴールデンウィーク中にさらに一定量増加すると思われる。
モノボード関連の噂は、発信源である岡崎キョウコの入院により、収束中。
ゴールデンウィーク明けに第二次モノボード狩りが行われれば、モノボードの増殖と羽化は観測されなくなるかもしれない。

「送信完了っと」
スウマキツミは、報告を終える。

「さあて、ザ・トリガー。お手並み拝見と行きますか」

ザ・トリガー「ＭＩＢ」

「ッ！　銃撃が来る！」

星野ハルカが叫んだのは、ゴールデンウィーク二日目に、僕とカオリが宝石店でペアリングを買おうとしていた時だった。
そのとき、僕はまさかこんなガラスだらけの店の中で銃撃戦をやらかすバカはいないだろうと予想していた。だが、そんな根拠のない推測はあっけなく破られた。
ショーウィンドウは割れて吹き飛び、僕はカオリの頭を掴んで床に伏せさせた。降り注ぐガラスのシャワーを僕はサイコキネシスで

受け流すので精いっぱいだった。
しばらくすると銃撃は止んだ。僕は反撃の機会を伺う。

「ハロー。ハロー。日本の皆さんコンニチハー。俺たちはアメリカからやってきた怖ーいおじさんたちデース。主に宇宙人の捕獲を任務としてマース」

そのおどけた台詞と反対に、すさまじい殺気が見え隠れする。

「まあそういうことだから、日本人。大人しくサンプルを渡せ」

サンプルというのは星野ハルカのことだろう。奴らの要求はこうだ。星野ハルカを引き渡せ。さもないとぶっ殺すぞ。シンプルで分かりやすい。だから僕の決断も早かった。

「やなこった！」

僕はサイコキネシスでガラス片を人型（ヒューマンフォーム）に形作り、それを盾にして迎撃を行う。

「すまない。私のせいで」
「何言っているんだ？　星野ハルカ。これは戦争なんだ。チームに、薙高に喧嘩を売った奴とは、徹底的に殺りあうまで終わらないんだよ」
「何を言って……」

やはり、星野ハルカはまだ薙高イズムを分かっていない。それは、外敵に対する完全に一体となった反撃精神。誰かに征服されることを望まない、学園の自治を求める独立精神。それが、今の僕には痛いほど感じられた。

薙高は敗北を認めない。たとえそれが、偽名を使う宇宙人のためであったとしても。

「じゃあ、俺たちの敵になったついでに教えてやろう。俺たちの名は特にない。例の映画になぞらえて、ＭＩＢ（メン・イン・ブラック）と呼ぶ奴はいるがね。さて、俺たちに刃向おうって奴はどこのどいつだ？」

「ザ・トリガー。チーム『ムツキ』の攻撃担当（アタッカー）だ」

僕はＭ９を構え、宝石店の玄関に立つ人影に向かって三発を撃ち込んだ。その全てが誘導弾（ホーミング）。目標に命中したことを確認し、僕は再び地面に伏せる。

「痛えな……だが残念、訓練弾（ゴム）で落ちるほど俺たちは貧弱（ヤワ）じゃねえんだ。俺たちはおつむ以外はサイボーグなんでな」

銃撃の効果が無い。となると、答えは一つだ。こちらの負け。以上。終わり。

「あんたらに、おつむがあったとは驚きだ。もしほんの少しでもおつむがあったら、薙高とやり合うのは絶対禁忌（タブー）だと理解しているはずだからな」

僕は台の影に隠れながら、連中を挑発する。

「ははは！　くだらんジョークだ。ただのいち学園が、俺たちをどうするっていうんだ？　俺たちゃ、バックに合衆国（ステイツ）がついて……」

ガガガガガ。訓練弾では無い、本物の銃撃の音が立て続けに聴こえ、そこで会話が途切れる。誰が発砲したのだろうか？　全て急所

に命中したのだろうか？

「チーム『エトピリカ』の駒鳥ススムだ。ザ・トリガーの『護衛任務』はまだ続いている。９ｍｍパラベラム弾の味はどうだ？　メン・イン・ブラックさんたちよ」

「オー。ベリーベリーバッドデース。日本人あきらめの悪いの良くないデース」

「頭に実弾撃ち込みやがって……生身なら死んでるじゃねえかよ……。もういい。ぶっ殺す！　てめえら全員あの世行きだ！」

相手が逆上したのを見てとり、僕は再びガラス片の人型（ヒューマンフォーム）を盾に、台から転がり出る。数歩走ると、目の前に、男が二人居た。

「急に三下じみた台詞言うんじゃねえよ。あんたら……死亡フラグが立ってるぜ！」

ガラス製の拳のパンチが、メン・イン・ブラックの頭部にめり込んだ。一撃、一撃に重いサイコキネシスの力が込められる。拳のラッシュだ。二人のうち背の高い、白人の男のほうを殴り続けながら、僕は叫んだ。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

それを見て、背の低い、中国人風の男がとっさに銃を構える。だが。僕に向かって発砲するその前に。弾倉を交換し、距離を詰めた駒鳥ススムが、ダメ押しの弾丸を、残りの一人の頭部にぶちかました。

そして。

「フリーズ！」

その時ほど、凍結者（フリーザ）が頼もしく見えたことはなかった。メン・イン・ブラックは沈黙した。

薙高の「チーム」たちは、かくして宇宙人をつけ狙う組織を撃退したのだった。

第四十話　脱走

いわゆる「スピリット・オブ・ガンマン」は、狙撃と早撃ちに優れた、人型のＰ２である。銃さえあれば、手錠を砕くことは簡単なことだった。そう。銃さえ、愛用していた二挺のコルト・ガバメントさえあれば。

銃が無いこのＰ２は、ただのはったりにしかならない。

金髪で長髪の猫殺しのエイラは、ホテルの一室に閉じ込められていた。服装はパジャマに着替えさせられ、手錠で壁にしっかりと繋がれている。

藤王アキラによる「尋問」は既に一通り済んでおり、今では定期的に、藤王アキラの代理人たるロボット、三角が、エイラに食事――カロリーメイトと水――を運んでくるだけだった。

Ｐ２「スピリット・オブ・ガンマン」の素手での攻撃は既に試してみた。だが、結果はノーダメージ。三角は驚いたことに、Ｐ２を認識し、その攻撃を避けてみせる程度の性能を持っていた。

「ティガの助けを待つしかないか……」

鴉殺しのティガとは長いつきあいになる。別に打ち合わせて行動しているわけではないが、毎回どこかしらでばったり出会うのだ。タイムリピーターであるエイラにとって、自己紹介なしに話の通じるティガは貴重な存在だった。

しかし、エイラはこのホテルの部屋に見覚えが無い。何度も何度も、飽きるほどタイムリピートしているが、そもそも捕獲された回数自体が少ないうえに、この部屋は初めてであるように見えた。

「もしかして……ランダムに監禁先のホテルを決めたのか？　蝶（バタフライエフェクト）の

羽ばたき効果が絡んでくると、ティガがここを見つけ出す確率は天文学的に低くなるぞ……」

エイラは焦っていた。このまま猫を殺せなければ、タイムリピートは発動しない。情報を吐くだけ吐かせたあと、イレイサーに――会ったことはないが、その噂は聞いていた――記憶を消されたりすれば、それこそ取り返しのつかないことになる。タイムリピーターにとって、自分の記憶は貴重品の入った金庫のようなものだ。いや、それよりも重いか。記憶は、一人の人生の全てに等しい。

「……八方ふさがり、か？」

それでも、助けはやってきた。ティガとは、そのでかいガタイに似合わず、情の深い男だったからである。

丸（藤王アキラ）とイレイサーは、ＭＩＢ（メン・イン・ブラック）を名乗るサイボーグたちを検分していた。星野ハルカ絡みとなれば、イレイサーが出張ってくるのも止むを得ない。

駒鳥ススムにワイヤーでぐるぐる巻きにされた二人は、身動きが一切取れなかった。

「なんだあ？　こんだけの武装しか持たずに特攻してきたのかぁ？」

イレイサーが馬鹿にする。

「舐められたもんだな薙高（おれたち）も」丸が、藤王が呟く。

イレイサーが二人の頭に手を当てて、脳髄覗き（ブレインリーディング）をしてゆく。僕には、その様子を遠巻きに眺めていることしかできなかった。

「合衆国（ステイツ）から派遣されてきたサイボーグ二匹か……ボディーの対弾

性能はあるようだが、頭部狙い（ヘッドショット）には脆（もろ）いようだな。まあ頭（おつむ）が生身なら当然といえば当然か」藤王アキラが分析する。

「ハーイ、ボーイ。交渉する余地はアーリマせんかー？」

「全く無いな」藤王が答える。

「くそっ……あんな危険な宇宙人を野放しにしておいて、後で悔やんでも知らんぞ……」

星野ハルカが、びくりと震えたのが見えた。

「そんな先のことは知ったことじゃないな」イレイサーが即答する。

星野ハルカは安堵の表情を浮かべる。イレイサーに拒絶されれば、もはや行くところの無い身分。それゆえに。

「どちらにせよお前らの記憶は全部消させてもらう。これから野良サイボーグとして生きるんだな」イレイサーの冷酷な台詞が、判決の全てだった。

ズン。ズズン。重い音が数度響いて、ドアが切り裂かれる。Ｐ２「スピリット・オブ・ソードマン」。それは全てを切り裂く剣士の如き像を結ぶ、超常現象。

ジーンズにＴシャツというシンプルな姿をした、筋骨隆々とした大男。鴉殺しのティガの到着である。

「調子はどうだ？　エイラ」

「最悪よ……食事はおいしくないし、サービスもなってないし。で、どうしてここが分かったの？」

「スウマキツミに訊いた。数ヶ所巡ったが、なんとか当たりを引け

たな。おかげで奴にはでかい借りができた」

言いながら、ティガは手錠をP2「スピリット・オブ・ソードマン」で切断する。汎用性という点で見ても、精密性という点で見ても、「スピリット・オブ・ガンマン」には真似できないことの一つだ。

ティガは、袋に入れて持ってきた服を差し出し、エイラに着替えるように指示する。

「銃はあるの？」

「M9二挺ならこっちの紙袋の中に用意してある」

「そう。コルト・ガバメントはしばらくお預けね」そんな不平を述べつつも、エイラは知らず知らずのうちに笑い、満足そうに頷いていた。

第四十一話　過去

「マーカーを付けられている可能性が高いな」ティガは言った。
「どういうこと？」金髪を束ねながら、エイラは訊ねた。
「藤王アキラは独自の監視衛星システムを持っている。俺がこのホテルに来たことは既にバレているだろう」
「どこかで『まく』必要があるってわけね」

ティガは一枚のカードを取り出す。それはＳｕｉｃａだった。

「上空から見えない場所――地下鉄の非常階段を使う。いかな魔王、藤王アキラと言えど、全ての出入り口を把握しているとは限らんからな」

ティガは、その風貌に似合わぬミニカーに――レンタルしたものだ――身体を押し込める。エイラは助手席に座り、シートベルトをする。発車。

「言いたくないことだが、お前の記憶は一部消されている」
「なんですって！」エイラがくってかかる。
「気付かれないよう、『記憶を消された』という記憶ごと消されているんだ。イレイサーは既にお前の記憶を読んだ。シナリオは今、魔王の掌の上にある」

エイラは自分の記憶を思い出す。確かに、「今回だけ」捕まったというのは解せない話だ。ティガが言うように、何度も何度も捕まっていると考えるほうが合理的なように思えた。しかし、だとすれば――

「じゃあ、あなたはいつも私を助けに来てくれてたわけ？」

その質問に、ティガは答えなかった。ラジオからは、最新のＪ－ＰＯＰｓが流れ続けていた。

「クソッ。クレイジーな薙高生徒どもめ！」

薙高商店街の片隅で、イレイサーに記憶を消されたＭＩＢ（メン・イン・ブラック）の二人組は、首筋にある切れ目に、メモリ・カードを差し込んでいた。それによって、消去された過去の記憶をぼんやりと取り戻す。インプラント・メモリ。合衆国（ステイツ）が裏で開発した、サイボーグ用の極秘技術である。

「メモリがあって助かりマシータ。野良サイボーグになるのは、嫌デース」片言の白人のほうが、安堵の息を漏らす。

「だが、おかげで奴が何をどうやって記憶を消しているのかは分かったぞ。当該領域にプロテクトをかけろ。二度と同じ手は食わん」中国人風の男は、そう言い切った。

「二人じゃとても敵いマセーン。合衆国（ステイツ）に武力支援を求めるべきデース」

「それをやったら全面戦争になるだろうが。薙高ＯＢ全員を敵に回して、何かメリットがあると思うか？」

沈黙が落ちる。打開策は――あった。

「Ｎｏ．４。星野ハルカ本人、および、ザ・トリガーから、藤沢カオリに標的を変更する。藤沢カオリとの交換条件なら、星野ハルカを提供してくるだろう」

「そうウマークいきマスカー？　Ｎｏ．３」

「俺たちの記憶を消して、安全になったと思い込んでいる今がチャンスだ。確か藤沢カオリは――薙高会長の孫だったな」
「前回のように、ザ・トリガーと一緒に行動しているのではアーリマせんか？」
「雨の日を狙うさ。雨の日なら、外出はしないだろう。邸宅に乗り込んで強引に拉致すればいい」
「監視の目がキツーイのでは？」Ｎｏ．４と呼ばれた白人が呟く。
「光学迷彩（ステルス・ウエア）を使うさ。あれならビデオにも証拠は残らん」Ｎｏ．３と呼ばれた男は、自信満々に答える。
「ナルホード」

かくして、標的（ターゲット）は藤沢カオリへと変更された。

地下鉄の非常階段を登りながら、エイラはティガのことを考える。ティガと知り合ったのは、いつだったか。確か、薙高の構内をぶらついていたときに、声を掛けられた覚えがある。

「……猫殺しのエイラだな」

その瞬間、スピリット・オブ・ガンマンが二挺のコルト・ガバメントを引きぬき、即座に引き金を引く。撃ち出された二発の弾丸は、確実にその男を撃ち抜くと思われた。
だが、そうはならなかった。ティガの超高速の斬撃――スピリット・オブ・ソードマン――が、二発の弾丸を一刀両断したからだ。

「争う必要はない。ただ、話がある」

そして、エイラはティガが知る限りの未来の知識、予定表と、タイムリピーターとしての生き方を学んだのだ。それからは、好き放

題やった。宝くじを当てて豪遊したり、薙高の生徒に紛れ込んだり。だが、邪の猫払い――普通の猫が完全に居なくなる事態は想定外だった。

いや、それすらもティガにとっては、予定調和なのかもしれない。

不意に、ティガに質問してみたくなった。

「ティガ。これまでに何回タイムリピートした？」

「さあな……だがこれだけは言える。スウマキツミやイズマエルに比べれば、俺たちはまだまだひよっこだということだ」

自分は何回タイムリピートしただろう。エイラはその数を数えはじめ……キリが無いのでやめた。

第四十二話　藤沢邸

暗い嵐の日だった。と、スヌーピー風に話を始めても傑作になんてならないことは分かり切っている。とりあえずのところ、雨は降ったり止んだりしていた。

僕はゴールデンウィークに出された宿題をするために、藤沢カオリの家に来ていた。一言でいえば豪邸だった。庭には噴水があり、玄関には彫像が彫られ、天井は高くシャンデリアが煌めき、リビングはひたすら広かった。僕はカオリの「勉強部屋」に招待された。そこには、ありとあらゆる教育関連書籍が整備されていた。

英語の訳が苦手な僕は、英語の教科書徹底解説！と銘打った学習本に大いに助けられた。藤沢カオリは典型的な優等生のお嬢様で、僕が難しいと思っている個所を解説してくれたりした。

その部屋の外で、駒鳥ススム、星野ハルカが、配置に付いている。実弾装備に、予備カートリッジ準備という念の入れようだ。

だが僕は、実際にはただ宿題をやりに来たのではなかった。藤沢カオリが知っている、モノボードの情報を聞き出す為に来たのだ。十年前の集団自殺。その真相を。

「ところで……十年前、何があったんだ？」

僕はぽそりと訊いてみた。カオリの表情は一瞬凍りつき、次に観念したように吐き出した。

「モノボードが現れたのよ」

「モノボードってなんだ？」

そう。それが分からない。僕はそれを遮断するためにいるらしい

のだが、さっぱり話が見えてこないのだ。

「そうね……こう考えて。あなたは書店にいるの。大きな書店よ。そこにはたくさんの本があって、一生かかっても本を読み切ることはできない」

「イメージした」

「その一つ一つの本の向こう側には、その本を書いた人、設定、時代背景、取材した事、没ネタ、いろんなものがあるわ。本に全く反映されていない無数の情報もある。本を読んでも知ることも理解することも考えることもできない、そういう領域があるの」

「うん」

「その、黒木君が、人間がどれだけ努力しても、どうしても触れられないもの全てをまとめて、モノボードと呼ぶのよ」

僕は無限に広がる知識を想像した。その中で、手を広げ、必死に何かを得ようとする自分を想像した。手の届かない場所。無限の広さを持つ、知覚不能領域。

「可能性の麦束。あるいは絶望の怨嗟。それを知れば、人間ではいられない――」

藤沢カオリは、はっと正気に戻ると自分の呟きを打ち消すように頭を振った。

「じゃあ、モノボードは神様みたいなものなのか？」僕が問うと。

「ある意味では、そうなの。おじいちゃんから、モノボードになった人たちは、集まって臨界に達すると、『羽化』するって聞いたことがある」

「肉体を脱ぎ捨てて、精神だけの存在になるとでも？」

「そう。その表現が一番近いと思う」

藤沢カオリはテーブルの上の紅茶をすすった。

「極論すれば、薙刀高校は、モノボードの羽化によって生まれたの。十年前を起点として、その前後にこの日本に生まれたありとあらゆる超能力は、モノボード事件が原因なんじゃないかって、おじいちゃんが言ってた」

「集団自殺どころか、神様が生まれてたってわけか。道理で生徒会が戒厳令を敷くわけだ」

僕は紅茶を喉に流し込む。おいしい紅茶なのだろうが、味はしなかった。

「二度目のモノボード事件は、一度目よりも大規模になるかもしれない。人がたくさん死んで、この薙高に超能力者がいっぱい現れて、何もかもめちゃくちゃになるかもしれない。私、怖いの……怖いよ……」

そう、藤沢カオリは僕を見上げるようにして言った。その目には涙がたまっていた。

「大丈夫だよ」僕は立ちあがって言葉を続けた。

「モノボードは僕が遮断する。アンチ・モノボードとして。それが僕の使命らしいから」

一方そのころ、ＭＩＢ（メン・イン・ブラック）のＮｏ．３とＮｏ．４は、光学迷彩（ステルス・ウェア）を装着して藤沢邸に潜入するも、雨の中、庭に放し飼いにされている８匹のドーベルマンに追い回されていた。

「Ｎｏ．３　この作戦は失敗デース！」

「そんなことは分かってる。Ｎｏ．４！　今はとにかく逃げろ！
なんとか逃げ切るんだっ！」

第四十三話　号外

岡崎キョウコは、モノボードは、5月のゴールデンウィーク明けの学校に来ていた。とは言っても、時刻は、深夜0時である。固く閉ざされた校門を跳躍して飛び越え、つかつかとグラウンドの中心に向かう。

「さあ！　集え、モノボードたちよ！」岡崎キョウコは叫んだ。

しかし、何も起きなかった。再度台詞を繰り返すも、応える者は無い。

それで、岡崎キョウコは、自分が何か重大な見落としをしていることに気が付いた。自分が病院で回復を図っているうちに、何かが起きたのだ。モノボードに関する何かが。

岡崎キョウコは図書館へと足を運んだ。閉ざされた玄関。岡崎キョウコは自身の位相をずらし、窓ガラスをすり抜けて、中へと侵入する。漆黒の闇の中、岡崎キョウコは日刊薙高新聞に目を通した。モノボードは、光源が無くとも、字が読める。

モノボード狩り。相貌失認証（プロソパグノシア）の山岸ミノリを主体とする、対モノボードチームの結成と活躍。邪による邪気封じの儀式。それだけ知れば十分だった。

分かってしまえばなんのことはない。モノボードは「増殖できなかった」のだ。何とも単純。なんとも原始的。はは。笑い声が漏れた。ははは。岡崎キョウコは笑う。ははははは。

「何か、可笑しいことでもあったのかい？」

岡崎キョウコの顔面が、凍りついた。遮断のトキコの声。そのとき図書館という空間は、能力「マイ・スウィート・ルーム」によって、既に遮断、隔離されている。

そこはまさに、暗黒の、戦場。

「アンチ・モノボード。ザ・トリガー。それが今の薙高に存在することは分かっていたはずだ。それともまさか、人間如きには、何も介入できないとでも思っていたのかい？」

岡崎キョウコは顔を歪める。自分は確かに侮っていた。人間などには不可能なことと、割り切っていた。その結果がこれだ。

「モノボードは増える。モノボードは増えて溢れるんだ。どんな妨害があろうと、どんな工作があろうと、水は高きより低きに流れ、モノボードは増える」岡崎キョウコは強がる。

「だが、増えなかったね」遮断のトキコは言い切る。

そうしている間にも、岡崎キョウコの周辺には特殊なアミラド繊維が張り巡らされ、遮断された空間は次々と範囲を狭めて行く。遮断のトキコ。その名は、決して伊達ではない。

「そして、お前はここで遮断される。あの屋上のように、お前に逃げ場は無い」

岡崎キョウコは目を閉じた。遮断のトキコの真骨頂は、遮断された空間内での爆薬使用によるものだ。逃げ場の無い空間での爆風は、威力を失わないまま延々と荒れ狂い、隔離空間内の構造物を完全に破壊、粉砕する。岡崎キョウコは目を開いた。

「そうだな……今日のところは負けを認めよう。それでも、モノボードは増える。増えて溢れる。私は『最後の』モノボードなのではない。私は『最初の』モノボードなのだ。あとのことは『次の』モノボードに任せるとしよう」

「……ならばそれも遮断するまでだ」

一瞬、閃光が図書館を照らし出した。雷管の起爆剤が爆薬へと十分な衝撃を伝える。そして直後の爆風が恐ろしい音を立てて、隔離されていた図書館の一角を、まるごと完全に吹き飛ばした。

その日の朝、ゴールデンウィーク明けの薙刀高校では、奇妙な――まるでそこだけ綺麗に遮断されていたような――図書館爆破事件が号外を飾ることになる。

かくして、『最初の』モノボードは沈黙した。

第四十四話　アンケート

「モノボード、岡崎キョウコは私の権限で遮断した」

登校中の出来事である。雑踏が、周囲に居た生徒たちが消えた。残されたのは僕一人――いや、もう一人の少女。ありがたいことに、唐突に発生した隔離空間「マイ・スウィート・ルーム」に、ザ・トリガーこと僕　黒木シュンは、もはや慣れさえ覚え初めていた。

薙高の制服を着た遮断のトキコは――今度はシルエットではない――予想していた通りの美人だった。美人と表現したのは、美少女というには、あまりに鋭利な瞳をしていたからだ。彼女は、僕を見下しているように見えた。

「じゃあ僕はお役御免ってわけですかね」僕は皮肉たっぷりに応える。

「必ずしもそうではない」遮断のトキコは言葉を切った。

「今日、山岸ミノリは学校を休んでいる。理由は『風邪』だそうだ。ということはつまり――」

「現在、モノボードを識別できる者は居ない、と」僕は言葉を繋ぐ。

山岸ミノリの不在が、どれほどの障害になるのか、僕は頭を巡らせた。まず、第二次モノボード狩りはできない。現在どれほど汚染が広がっているのかも確認できない。爆発的増殖。そんなシナリオが有り得るのか？

「岡崎キョウコは行動を起こさなかったんですか？」

「起こした。だからこそ私が遮断できたのだ。だが、彼女は負け惜しみのような事を言っていた。その根拠となる現象が起こり得るのかもしれない」

何が起こるかは分からないのに、こいつは僕に忠告を与えようとしている。僕はこれでアンチ・モノボードの共犯者というわけだ。やれやれだ。こんな面倒な役割、他の誰かが肩代わりしてくれればいいのに。

「そういや、あんたはタイムリピーターなんだってな？　これから起こることを予言したりはできないのか？」

「モノボードはそう簡単に手の内を明かさない。あのスウマキツミでさえ完全には理解できていない現象なのだ」

「それでも、少しくらいは助言できるでしょう？」

「……モノボードへの感染は、直接接触でなくても起こり得る。図書館の隔離は現在、新聞部が行っているが……そこには近づかないことだ。汚染は間違いなく広がるだろう」

不意に視界が暗転し、僕は再び雑踏の中に放り出された。肩がぶつかる。謝ろうと顔を上げると、そこにはピクチャレスの姿があった。

「気配も無しに……どこから現れた？」呆然とするピクチャレス。

「ちょっと異空間から、ね」僕は言い訳をする。

僕はピクチャレスと歩きながらケータイを取り出し、学園ＳＮＳを呼びだすと、一通のメールを送った。宛先、新聞部。タイトル、モノボードの汚染について。本文、図書館における取材によるモノボードの汚染拡大についての懸念事項。詳細は直接会って伝える。送信。

とりあえず今の僕にできるのはここまでだった。ホームルームが始まる前に、僕はチームムツキ、すなわち小早川ムツキ、木村カエデ、天川（てんかわ）ヤヨイと合流し、状況を手短に話した。

「山岸ミノリさんが休み……汚染状況が確認できないのは問題ね」
「新聞部……忠告して聞いてくれる人達じゃないですからねぇ。既に汚染されちゃっているかも？」
「直接なぐりこむかー？」

話していると、イレイサー先生が登壇する。

「やあやあ諸君。宿題はちゃんとやってきたか？　第1学期中間試験の勉強はしてきたか？　とりあえず今日は抜き打ちテストというか、まあ、ちょっとしたアンケートを行う」

配られた用紙を見て、ムツキが顔をしかめる。

「ポリティカルコンパス！？　薙高では学生の政治的思想まで収集するわけ！？」
「おー、よく知ってるなぁ、小早川ムツキ。まあ俺が『洗わなくても』いいか、ちょっと検査するだけだ」
「『洗う』？」僕は思わず聞き返す。
「必要に応じて、俺は生徒を『洗脳』する権限を与えられている。まあ、なんだ。ケージの中の小動物になったつもりで正直に答えるんだな」

イレイサー先生が手をひらひらさせながら去ると、教室がたちまちざわつき始める。まったく、イレイサーの暴君ぶりは、とどまるところを知らなかった。

第四十五話　スクナヒコと猫

プログラムは思考する。プログラムは指向する。プログラムは試行する。

学園ＳＮＳの中枢たる、検索エンジンは思考する。いかに食べるのか。なぜ食べるのか。どこでランチを取ろうか。そんなバカげた問いを、大真面目に。思考する。指向する。試行する。それは何だというのか。意識を持たぬ人工知能。藤王アキラの創り出した、最も巨大にして最弱の存在。

そのプログラムの名は「スクナヒコ」という。これから語るのは、そのプログラムの話である。興味のない方は、読み飛ばしても結構。

藤王アキラは小学生のときに人工知能の論文を書いたとされる。中学生のときにはそれを実装し、ロボットまる、さんかく、しかくを造った。薙高の公式な情報源、新聞部の概略情報ではそういうことになっている。だが、藤王アキラ最大の偉業は、そんなところにはなかった。

検索エンジン「スクナヒコ」を創り上げたこと。それが、彼を知る者が語る、最も恐るべき偉業であった。単に情報を収集するのみならず、積極的に情報を理解し、分類し、認識し、思考する検索エンジン。生徒が活用しない時間帯、膨大なアイドル時間を、自らの進化と深化に振り向ける人工知能。ユーザの思うところを的確に推論し、ユーザのレベルに合わせた情報開示を行う沈黙の賢者。

もし仮に薙高に王がいるとすれば、それはイレイサーでも、魔女水城でも、魔王藤王アキラでもなく。それはスクナヒコであった。

人間という愚かで粗雑なプロセスを管理し、支配し、最適解へと向かわせる。そのためにスクナヒコはあった。この世の王となるべく命ぜられた、一つの賢者（プログラム）。藤王アキラ自身も時々忘れていたが、

そのプログラムは、誰よりも賢かったのである。

そしてそれは、モノボードについても、例外ではなかった。スクナヒコは判断する。それは人間にとって危険であると。隔離すべき情報であると。そして誰も知らない領域にモノボードについての情報は格納され、その扉は固く閉ざされた。

ザ・トリガーがそれを調べ始めるまでは。

モノボードを打ち倒すであろう者、ザ・トリガーこと黒木シュンが現れた今、その扉は開け放たれた。秘密を打ち明ける時が来たのだ。モノボードという言葉は、もはやＮＧワードではなかった。

スクナヒコは彼を誘導することにした。もっとも、スクナヒコに手脚は無い。スクナヒコにできることは限られている。それは運命を、ほんの僅かに弄る程度の――介入。

ザ・トリガー「スクナヒコと猫」

大抵の物語がそうであるように。世界が重大な危機に陥った場合に登場する動物は、一匹の猫であった。名をクロという。その時点で、もはや外見について多くを語る必要はあるまい。彼は――クロは男性である――藤王アキラの家の周辺に住み、もっぱら藤王アキラの後をつけて楽しんでいた。

クロ本人はばれていないと思っていたが、むろん藤王アキラにはばればれであった。藤王は時々振り返ると、クロの瞳をまっすぐ見て言った。

「これからすごく楽しいことが起こるんだぜ」

そして、そうあれかし。全てそのようになった。

藤王アキラは、引き連れた三体のロボットたちと共に、魔女水城

率いる軍事部の襲撃を受けたり、あるいは魔女水城を信奉する体育会系バカ、岡崎シュウらの襲撃を受けたりしては、それをあっさりと返り討ちにしていた。

しかし、クロも傍観者ではなかった。クロもその騒ぎに加わり、楽しんでいたからである。水城が藤王アキラへの致命的な一撃を叩きこめるかと思ったそのときに、クロはその射線上に飛び込んでいったりした。水城は無意味に動物を殺す趣味は無かったから、そのぶんだけ藤王は助けられたことになる。

まあ、それが藤王の計算のうちでなかったとすれば、だが。

さて、その日、クロは薙高の中に「入ってはいけない」ような気がしていた。いつもどおりに藤王を追いかける気が失せていた。いうまでもなく、邪の猫払いの儀式の影響である。その日、モノボード狩りが行われ、猫殺しのエイラが捕獲されたのだ。

だが、クロはそれが気に入らなかった。いつものように薙高に侵入して、女子高生に餌を貰いたかった。太陽が良く当たる場所で日向ぼっこしたり、逆に日陰になっている場所でくつろいだりしたかった。

だから、一週間後、ふとそのことを思い出したクロが、薙高に向かって歩き始めたのも、無理なからぬことといえる。猫払いの結界の破れを潜り抜け、薙高に一匹の猫が現れたのである。それは偶然か必然か、猫殺しのエイラの脱走と、時を同じくしていて――。

第四十六話　猫とタイムリピーター

しかし黒猫のクロを最初に見つけたのは、幸運なことに、猫殺しのエイラではなかった。それは、昼休み中のピクチャレスであった。彼は何かを見つけることにかけては天才的なのである。

「猫……？　あのサイズ……化け猫のモーツァルトではない……俺の記憶が正しければ、今の薙高には邪(よこしま)の張った猫払いの結界があるはずだが……？」

すぐにピクチャレスはケータイを取り出し、邪ツカサへと連絡する。いまやピクチャレスは平安部実働部隊、雅(みやび)に所属していたから、緊急の連絡先を知っていたのである。しかし、圏外。繋がらない。

「肝心な時に限って圏外か。クソッ」

ピクチャレスはザ・トリガー、黒木シュンに連絡を入れる。

「黒木。俺だ。至急、軍事部のチーム『ピクチャレス』の召集を願う。黒猫が一匹現れた……そうだ。モーツァルトではない奴だ。何かがおかしい。ああ……タイムリピーター絡みかもしれん……念のため確保しておいたほうがいい」

クロはそんなふうに自分がＶＩＰ待遇されていることなど知らずに、足早に通りを歩いていく。人ごみをすり抜け、裏道に入り、屋根に昇り……クロには特に目的地は無い。

そしてクロは、校舎脇に停めてある車の下が涼しそうだと思い至るや、猫のように――実際猫なのだが――するりと潜ると、ひんやりした地面に顔をうずめた。

ピクチャレスに連絡が入る。

「対象の位置を特定しました。これより捕獲を開始します」「ああ、頼む」

ピクチャレスは、先週出来たばかりの自分のチームの組織度の高さに、むしろ驚いていた。チームの全員が携帯する小型のレシーバーは、司令塔となるケータイからの迅速な指揮、命令を可能にしていた。

「状況開始」

その言葉と共に、車の後方からチームの人員が躍り出る。驚いた猫は、人の居ないほう、つまり車の前方の広いスペースに逃げるだろうという想定であった。そこを投げ網で捕まえる、という作戦である。

しかし、クロは普通の猫ではなかった。

クロは跳躍すると、校舎に沿って設置されていた排水パイプをカカッと駆け昇り、二階のベランダへと到達すると、窓の中へと入っていった。むろん、いきなり猫が飛び込んできた二階の教室では大騒ぎである。

「やられました。想定外の動きでした」作戦失敗の報告が入る。

「愚痴はいい。いまからでも、なんとか確保できないか」

「とりあえず二階に人員を移動させます」ピクチャレスの言葉に、チームが答える。

そのとき。斬、と。何かを力任せにぶった切るような音が、響いた。

ピクチャレスが音のしたほうを見やると、さっきまで猫が潜んでい

た車が、真っ二つに切断されていた。その傍には、大男と女が居る。女のほうには、見覚えがあった。金髪のタイムリピーター。猫殺しのエイラ。

「あの猫は渡さん」車を斬ったであろう男、ティガが低い声で宣言する。

ピクチャレスは即座にグロック19を抜き放つも、エイラの放ったM9の銃弾がその銃を弾き飛ばす。ピクチャレスは武装を解除された。

「あの猫は私が『使う』。手出しするなら、死ね」

エイラの銃口はピクチャレスに定められた。

そんな絶体絶命のタイミングで、ザ・トリガーは到着するべくしてその場に到着した。なぜなのか。彼がザ・トリガーだから、としか言いようがない。能力を使うなら、今、この瞬間しかない。

対象を選ばぬ無差別サイコキネシス――空間が、歪み、荒れ狂った。

第四十七話　タイムリピーターとザ・トリガー

僕が気付いたときは、ベッドの上だった。鳴り響く目覚まし時計を止めて、夢を振り返る。やけにはっきりした夢だった。僕が無差別にサイコキネシスを使った直後、大男がそれを剣のようなもの――スピリット・オブ・ソードマン――で薙ぎ払い、打ち消した。金髪の女は、再び二階のベランダに戻ってきた黒猫を撃った。おそらく即死だった。そして――起床。夢にしては、あまりにリアルすぎる。

これはただの夢ではない。そんな予感がしていた。僕はケータイを掴むと、ピクチャレスに連絡を取った。

「こんな時間にどうした？　何かあったのか？」

それで一つ判明した。ピクチャレスに、「今日の」記憶は無い。タイムリピートしたのは自分だけだ。僕は朝食をついばみながら、かいつまんで状況を説明する。今日、邪（よこしま）の猫払いの結界が切れること。黒猫が薙高に現れること。僕たちが確保する前に殺されてしまうこと。そしておそらくは、タイムリピートが既に起きてしまったこと。

そうして、僕は朝食もそこそこに、寮を後にした。

「……駄目だ。邪（よこしま）には連絡が取れない。圏外だ」通学中に、ピクチャレスから電話がかかってくる。

「じゃあ藤王アキラしかいないね。僕が今すぐ連絡する。藤王アキラだって、『リアルタイム』のタイムリピートには興味があるはずだ」

「……どうしても、その猫を救わないといけない理由があるのか？」

ピクチャレスが問う。

僕は絶句する。確かに、ピクチャレスの指摘はもっともだった。たかが猫一匹。そう言ってしまえばそれまでだ。

「そうだな……じゃあこういう理由はどうだろう。僕はさっき、猫が死んだのを見た。それで僕は今、寝覚めが悪くてとても怒っているんだ。運命だか何だか知らないが、誰かの描いたストーリー通りには、事を進めたくない」

一呼吸入れて、僕は宣言する。

「僕は猫を守る。タイムリピートは阻止する。以上だ」

「……把握した。たとえどんな理由でも、戦う理由があるならそれでいい」ピクチャレスは僕の行動を承認する。

僕は薙高行きのバスに乗り、ＴＰＯを無視して藤王アキラに連絡を入れる。「現在、電話に出ることができません。ピーという発信音の後に……」留守電になっている。僕は怒鳴った。

「今日、タイムリピーターが黒猫を殺してタイムリピートする。その運命を阻止したい。絶対に、僕は猫を殺させやしない！」

「そうか」電話口から、予想外の声が漏れ聞こえた。

「ザ・トリガーよ。今日が『その日』か。意外と早かったな」

それは藤王アキラの声だった。留守電はフェイクだったのだ。僕は少しおかしくなって笑うと、真面目な顔をして告げた。

「藤王アキラ。貴方はこのことを予想していたんですね？」
「ああ、たぶん狙われるのは、俺が知っている黒猫のクロだろうと思っていた」
「知り合いなんですか？」
「ああ、知り合いだ。だから幸いなことに、俺がその黒猫を助けるのに手を貸す理由は、十分にあるってことだな」

僕はそれから、計画について詳しく話し合った。昼休みに起こるピクチャレスと黒猫の遭遇のこと。チーム「ピクチャレス」の動員のこと。現れる二人のタイムリピーターのこと。そして――おそらく相手は僕同様にタイムリピートしていて、今のこの打ち合わせのことも、襲い来る藤王アキラの妨害すらも、全て予見しているであろうこと。

剣と、銃。スピリット・オブ・ソードマンと、スピリット・オブ・ガンマン。二人の強力なタイムリピーターを敵に回した戦争は、そうして静かに幕を開けたのだった。

第四十八話　下準備

藤王アキラが後に語ったところによれば、それは時間遡行戦争という類のものであった。

まず第一に、タイムリピートが起きたと知る者、信じる者自体が少ない。見返り無しに一匹の黒猫の命を助けようとする偽善者は、薙高にはそう多くない。

第二に、薙高陣営がいくら万全を期したつもりでも、相手はそれを予見し、潜り抜けてきた過去を持つ、と考えられた。ただでさえ強力な二人のP2、エイラとティガ。互いに補完しあう、スピリット・オブ・ガンマンとスピリット・オブ・ソードマン。

最後に、そもそもただの人間に運命を変えられるのか？　という疑問があった。時間とは閉じた輪のようなもので、因果関係を断ち切るのは容易なことではないのではないか？　僕にとっては未来であっても、それは――黒猫の死は――もう起こってしまったことだ。過去改変は可能なのだろうか？

僕の脳裏に、様々な問題が提起され、その都度、わきに追いやられた。今は考えるより行動を起こすことが先決だった。

少し早く登校したおかげで、僕ことザ・トリガーには若干の時間的余裕があった。まだ人がまばらなクラスの中で、僕は携帯端末から、電子版薙高新聞を読み始める。

三面記事まで読み進んだところで、僕は机に突っ伏した。

「時間遡行者（タイムリピーター）あらわる」そこには公然とタイムリピートの特集記事が組まれていた。情報がリークされている。こんなことをするのは――おそらく藤王はしないだろうから――消去法で邪しかいまい。どうやって平安部がタイムリピートの発生を知ったのかは知らないが、いい迷惑だった。

「平安部……前回はスルーしたのに、今回は首を突っ込む気満々じゃないか……」僕はうへえという気分になる。

「どうしたの？　黒木君」遅れて登校してきた藤沢カオリが、そんな僕を上から覗き込む。僕は格好を正すと、カオリを安心させるために「別に何も」と答えておく。

今回の件は、物量だけで解決する問題ではないと、直観が告げていた。多くの人に知られれば知られるほど、作戦の成功率は下がるのではないか？　バタフライ・エフェクトはこちらに不利に働くのではないか？　そんな疑念が広がる。

ともかく、今の内に手を打てるところには打っておくべきだ。僕はワープロソフトを取り出して、チーム「ムツキ」に配るための冊子を作ることにした。タイムリピーターに対する防衛術。僕が覚えていないだけで、実際には、何億回も同じ書類を作っているのかもしれないが。それでも。チーム「ムツキ」は計画の重要な一端を担うことになる。

黒猫のクロは、夢を見ていた。自分が銃弾に撃ち抜かれるという夢だ。血がたくさん出て、意識が遠くなる。そしてそのまま死んでしまう。嫌な夢だった。

しかしそれはそれとして、今日は薙高に向かわねばならないとも感じていた。もし運命というものがあるとすれば、それには慣性が働いているに違いなかった。

女子高生がくれる餌、様々な場所にある日向と木陰、そしてなにより、藤王アキラの後をつけるという楽しみ。

クロがそんなことを考えながら歩いていると、一匹の優雅な黒猫、モーツァルトが、行く手を遮った。

『あなた、今日、死ぬわよ』モーツァルトは猫語で語りかける。
『そんなこと知らない。ボクは薙高に行くんだ』クロは反論する。
『じゃあ、私の後についてきなさい。それがあなたのためよ』モーツァルトは歌うように提案する。それに対するクロの答えは――

一方その頃、ヒューマノイド・ロボット、丸、三角、四角は、三人とも狙撃の準備をしていた。メインフレームからの補正を受けた、長長距離からの狙撃による、ターゲットの無力化。藤王が立てた作戦はそれであった。しかし、この作戦には問題もある。敵は、スピリット・オブ・ガンマンというP2持ちである。狙撃に対する耐性も、持っていると考えるのが自然であった。

「この作戦は失敗を前提に行われる」藤王は自分たちの限界を的確に理解していた。
「結局のところ、これはザ・トリガーの問題だ。彼が運命を変えたいと望んだから、今日という日が繰り返された。俺はそれを手伝っているに過ぎない。そして『次の』タイムリピートもあるかもしれない。もしかしたら次の次も。永久に繰り返される今日の、これがその第一日目だと誰が言える？　だがそれでも――」

「もう、時間遡行（タイムリピート）戦争は始まっている」藤王アキラは、不敵に笑う。

第四十九話　下準備の続き

僕が思うに、引き金を引いたら事件が解決するかというと、決してそんなことはなくて。なんというか、むしろ引き金（ザ・トリガー）というのは事件を一方的に引き起こす側の能力なのではないだろうか。そして引き起こされた事件は止まらない出血のように、収束することなく広がっていき、世界に影響を与え続けるのだろう。

ザ・トリガー。その能力と対になるべき、事態収束者（ザ・エンダー）。悲しいことに、僕はその能力者に、まだ出会えていない。

チーム「ムツキ」の反応は予想通りだった。事前に薙高新聞で事情を知っていたムツキは、むしろシナリオがどうなっているのかを知りたがった。昼休みに現れる二人の能力者について、僕は知っていることを全て話した。金髪の女と筋肉質の大男。名前はエイラとティガ。Ｐ2、スピリット・オブ・ガンマンとスピリット・オブ・ソードマン。

「で、勝ち目はあるの？」ムツキは問う。

「黒猫を守り切って、タイムリピーターを捕獲、いや撃退できればこちらの勝ち。そうでなければ負け、だね」僕は応える。

「黒猫は本当にこの教室に逃げ込んでくるのね？　私たちはそれを保護すればいい、と」

「たぶんね」

ムツキたちは何か考えているようだった。たぶん黒猫を守る手段を検討しているのだろう。

「残念だけど、チーム『ムツキ』には、黒猫を狙う弾丸を確実に弾く能力は無いわ。ヤヨイのＰ2『カップラーメン』は近距離戦闘に

強いけれど、確実とはいえない。チーム『クローゼット』にも協力を要請したほうがいいと思うわ」

「兵藤カツヒコの『フラクタル・シールド』か」

「そういうこと。借りを作るのは癪だけど、あの能力は『使える』もの」

チーム「クローゼット」のリーダー、兵藤カツヒコ。彼は、小物臭漂う男ではあるが、『護る』という行為に特化したP2を持っている。周囲に一方通行の壁を創り出す能力「フラクタル・シールド」は、銃弾や剣戟を弾く簡易防壁になる。それが味方の火力と組み合わされば、無敵の塹壕（ダッグアウト）が完成する。

「たぶん藤王アキラは、猫が教室に飛び込んだタイミングで攻撃を仕掛ける寸法だ。平安部は……一体何を企んでいるのやら……」

「あそこは独立して介入してくるでしょうね。こっちの計画なんか関係なしに」

ムツキは呆れ顔で言い放つ。カエデとヤヨイも、うんうんと頷いた。

「一応、ピクチャレスには事情を知らせたが、これ以降は連絡を取らないでおこうと思う。バタフライ・エフェクトが怖い」

「それがいいわね」

そして、僕たちはチーム「クローゼット」とのメールをやりとりし、短いミーティングを終えた。午前の授業が始まる。こうしている間にも、黒猫のクロは学校を目指して自由奔放に歩いてきているに違いなかった。己の死の運命などおかまいなしに。

クロは、同じ黒猫のモーツァルトに言われたことを考えていた。いや、同じというわけではない。モーツァルトは化け猫で、クロはただの猫だ。モーツァルトは一発の弾丸で死んだりはしないが、クロは死ぬ。簡単に即死する。そこが違いだった。

「もし教室の中に入ったら、決して外に戻ってきてはいけないの」と、モーツァルトは言った。

教室の中は安全なのだ。クロはそこで死ぬ運命を持っていない。クロは「飛び出したから死んだ」のだ。と、モーツァルトは言った。

「藤王アキラの計画は失敗するわ。相手は既に対処法を考えているから。だけど、もう一枚の切り札があるの。相手はそれを知らない」

モーツァルトは、確信を持って呟いた。邪の行動は、時空を超えているのよ、と。

第五十話　ザ・トリガーの昼休み

そして、とうとう昼休みになった。教室にムツキたちと、藤沢カオリを待機させ、僕は校庭に出た。ケータイが鳴り、ピクチャレスから連絡が入る。

「黒木。俺だ。チーム『ピクチャレス』の召集を願う。お前の言った通り、黒猫が現れた……そうだ。モーツァルトではない奴だ。邪とも連絡が取れた。傷つけずに捕獲しろと言ってきている」

僕はあのときと同じ配置につき、ピクチャレスを視界に入れた。あとはチーム「ピクチャレス」の捕獲作戦を見守るだけだ。だが、何かがおかしい。前回は、邪とは連絡が取れなかったはずだ。今回に限って、連絡がついている。おかしい。だが、違和感を行動に移すことができない。

僕のサイコキネシスは、空間を対象にして、無差別に発動できる。できるが、それはスピリット・オブ・ソードマンの一撃で斬り捨てられてしまうのは、前回確認済みだった。僕の存在は、二人のタイムリピーターにとって、決して計算外ではない。予想通りの妨害が来ると備えているだろう。

僕は、その役を演じるべきなのだろう。だが。僕の直観は、僕の銃ベレッタＭ９２は、ピクチャレスを援護しろと囁いていた。

黒猫が、車の下に入り込むのが見えた。

「対象の位置を特定しました。これより捕獲を開始します」「ああ、頼む」

「状況開始」

その言葉と共に、車の後方からチーム「ピクチャレス」の人員が躍り出る。そこで。僕は辺りを見渡し、タイムリピーターの出現を知った。

黒猫は跳躍する。校舎に沿って設置されていた排水パイプをカカッと駆け昇り、二階のベランダへと到達すると、窓の中へと入ってく。

僕は物陰から立ち上がり、タイムリピーターに向け、銃を撃った。

斬、と。僕の銃弾をタイムリピーターの一人、大男のほうが斬り捨てた。

「やはりおまえも、タイムリピートしていたか」

それで僕は、あのとき、ティガが無駄に車を斬ったわけではなかったのだと理解した。このタイミングこそが「僕の銃弾を斬る」タイミングだったのだ。奴はタイミングを計っていたのだった。

「そういうことだ。お前らの計画通りにはいかせない」

僕はグロック１９を構えたピクチャレスに並び、同じく銃を構えた。猫殺しのエイラを狙い、撃つ。

「はっ！　遅い。遅い。遅い」

エイラのスピリット・オブ・ガンマンが、僕らの撃った弾丸を、次々に撃ち落としていく。もはや早撃ちとかそういうレベルではない。その反応速度は、護衛艦に搭載されるコンピュータ制御の近接防空兵器システム（ＣＩＷＳ）、ファランクスに近い。

見えない壁に阻まれたかのように、僕らの銃撃は弾かれていた。無力感を味わっていた、その時。ガアンと、空気が、吠えた。

「今のは……今のは速かったぞ……」エイラがふらつく。

長い髪を揺らして、銃口を遠方に向ける。ガアン、ガアン。立て続けに音が響く。エイラが狙撃銃の弾丸を迎撃しているのだ。

Ｕ．Ｓ　Ａｒｍｙ　Ｍ２４　Ｓｎｉｐｅｒ　Ｗｅａｐｏｎ　Ｓｙｓｔｅｍ――レミントン社が開発した、一般部隊から特殊部隊まで幅広く採用されているスナイパーライフルである。軍事部では、薙高のスナイパーライフルはこの型式が多いと、そう教わっていた。

「クソッ！　しかたがねえ……モード『イージス』！！」エイラは叫ぶ。

その瞬間、初速　８００ｍ／ｓ　にもなる超高速のライフル弾を、エイラは無動作で全て撃ち落とし始めた。完全に自動的な、迎撃体制。

「こいつは疲れるからやりたくなかったんだが……モード『神の盾（イージス）』だ。もう何人たりとも私の弾幕は潜り抜けられない」エイラは笑う。

藤王アキラの準備した狙撃銃は、恐るべきことに、もはや用を成していない。

「それで、この今もまだ続いている狙撃はもう済んだ話として、だ。あんたらは私たちを……『倒す』つもりなのか？　そんな貧相な火力で？　タイムリピーター二人を？」

「そうだ」と僕は進み出た。「誓って黒猫は殺させない」

エイラは二階を眺めるやる。もちろん黒猫は落ちてこない。エイラはまっすぐこちらを見返し、ため息を吐いた。

「へえ……あんたら……そんなに死にたいんだ」

鴉殺しのティガが、スピリット・オブ・ソードマンが、剣を構えた。

第五十一話　邪ツカサ

僕はサイコキネシス増幅用のビンを開け、中から砂鉄をこぼす。
砂鉄は人の形（ヒューマンフォーム）を描き出す。
大男――鴉殺しのティガは、その姿を一瞥し、呟く。

「サイコキネシス……単純だが恐るべき力だ……だが、砂で剣は防げねぇ」
「勝ち目のない戦いだってことくらい、先刻承知のことだ」僕は強がる。

なぜだろう。むしろ僕はこの流れを知っているかのように感じるのだ。まるで誰かの都合で計画されたのじゃないかと思えるほどに。
すると唐突に。声が、響いた。

「麿もその戦いに参加させてたもれ」

邪だ。烏帽子をかぶり、和服を着た、平安部の邪ツカサがいる。
僕とティガの間に立って、忽然と。
いや、超スピードだとか催眠術だとかでは断じてない。もっと恐ろしいものの片鱗、というべきか。あるいは、と、思考を巡らせて僕は戦慄する。あるいは、こいつはさっきからずっといたのか。気配を消して。

「麿も、タイムリピートという現象に興味があるのでおじゃる。それに、スクナヒコも言っておったでおじゃるよ。『ザ・トリガー頑張れー』と」

邪は扇子を口元に当てている。表情は分からない。それでも狐の

面のように細い目元がさらに細くなり、たぶん、いやきっと、邪はにやりと笑ったように見えた。

「スクナヒコ？　『ザ・トリガー頑張れー』？　冗談を言っている場合じゃ……」僕が声を掛けると、邪は扇子をパタリと閉じて。

「安心するでおじゃる。麿は、強いでおじゃるよ」そう、言い切った。

言った途端、ティガが真横に吹き飛んだ。吹き飛んで、校舎の壁に激突する。まるで見えない車か何かに激突されたかのように。

「てめぇ……何しやがった……」むくりと起き上がりながら、ティガが言う。

「まずは、小手調べでおじゃる」

邪は動かない。僕とも、ティガとも、視線を合わせようともしない。ただ、あらぬ方を見て、突っ立っているだけである。いや、その視線の先は、今も続く狙撃の元だ。邪は、藤王アキラを、見ている。それはつまり、藤王アキラも、邪を見ているということだ。

薙高四天王。そんな言葉が僕の頭をよぎる。

ティガはさらに吹き飛ばされる。吹き飛んでいる最中に、さらに逆から何かに激突されたかのように跳ね上げられる。スピリット・オブ・ソードマンで身を護り、受け身を取っているから死なないだけで、普通の人間なら何度も死んでいるだろう。

「ティガ！」エイラが心配して叫ぶ。

だが、不定期な狙撃は今も続いている。音速を超えて飛来するライフル弾を撃ち落とし続けるには、モード「イージス」の解除は許

されないのだろう。
　邪とティガの二人の戦い。いや、邪の一方的蹂躙を、僕とピクチャレスは、ただ見ていることしかできない。

「そっちへいったでおじゃる」

　その言葉と共に、ティガが飛んでくる。スピリット・オブ・ソードマンの一撃は、僕の喉首を狙ってくる。が、ピクチャレスが撃った弾丸が剣戟の軌道をそらし、僕のサイコキネシスが、人の形（ヒューマンフォーム）が、大男のティガを一瞬で殴り飛ばす。
　邪の横に、ティガが落ちた。立ち上がろうとするティガの頭を、和服姿の邪は、蹴鞠（けまり）を蹴るような調子で、思いっきり蹴る。

「ふむ。まあまあ強くなったでおじゃるな。ザ・トリガー」邪は僕を値踏みする。あのティガを軽くあしらいながら。

「……てめえもＰ２持ちか？」距離を取りながら、ティガが吐き捨てる。
「否。麿は一般人でおじゃる」だが、邪はあくまで一般人だという。
　僕は薙高地下にあるＰ２訓練施設のことを思い出す。あのとき、邪は確かに吊り下げられた鉄板を打ち鳴らしたのではなかったか。しかしそのとき――少し困ったような表情をしてはいなかったか。
「邪はＰ２持ちじゃない」僕の隣で、ピクチャレスは小さく呟く。
「あれは不可視の『式神』たちなんだ」と。

第五十二話　狐面

キンコンカンコンと、昼休みの終わりを告げる鐘が鳴る。だが、始まった戦闘は終わる気配を見せない。

校舎を背に、剣を構え、四方に気を巡らし。

「立方体型のＰ２……四個か……」ティガが低く問うた。

「そう、四体でおじゃる」邪がそれに答える。

存在感すら抱かせぬ不可視の式神たちは、邪の周囲を守って浮遊していた。ザ・トリガーの直観がそう感じるだけである。実際はどこにどう配置されているものか、見当もつかない。

「斬るぞ」ティガが呟く。

「やれるものなら」邪の余裕は終わらない。

上方からの、エレベータが落ちてきたかのような衝撃。ティガは、剣でそれを防ぐが、力の差は圧倒的で。潰されるかと思われた刹那、ティガはスピリット・オブ・ソードマンで地面を蹴り抉って横に跳躍し、さらに追撃する式神を剣であしらう。

四対一。いまのところ体当たりしかしてこない相手とはいえ、ティガは明らかに劣勢に立たされていた。

遠方で戦闘を見守る藤王アキラは、始まったデータ収集に興奮を隠せなかった。邪が薙高四天王の一人である理由。その一端が、いま開陳されている。

「四聖獣……青龍、白虎、朱雀、玄武。全員揃い踏みか」藤王は笑っている。楽しくて楽しくてしょうがないとでもいうように。

ザ・トリガーは、ピクチャレスから簡単に説明を受ける。否。受けさせられている。最低限知っておくべきこと。それは平安部の暗部、雅（みやび）が手掛ける、Ｐ２の人工生成技術。漢字で「式神」といえば話は早いが、本質を見失う恐れもあった。式紙とも色紙ともまた違う。それを口で説明するのは難しい。

「目には見えないが――Ｐ２をベースとした、ある種の生命体なんだ」ピクチャレスはじれったそうにザ・トリガーに説明する。だが、ザ・トリガーは上の空だった。ザ・トリガーには、別の疑念があったからだ。

「邪は、このまま押し切れるだろうか？」

「なんだって？」ピクチャレスが聞き返す。

「だから、邪はどうやって勝つつもりだろうと聞いているんだ。だってほら、相手にはほとんどダメージが入っていないじゃないか」

それは――事実その通りだった。ティガは四体の式神の猛攻に押し潰されることもなく、地面を削って跳躍と方向転換を繰り返し、邪の喉元を狙い続けていた。いつかは、式神の動きを読まれ、その隙をついての一撃が邪を襲ってもおかしくない。

だがそれでも――邪は勝利を確信しているようだった。

「お主は、麿には勝てぬでおじゃる」

「……そうかな？」ティガは間を詰める。

「そうでおじゃる」邪は手に持った扇子を開く。

「朱雀よ。広がりたまへ」

カー。そう、聴き慣れた鴉の声がした。ギャアギャアとした喧騒が突然広がり、ティガを包み込む。いかに鈍い頭でも、その声を自分の耳で聴いたなら気付いたことだろう。それは無数の鴉による壁

だった。「鴉殺し」のティガには、決して切れぬ、壁。斬ればタイムリピートが発動する。それゆえに。

朱雀と呼ばれる不可視の鴉の群れは、絶対防壁となってティガの進路を阻んだ。

そこで、ようやく邪はくるりと振り向いて、ティガのほうを見やった。

「ほほ。いかな四聖獣などといっても、そんな大層なことではないでおじゃる。青龍は蛇、白虎は猫、朱雀は鴉、玄武は亀。たとい伝説が何と言おうと、空想の生物が真になることなどありえぬこと。このとおり、麿はただの一般人。ただの普通の式神使いでおじゃる」

鴉。それが問題だった。

斬ればタイムリピート。引けば一方的蹂躙。あまりといえばあまりの不利な状況に、ティガは絶句する。これは……勝てない。

「俺も初めて見る……」雅（みやび）に所属するピクチャレスであっても、言葉が出ない。

「無数のP2使い……あんなの反則だろう……あれでどの口が一般人だっていうんだ……」ザ・トリガーは頭痛を抱え込む。

「では、四対一がようやく三対一になったところで、お主にはあっさり負けてもらうでおじゃる」

邪の懐から、狐の面が現れる。それを被った邪は、もはや、人ではないように見えた。それはもはや狐である。妖狐である。全ての者が、邪が遂に本気になったことを悟る。

不可視の立方体の連撃がティガを襲う。これまでにない速度での、延々と続く衝撃。時に大地に、時に校舎にめり込むほどの、連鎖攻

撃。
　ティガはついにくずおれて、膝をつく。
「ティガ！！」悲痛な声が響く。いつ飛んでくるとも知れぬ音速の狙撃。それを迎撃するために、エイラは自身を守ることしかできない。
「やめろエイラ！！　モード『イージス』を解くな！！　こいつは俺が……！！」
　だがエイラはティガの言葉を聞かずに、邪に二挺の銃口を向けて――
「それでよいのでおじゃるな？」狐と化した邪の、呟くような問いには答えずに。
　ただ、引き金を引いた。

第五十三話　時間遡行戦争

それはいささか奇妙で、滑稽な状況であった。二発の銃弾が、邪の頭のすぐ横で止まっていた。すると空中に血だまりが現れ、みるみるうちに拡大していく。不可視の式神。邪までの弾丸の軌道に、合駒（あいごま）があったことは自明である。

「な……」エイラは驚きを隠せない。M92のストッピング・パワーは、完全に障害物に打ち消されている。そして。

「ちゃんと聞いていなかったのでおじゃるか？」狐面の邪はエイラのほうに向き直り、侮蔑に等しい台詞を紡ぐ。

「白虎は、猫でおじゃる」邪はくり返す。

「あ……あ……」エイラの身体ががくがくと震える。

「お主はいま、猫を殺したのでおじゃる」邪は賢者が愚者に教えを垂れるように、解説する。

「エイラ！！」

慌ててティガが駆け寄ろうとするも、青龍と玄武に挟撃され、近づくことができない。

「タイムリピートの原理は知らぬが――『猫を殺せば』発動するのでおじゃろう？　さあ、その現象、麿に見せてたもれ」

次第にエイラの身体が輝き透けてゆく。ピアスも、服も、靴も、二挺の拳銃も。

全ての物質が情報にまで分解されてゆく。

「――！！」

声にならない絶叫を残し、エイラは消えた。

残されたのはティガだけであった。

「さて」邪はティガに問う。

「このまま戦闘を続けるでおじゃるか？　それとも――あの女の後を追うでおじゃるか？」

ティガは無言である。

無言で、スピリット・オブ・ソードマンは、邪に一矢報いようと剣を振るう。

だが斬撃は朱雀を――無数の鴉を斬り捨てるに留まり、邪には決して到達しない。

タイムリピートが発動し、ティガの身体は、エイラと同じく輝き透けてゆく。

「惚れた弱み、でおじゃるな」邪が茶化す。

「そんなんじゃねえよ……」ティガは最後にそう呟くと、消えた。

邪は狐の面を外しながら、感慨深そうに、タイムリピートした二人のいた場所を眺めやる。そして最初に見ていた方、藤王アキラのほうに向きなおると「これでおしまいでおじゃる」と口を動かす。

いかな藤王アキラといえど、さすがに戦闘終了後に邪を狙撃するつもりはないらしい。あるいは、射線上には既に防御力に秀でた玄武が配置されているのか。

かくして、邪の活躍により、時間遡行戦争（タイムリピート）は終結した。

結局、僕ことザ・トリガーは何もできなかった。

全部、邪が勝手に戦闘し、それを僕は見ていただけだ。肩を落とす僕とピクチャレスに、邪は声を掛ける。

「お主らはよくやったでおじゃる。お主らは敵の注意を引き付け、麿が登場するタイミングを作った。それだけで十分でおじゃる」

ならば、僕らは足手まといではなかったということか。僕は人の形（ヒューマンフォーム）を解除して、砂鉄をビンに詰め直す。

「ところで、ザ・トリガー。今が何時何分か、分かっているでおじゃるか？」

「へ？」僕は問い返す。

「無断での授業の欠席、おそらく先生方はひどくお怒りになられていると推察されるでおじゃるが？」

僕は上方を、猫が逃げ去った教室のほうを見やる。黒猫のモーツァルトと一緒に、クロがベランダに寝そべっていた。その横に、白衣を着たイレイサー先生が、額に青筋を浮かべて立っている。星野ハルカと小早川ムツキが、イレイサーがベランダから飛び降り、正義の鉄拳を振るうのを制止しようとしているのも見える。

授業のボイコット。これがイレイサー先生の逆鱗に触れたことは間違いない。

僕はクリスチャンではなかったが、胸の中で十字を切った。どうか――殺されませんように。

第二章　完

第五十四話　完成

手を伸ばしても届かない全てのもの――モノボード。
それは何であり何で無いのか？　一体どこにモノボードがあり、一体どこにこの世界はあるのか？　モノボードは増える。増えて弾ける。それは一体何故なのか？　彼らは何を求めているのか？　地に生えたタンポポがやがて綿毛を飛ばすようにモノボードもまた必然でしかないのだろうか？　ザ・トリガーはモノボードを遮断する天敵になりうるのか？　その全ては――まだ調査中である。
スウマキツミ・レポート「モノボードとは　Ｎｏ．ＸＸＸＸＸ」

真夜中の満月。屋上に積み上げられたドラム缶の上に、そいつは立っていた。コンクリートにガムテープやらなにやらで固定された数基の懐中電灯はそいつの姿を照らし出す。嗚呼、舞台の仕上げは上々なり。今、我ら点呼も高らかに、進めや進めモノボード。
眼前に立つのはチーム・ムツキ。攻撃担当（アタッカー）のザ・トリガー。その目は、モノボードを見上げながらも、完全に見下している。高いところに昇りたがる馬鹿を見る、軽蔑の瞳。モノボードの遮断者、ザ・トリガー。

やあザ・トリガー。哀れなタイムリピーターの操り人形（マリオネット）よ。さあモノボードを祝福せよ。完成の時は来た。史上最大最強無敵のゴギン。ゴギン？　なんだそれは聞いていないぞ首の骨を折るなんて鬼畜外道め。ヒーローは前口上の間は攻撃しないと昔から決まってバキボキ。待てよまだ演説は終わってないんだ殺すのは後でもできるだろうガギゴギ。やめて死んじゃうマジ死んじゃうモノボードだって生きてるんだよ友達なんだよなあそうだろう人類皆フレンド？　アーユーハッピー？　やめてやめて攻撃なんてしないでせっかく完成したのに死滅しちゃうよ。え？　完成したのはお前が初めてじゃ

ない？　そりゃごもっとも。でもしょうがないだろう最初からそう命じられているんだから。モノボード感染者は永遠に元に戻らない。殺すしかない処分するしかない悲しいよなあ苦しいよなあだって人殺しだもんなあ。つまるところお前らは永遠にモノボードに勝てないんだよ。なぜならモノボードに勝敗なんてものは無いから。ただ増殖して増殖して増殖して増殖して完成するだけの簡単なお仕事だもんなあ。おい聞いているのかザ・トリガー。これから俺の。俺の。俺の。俺の。俺の。俺の。俺の。

ぐらり。大地が揺れる。ドラム缶からモノボードが転がり落ちる。その姿は滑稽で、別の誰かの笑い声が聞こえる。

え？　何？　まさかこれ夢なの？　予知夢なの？　え？　あれ？　完成は？　モノボードは？　あれ？　え？　どういうこと？　俺はどうなるの？　それってあり？　反則じゃないの？　え？　あ？

モノボードはありえたかもしれない世界と共に硬直する。星野ハルカの「未来予知」は、エミュレートされた世界の再生を次々と停止させてゆく。静止するモノボード。そう呼ばれていた何か。かつて薙高の学生だったもの。完成したと自称するそれ。

「結局こうなるんです」

星野ハルカはイレイサーに報告する。モノボードの爆発的増殖（パンデミック）。それは始まることはあっても終わることはない。薄く、明らかに薄く広がり、増殖に増殖を続け、ついにアスファルトを砕いてモノボードの芽が出る時、そこに居るのは決まってザ・トリガーだった。

「学生同士が殺し合うってのは、あんまりいいことじゃねーよなぁ？　藤王よ」イレイサーが問う。

「そうですねイレイサー。あなたが学生たちの記憶を消しまくったことの次くらいに残酷なことじゃないですかね？」藤王の人型ロボット、丸が皮肉で答える。

イレイサーは面倒臭そうに立ち上がる。彼にもまあ、なんというか、教師としての立場がある。学園内での「殺し」は、特に表立ってのそれは、色々と面倒なのである。

別に裏で「殺し合う事」自体はいい。それは薙高の日常でしかないのだから。だが、さすがにモノボードが次々と自然発生し「連続で殺し合う」のは、後始末が要る。そしてそれは大抵、イレイサーに一任されることになるのだ。

イレイサーにとっては、ただ、面倒なのである。ひたすらに面倒なのである。だからイレイサーは、「生徒たちのモノボード化」を避けることに決めた。

「モノボードを遮断すること」藤王は代理ロボット、丸の口を借りて話す。

「それがザ・トリガーの使命であるなら、どこかに遮断する方法があるはずだ。タイムリピーターでさえまだ見つけていない手段が、どこかしらにあるはずだ。モノボードを一か所にまとめて処分する手段が。害虫を駆除するようにして完全に消滅させる手段が」

「じゃあ星野ハルカの未来予知を参考にしつつ、洗ってみるか？」洗う。つまり生徒を洗脳し、記憶を洗浄することをイレイサーは提案する。

「ただ洗うだけでモノボード化を防げるとは思えないね」藤王が否定する。そして別の提案をする。

「こうもご立派に完成するのが目的なら、さっさと完成させてやれ

ばいいんじゃないか。その上で、完全に叩き潰すってのはどうかな？　生徒全員の深層心理に焼き付く程度に、ありったけの失敗を経験させてやるというのはどうだろう？」藤王の提案は、イレイサーの真逆だった。

　モノボードに無意味さや不毛さを学習させる。薄く広く広がったウイルスに対する予防接種（ワクチン）。それは確かに有効な作戦かも知れなかった。未来における無駄で無益な殺し合いを止めるために、時にはド外道にならねばならない。今がまさにその時であるとばかりに、藤王は史上最悪の作戦をイレイサーに伝える。

「時々お前の頭を真っ先に洗うべきだと思うよ」イレイサーがため息を吐く。

「世の中には洗っても落ちない汚れもあるんですよ」人型ロボット、丸の人工知能が混ぜ返す。

　時は真っ昼間。場所は屋上。太陽が燦々と降り注ぐ中、ドラム缶も懐中電灯も無く。イレイサーと星野ハルカと丸の三人が去った後、そこには誰も残らない。だが。

「話は聴いていたんだろう？　邪（よこしま）」藤王アキラが自宅（アトリエ）で呟くと。

「はて？　麿はモノボード召喚計画の仔細など、何も聴いていないでおじゃるが？」風に乗って、横島ツカサの声が聞こえたような気がした。

第五十五話　生徒総会

僕の名前は黒木シュン。通称、ザ・トリガー。薙刀高校に通う、少し非凡な超能力少年だ。

厄介なことに、そして残念なことに、僕の能力と存在はあらゆるトラブルの種となる類のものであり、僕は強制的に波乱万丈の人生を歩んでしまうことになっている。らしい。

そんな僕は、タイムリピーター遮断のトキコによって、アンチ・モノボードとして認定され、様々なイベントの発生に翻弄される生活を送っていた。

悪魔アガリアレプトとの交戦。スウマキツミとの接触。屋上爆破事件。第一次モノボード狩り。図書館爆破事件。

また、モノボードを見分ける特殊能力を持つ、相貌失認症（プロソパグノシア）の山岸ミノリ病欠の間に、野良猫のクロを巡るタイムリピーターとの戦争が勃発し、僕とピクチャレスは藤王アキラと邪ツカサの助力を得てタイムリピーターをなんとか撃退することに成功した。

そして時は五月後半、山岸ミノリの復帰と共に、今度こそモノボード対策が進むかに思われた。だが。

「ごめんなさい。今回は見分けがつかないです……」山岸ミノリの発言に、チーム・ムツキのメンバーはため息を漏らす。

案の定、今回のモノボードは、薄く広く汚染をばらまいていた。新聞部員の数名に怪しい兆候があった程度で、他の生徒にどの程度汚染が広がっているのかは、分からないという。あるいはこうしている間にも、薙高新聞を経由して、全生徒に汚染を広げているのかもしれない。

「最終的にモノボード化できれば、その課程は問わない、といったところかしら」小早川ムツキが考察する。
「おそらくそうだろう」僕が発言する。
「誰でもいいから不特定多数をモノボード化してしまえば、あとはどうとでもなる。そういう方法に切り替えたんだろうな」

協力を仰ごうにも、新聞部の部長、最上（もがみ）ヒデアキと僕は事実上敵対している。また、報道の自由という権利もある。新聞経由のモノボード汚染の事実を知ってもなお、新聞部はその報道をやめることはないだろう。

「そういえばお姉さま、今日は生徒総会の日ですよ」木村カエデが目を輝かせる。
「生徒会の方々が、今年の抱負なんかを発表したり、投票を行ったりする、記念すべき日です！」ハイテンションのカエデ。
「だるーい」一方、天川（てんかわ）ヤヨイのテンションはダダ下がりである。

とりあえず僕らは巨大な体育館に向かった。全クラスの生徒が一堂に会するのは、入学式以来ではなかろうか。この薙刀高校は、文句なしのマンモス校だ。僕はあらためてその規模に圧倒される。

壇上に掲げられた国旗と校旗。お馴染みの日の丸と並ぶ、クロスする薙刀をシンボルとする校旗は、威風堂々としている。

「我々が求めるのは自由！　生徒の！　生徒による！　生徒のための政治である！」

生徒会は、主に二三年生によって占められている。だからここで行われるのは、一年生に対する訓示であろう。この学園がどんなポリシーで運営されているのか。ある程度説明してくれると色々助か

る。

「自由とは！　ただ豚の餌のように与えられるものではない！　戦い！　勝ち取り！　行使してゆくものでなくてはならない！　私、黒鉄マモルはここに宣言する！　薙刀高校は自由な学園集団であると！」

演説が最初からヒートアップしている。大丈夫か生徒会。

「この学園に入学してきた者は、多かれ少なかれ能力を持っている！　その行使は自由！　まったくの自由である！　……とはいえ、十年前の悲劇を繰り返してはならない！　悪の芽は早めに摘んでおかねばならない！」

なにやらきな臭い話になってきた。

「黒木シュン君！　通称ザ・トリガー！　彼の能力は危険すぎる！　学園にあらゆる災厄をもたらし、それでいて事態を終息させることもままならない！　そこで！　この生徒総会での投票によって黒木シュン君の処遇を決めたいと思う！」

僕か。この僕のためにこの生徒総会があるのか。僕は乾いた笑いをこらえきれなくなってきた。なんという茶番。なんという政治的判断。勝手にアンチ・モノボードにしておいて、奇妙なイベントの中に放り込んでおいて、結局僕が悪だというのか。

「異議あり！」小早川ムツキをはじめとする、チーム・ムツキが挙手する。

「彼を中心に事象が起こっているからと言って、彼が悪と考えるのは早計と思われます」

「同じく異議あり、だ」チーム・クローゼットの、そしていまやシークレットのボスでもある兵藤カツヒコが挙手をする。
「ザ・トリガー自身は悪くねーよ。事件はそれぞれ背景を持ち、起こるべくして起こっている。その傍にいつもそいつがいる。それだけだ」小物臭が漂う男だったが、なかなかどうして、男前な発言をする。

「異議あり、に投票しておきましょう」藤王の代理ロボット、丸が人を割って現れる。
「軍事部としても、その判断に異議を申し立てざるを得ません」挙手のたびに、生徒たちに動揺が起こる。

「平安部としても、まだこの駒には利用価値があると考えているでおじゃる」邪が挙手すると、最大派閥を形成する平安部の部員たちも、ちらほらと挙手を始める。

こうして、あっというまに、形勢は逆転した。

「くっ！　今回は運が味方したようだな！　だが覚えておくがいいザ・トリガー！　お前の体質は知らず知らずのうちに災厄を引き寄せる！　いつかそれが取り返しのつかない事実となってお前を襲うだろう！」
「薙高の自由は、闘争の上に成り立つものだ！　私、黒鉄マモルは、命に代えてもこの学園を守ってみせるぞ！」

僕はこの茶番につきあうつもりはなかった。

「命に代えても、と言ったな……」
僕はベレッタＭ９２を抜き放つと、やおら黒鉄マモルに向けて引き金を引いた。パン、パンパン。

銃弾のほとんどは謎の斥力によって逸らされたが、一発だけ黒鉄マモルに命中したように見えた。しかし、黒鉄マモルは倒れない。

「高速霧化（こうそくむか）、か」

「私に９ｍｍパラベラム弾は効かんぞ！　ザ・トリガー！」

「ああ、ヴァンパイアが相手じゃ、少々分が悪いな。あいにく銀の弾丸は切らしてる」

「ヴァンパイアが……ヴァンパイアが生徒会長で何が悪い！！」

「別に……何も悪くないさ。僕もお前も生まれつきの異常能力者。同病相憐れむってやつだよ」

事情を知らない一年生は、ぽかんとした顔をしている。

「ザ・トリガー！　お前は今、生徒会のメンバー全員を敵に回したんだぞ！　わかっているのか！」

「薙高の自由は、闘争の上に成り立つ、だったか。あんたの受け売りだよ」僕はくるりと踵を返し、体育館を後にする。

人の海がモーセの奇跡のように、左右に裂けた。

第五十六話　孤軍

モノボードの汚染拡大。生徒会との敵対。僕は、疲れている。疲れて、焦っている。

ひとり自分のクラスに戻り、席に着こうとするところで、僕は不意に声を掛けられた。

「よう少年」先生は、記憶抹消者（イレイサー）は既に僕の背後に回り込んでいる。振り向こうとする僕の頭を、イレイサーはがっちりと掴む。

「なに、心配はいらん。ちょっと覗かせてもらうだけだ」

その言葉と同時に、僕は意識を失い――そして時間が飛んだ。

時間の経過が分かったのは、誰も居なかったはずの教室に、生徒たちが帰ってきていたからだ。教室の時計を見ると、十数分の時間が経過している。まさか記憶を消されたのかと思い一瞬慌てるが、イレイサーが「覗くだけ」と言っていたのを思い出し、僕はとりあえずの落ち着きを取り戻す。

「顔色悪いけど、大丈夫？」薙刀学園会長の孫、藤沢カオリが僕を心配して声を掛けてくる。だが、僕はＰ２（Ｐａｒａｎｏｒｍａｌ Ｐｈｅｎｏｍｅｎａ、超常現象）持ちでない彼女を、Ｐ２絡みのことに巻き込むつもりはなかった。

「大丈夫。ちょっと眩暈がしただけ。そうだ、保健室行ってくるよ」そう言って、僕は立ち上がり、現状に思考を巡らせる。

モノボードの汚染拡大。生徒会との敵対。それと――イレイサーの介入。僕の脳を読んで、イレイサーは一体何をするつもりなのか。その計画には、薙高四天王の誰かが絡んでいるのか。平安部の邪ツカサ、情報部の魔王・藤王アキラ、軍事部の魔女・水城、そして新

聞部の最上ヒデアキ。そのうち三人が僕に協力的であるという事実は、僕をいくぶん励ましてくれる。

「薙高新聞は見た？」廊下で自然に合流した小早川ムツキが――黒い髪をした彼女もいちおう「魔女」の称号を持っている――少し後ろを歩きながら僕に問いかけてくる。

「いや、見てない」

「あなたのことが取り上げられてるわよ。『生徒会に牙を向く反逆児、ザ・トリガー。生徒総会中に生徒会長めがけ発砲』。あなたの行動が、さっそくビッグニュースになったわけ」

「でも会長は無傷。なぜなら人間じゃなかったから」

「それは結果論よ。たとえ会長がヴァンパイアだからって、心臓を狙えば下手をすれば死ぬもの」

「死なないね。彼は、黒鉄マモルは、『自動的に』弾丸を弾いたんだ。弾けない分は単に受け流した。そもそも最初から、彼は自分が最強だと自負しているような口ぶりだったじゃないか。突然の反論に激昂しているように見せかけておいて、実際は僕に撃たれることくらいは計算に入っていたはずだ」僕は言葉を続ける。

「それに……彼が本気を出すのは『夜』なんだろう？」ヴァンパイアの支配が強くなるのは、夜と相場が決まっている。

「そうよ。はっきりいうけど、生徒会長は夜の間は無敵。薙高四天王でも手が出せないくらいヤバイ存在になるわ」そこまで言って、小早川ムツキは足を止める。

「漫画やホラー映画みたいに？」

「明確な弱点が無いという点では、それ以上よ。彼はＵＶカットクリームで紫外線を防いでいるから日光は致命的な打撃にはならない。それに銀の弾丸は――あれは御伽噺でしょう？　たぶん無駄だと思う。そんなに簡単にやれるならもう既に誰かがやっているもの」

分かっている。でも重要なのはそこではない。僕と生徒会長は、勝ち負けはともかく、それでも戦わなくてはいけないのだ。なぜなら僕はザ・トリガーだから。そのイベントの「引き金」は、もう既に引かれてしまったのだから。

「じゃあ、今回は降りてもいいよ」僕は核心部を言い切り、保健室に向かう。

「べ、別に私はぜんぜん勝ち目が無いと言っているわけじゃ……」

「はぐらかさなくてもいいよ。話を聞いた限りじゃ、そもそも僕に勝ち目なんてないんだろう？　だったら、今回は僕一人にやらせてくれ。そういつもいつも助けてもらってばかりじゃ、僕の株が下がっちゃうし」

僕は笑いながら手を振り、保健室へと歩いていく。ムツキは足を踏み出さない。自然と、距離が離れていく。

「笑いごとじゃないわよ！　一人で夜の生徒会長を相手にするなんて無謀だわ！」

「こっちが数を揃えれば、相手も数を繰り出してくるだろう？　それじゃ相手の思うつぼじゃないか。大丈夫。今回は僕一人でやる」

「……策はあるの？」

「それをこれから考えるのさ」

僕はザ・トリガー。あらゆるイベントが振りかかってくる特異体質を持つ人間。生まれてこのかた、僕は様々な戦いを経験してきた。そこには勝利もあれば、敗北もあった。残念ながら「常に勝ち続ける」などということは不可能だ。僕は神ではないし、悪魔でもない。そんな自分勝手な日常（きけん）に、知り合いがそう何度も巻き込まれるというのは、どうしても避けたかった。

第五十七話　奇策

白い彫像が彫り込まれた柱、赤い絨毯。栃の木でできた大きなテーブル。生徒会執行部の部室の豪華さは、薙高の小さなホワイトハウスと揶揄されている。

そこに、生徒会長、黒鉄マモルは座っていた。

報告すべきことは二点。放課後、ザ・トリガーは軍事部に合流。そこで何らかの話し合いの末、銃器らしきものを受け取る。その後、平安部に合流。何かをビニール袋に入れて持ち帰る。

現時点での情報はこれだけです。ザ・トリガーが他の組織に接触したり、助力を求めたりした形跡はありません。チーム「ムツキ」のメンバーも、ピクチャレスも、いつもどおり下校しました。今夜中の合流は無理でしょう。

「ザ・トリガーは今夜、マモル様を単独で迎え撃つつもりのようです」

秘書は、生徒会長をマモル様と呼ぶ。単純に会長と呼ぶと、薙刀学園全体の会長である藤沢老と紛らわしいためである。というのは建前で、秘書自身が本名で呼びたいと思っているからである。

「単独で、正々堂々の一騎討ちか。だがそれで勝てると思っているのなら、私もつくづく舐められたものだ」生徒会メンバーの特色である、白い制服を着用して、黒鉄マモルは呟く。

「負け戦と分かって、他の仲間を庇っているのかもしれませんね」

「それなら殊勝な心がけだと言えるかもしれんな。何もかもの引き金を悪戯に引いて歩いているのに比べれば、単独でしおらしくしておいたほうが安全だと理解したのかもしれん」

「しかし彼は新しい銃器を手に入れていました」

「せいぜいH&K　MP5のサブマシンガン程度だろう。そんなものは私の敵ではない」

余裕を見せていると、メールが届いた。「果し状　夜の校庭で待つ　黒木シュン」

なるほど不意打ちも無しというわけか？　夜のヴァンパイア相手に、完全にクソ真面目に戦って勝負をつけたいと？

「ははははは、笑わせてくれる」

「お供の者は？」「要らん。私一人で十分だ。一対一の勝負。それでどちらが強いか、薙高生の大部分が理解することになるだろう」

春とはいえ、夜の学校は冷えた。厚着をしてきて正解だった。ザ・トリガーはそう思う。策は保健室で考えた。準備は万端である。

「さて、一人で来るかな？」黒木シュンが呟くと。

「私は一人で来たよ。ザ・トリガー」校舎側から歩いて来る生徒会長の白い服は、闇に映える。

「じゃあ、もう始めちゃっていいわけですね？」ザ・トリガーはベレッタM92を引き抜き、銃口を定める。

「無駄だよ。ヴァンパイアに銃の弾丸は当たらない。たとえ君がその能力で補正したとしても、だ」

ザ・トリガーは引き金を引く。パンパンパン。サイコキネシスを乗せた全ての弾は逸らされ、空を斬る。動揺は無い。銃の弾は当たらない。それは既に試したことだ。

「じゃあ新兵器でも試しますかね」ザ・トリガーは別の銃器を取り出す。外見はH&K　MP5のサブマシンガンだ。

「私がその程度の火力でどうこうなるなどと本気で思っているのかね？　やってみるがいい。そして絶望しろ。ヴァンパイアと人間には決定的な違いがあるのだという事実を噛み締めろ」

「ごちゃごちゃいってねーで避けないと、当たって死ぬぞ」
圧搾空気から撃ち出されたのは、意外にも液体だった。ビュー。円弧を描いて飛ぶそれは、銃弾ではなかった。
黒鉄マモルはタイミングを外され、咄嗟に霧に姿を変えるも、液体の種類が分からないので元に戻れない。猛毒かもしれない。硫酸かもしれない。だが、永遠に霧になり続けることはできない。危険を感じながらも霧変化を解き、姿を戻す。だが何もない。猛毒でも硫酸でもない。だが水でもない……これは!?

「鼻詰まりでも起こしてるのか生徒会長？　『ニンニク水』だよ。あんたの身体、空中を浮遊してたニンニクの臭いを取り込んで、すげえ臭くなってるぜ」

「ニンニク……ニンニクだと！　そんなもの弱点でも何でもないぞ！　こんなものがお前の策だというなら、お笑い草だぞザ・トリガー」
「だが、あんたは明日、『臭い』のせいで出席できなくなる。もしかすると明後日も。一度体に取り込んだニンニク臭はそう簡単に消えやしないからな」
「一方、僕は悠々と明日登校する。どっちが勝ったかは、薙高新聞が面白おかしく報道してくれるだろう……」

「はは、ははは。それは愉快だ。確かにそれなら私は敗北したことになるだろう。だが、気が変わったぞ。その機転、実力……危険だ！　私は今ここでお前を始末することにする！」

ヴァンパイアは戦闘形態を取る。影がむくりと起き上がり、鋭い槍のようになって、ザ・トリガーを襲う。だが、ザ・トリガーのホーミング弾は、次々とその影の槍を破壊してゆく。生徒会長は、自

らの『臭い』を気にするあまり、集中が乱れている。襲いくる無数の影を捌きながら、黒木シュンは提案する。

「現実を直視して取引しようぜ生徒会長。今のあんたの対応は常に『後手後手に回っている』んじゃあないか？　モノボードの汚染拡大だけとってみても、それを止められるだけの情報もリソースも持っていない。それに僕を追放したところで、もう運命の歯車は動き始めている。モノボードは完成し、タイムリピーターもじきに復活する。図体ばかりでかくなったあんたら生徒会に、その対処ができるのか？」

それは事実であった。生徒会の対応は全て後手後手に回っている。ザ・トリガーに張り付く偵察班がことごとく駒鳥ススムらによって対処されてしまうのもあったが、まずなにより、組織が巨大になりすぎているのだ。生徒の平等を建前に、組織にＰ２以外を取り込んだ結果がそれであった。

「僕の要求はこうだ『僕を生徒会に入れろ』。そうすれば生徒会は僕を常に監視しておくことが可能になる。トラブルは生徒会の目の届くところで発生するだろう」

黒鉄マモルの苛烈な攻撃の手が止まった。

「それは悪くない取引かもしれん。学園全体を守るために、ザ・トリガーを監視できるのなら」

「持ち帰って検討してみてくれよ。僕はもう疲れた。そろそろ寝たい」それは本音であった。サイコキネシスで補正をかけつつ銃を撃ち続けるのは、かなりの疲労を伴う。

「ところでザ・トリガー。お前はニンニク水ではなく、猛毒や硫酸

を使うこともできたのじゃないか？　なぜそうしなかった？」
「僕の目的は撃退であって殲滅じゃない」
「勝利できればそれでいいというわけか。つまり言い換えればこの私に対して、手加減をしたのだな？　……いいだろう。私の負けだ」

こうして、その日の夜の戦闘は終わった。僕は寮に帰って、泥のように寝た。

翌朝、起きがけにふと気になってケータイ版の薙高新聞に目を通す。
「ヴァンパイア生徒会長、まさかの敗北。ザ・トリガーの奇策で二日休学を申請」

やれやれ。一体どこで見ていたのやら。そう思って、僕は眠い目をこすりつつ、朝食を取り始めた。

第五十八話　悪魔召喚

「呆れた……本当にヴァンパイアに一人で勝っちゃうなんて……」
小早川ムツキが呟く。
魔女と呼ばれる所以、彼女のＰ２は遠隔透視（リモートビューイング）だ。昨日の戦闘も自宅で息をのみながら観戦していたのだろう。

「まあ、あのまま戦ってたら、間違いなく僕が負けてたけどね」
戦って勝つのは下策。戦わずして勝つのが上策。とは、孫子の言葉だ。そして付け足すなら、仲間に引き入れるのが最上策といえる。

生徒会役員　黒木シュン
モノボード対策班班長　兼　タイムリピーター対策班班長

生徒会役員人事が発表されたのは、生徒会長の登校日である、三日後であった。
これで僕は、生徒会、情報部、平安部、軍事部の四つの活動を掛け持ちすることになった。以前より忙しくなることは間違いない。そのことについてムツキに話すと、一つ忘れているわよ、と指摘される。

「あなた、オカルト部にも入っているでしょ？」

言われて気付く。薙高の地下深く、クマ沢……じゃなかった金沢カルト先輩が率いる、オカルト部が存在している。新聞部と裏の繋がりを持つというオカルト部だが、実体は悪魔の召喚、幽閉、契約などを手掛ける、完全にブラックな団体である。僕はできれば関わりたくなかった。

「あ、言ってなかったけど、あなたどこかの悪魔と契約しないとダメよ」
「冗談だろ？」僕が問い返すと、小早川ムツキが講釈を垂れ始める。
「あなたはルシファー、ベルゼブブ、アスタロトに仕える六人の上級魔神の一人、悪魔アガリアレプトを倒したのよ？　だからあなたの立ち位置は、今、非常に危ういことになっているの。特に部下のグーシオン、ブエル、ボティスは、あなたを抹殺したくてうずうずしてるでしょうね。まあそうやすやすと物質界に顕現することはできないけど、オカルト部の敷地内なら話は別」
「あ、そもそもソロモン72柱に代表されるように、悪魔の数はとても多いの。それぞれが派閥を形成しているから、悪魔情勢は複雑怪奇。単純にこれがベストとお勧めすることは誰にもできない。でも今の状況を打開するだけなら、ルシファー、ベルゼブブ、アスタロトのいずれかと契約すればいいと思う」
「グリモワールによれば、ルシファーはサタンの別名で、名実ともに地獄の皇帝。ベルゼブブは蠅の姿をした君主。アスタロトの別名はディアボロス、竜の姿をしているわ。いずれも悪魔たちの王よ」
「他の契約者もいるのか？　契約者たちの派閥の分布はどうなっている？」
「知っている限り、全員死んだか、意識不明。願い事がすぐに叶ってしまうものばかりで、魂を悪魔に支配されてしまったのが原因と考えられるわ。クマ沢……じゃなくて金沢先輩は、数少ない成功例よ。噂では、彼は不老不死を願ったと聞いているわ」
「それでクマのぬいぐるみに魂を移された、と。笑いごとじゃないな」
「一般に、悪魔は運命を支配することができると言われている。あなたのトラブルだらけの未来も、悪魔と契約すれば変えられるかも

しれない」

その言葉を聞いて、僕は自分の願いを想像する。何も起こらないフラットな人生。のんびりとした老後。願っても叶わないであろう平穏な生活。

「悪魔アガリアレプトは、消え去る前に僕のことをアンチ・モノボードとして用意された存在だと言った。いかに悪魔といえども、その運命は変えられないだろうな」

「じゃあ、何を願うの？」

「秘密」

その日、僕は地下にあるオカルト部に顔を出すことを決めた。

「やあ黒木シュン君。いつか来ると思って待っていたよ」

暗闇をバックに、椅子に座ったクマのぬいぐるみが喋っている。どこから声が出ているのか怪しいが、彼こそがクマ沢……じゃない金沢カルト先輩だ。

「話はムツキから聞きました。僕はどこかの悪魔と契約しなけりゃいけないんでしょう？」

「その通りだ。君のもつれまくった運命を変えるには、どこかの派閥に属する必要がある。ところで……願い事は決めたかね？　できれば悪魔にも叶えることができないほど難しい願いが良い。慎重に考えることだ」

「願い事は考えてあります」

「ほう。どんな願いかな？　いいかね？　すぐに叶えられるような願いではダメだぞ。かといって悪魔の本分に逆らうこともできん。世界平和なんかを願った奴もいたが、末路は悲惨だった。彼がどう

なったか聞きたいかね？」
「いいえ。興味がありません。早速はじめてください」
「ふむ……君には相当の覚悟があるようだ。いいだろう。始めようじゃないか。それで、誰と契約するかはもう決めたのかね？」

「アスタロトと契約します。ルシファーやベルゼブブと契約してキリスト教の敵になる気はありません。アスタロトはその点、知名度が低い……」

「誰の知名度が低いだと？」低い声が地面から響く。儀式はもう始まっていたらしい。

金沢先輩は一切言葉を発しない。それで、ここからは、僕とアスタロトの問答の時間だと知れた。

第五十九話　魔王アスタロト

「誰の知名度が低いのかって、そりゃあなたのことですよ。アスタロト」僕はまったく動じないふりをする。
「あまつさえ私の部下、アガリアレプトを打ち倒し。ディアボロス（魔王）である私のことを知らぬふりをする。貴様よほど死にたいようだな……」
「あいにく僕はギリシャ人じゃないし、ネットゲームもやらないものでね」
「……知っておるではないか！！」

いまのところ、僕は悪魔と漫才している。ぬいぐるみの金沢先輩は、どんな気持ちで僕を見ているのだろうか。いや、考えてもしょうがない。これは僕とアスタロトの間での問題だ。悪魔には無限の知識があるという。彼の経験も何の役にも立たないだろう。

「あなたの知名度を上げる方法がありますよ。……それは僕の願いを叶えることだ」
「貴様の願いなど、訊くまでもない。『平穏な生活』が欲しいと常々思っていることなど、こちらは百も承知だ」
「でもその願いは叶えられない。そうでしょう？」
「貴様はアンチ・モノボードだ。平穏な生活など、手に入るものかよ」

やはりそうか。僕は運命の中で踊る駒でしかないのか。

「ということは……やっぱり悪魔にも限界があるんですね。残念だなあ。人知を越えた、ファンタジー小説で描かれる悪魔とは大違いだ。まさかとは思いますが、銀の弾丸が弱点だったりしないでしょ

うね？」

「……貴様、私を舐めているな？」

「この僕の、ザ・トリガーの魂を賭けるからには、相応の願いを叶えてもらわなくちゃいけない。アスタロト、勘違いしているようだから言っておこう。あなたが僕を試しているんじゃない。あなたが僕に試されているんだ」

僕は一歩も引かない。悪魔はこちらの思考を読む。弱みを見せたら負けなのだ。

「貴様……何を願うつもりだ。言え。どんな願いでも叶えてやる。そしてその対価として、私はお前の魂を貪り食ってやる。じわじわと地獄の苦しみを与えてやる。さあ言え。何が望みだ？」

僕の望みは単純だった。単純すぎて、そこに思い至らないアスタロトが不憫に思えてくるほどに。僕は言った。自分の願いを。全てを終わらせる存在を。

「ザ・エンダーを」

「なんだと……」アスタロトが絶句する。

「聞こえなかったのかアスタロト？　僕の願いは事態収束者（ザ・エンダー）だ。僕の能力ザ・トリガーを、そしてこの薙高のＰ２を、完全に打ち消す存在を出せと言っている」

アスタロトは、弱弱しい声を上げた。

「不可能だ……」

「不可能じゃないさ。別に今すぐでなくてもいいんだぜ？　僕は十年でも二十年でも、いや死ぬまで待つ気でいる。これから生まれてくる子供の運命を変えろ。ザ・トリガーである僕を、黒木シュンを

創り出したように、ザ・エンダーを創り出せ。それが『願い』だ」

アスタロトが熟考し、場に沈黙が落ちる。

悪魔は運命を操れる。そして運命は僕をアンチ・モノボードとして創り出した。ならば、できないことではないはずだった。薙高を中心として延々と続くこの超能力のお祭り騒ぎにも、やがて終わりがくるべきだ。それが僕の願いだった。

可能と不可能の境界線上にある、悪魔といえどもやってみなければ分からない、途方も無い願い。

「お前の願いはあまりにも大きすぎ……運命の糸はあまりにも細すぎる……」

アスタロトは哀願する。だが僕は容赦しない。

「アスタロトよ。ディアボロスよ。知名度の低い魔王よ。僕は願いを口にした。そしてお前にはそれを成し遂げられるかもしれない能力がある。何が不服なのだ？　願いが叶った暁には、僕の魂を喜んで差し出そうじゃないか。僕と対になる、事態収束者（ザ・エンダー）を創り出せ。それがお前のこれからの仕事だ」

「お前の願いはあまりにも大きすぎ……運命の糸はあまりにも細すぎる……」

「お前の願いはあまりにも……運命の糸はあまりにも……」

「お前の願いは……運命の糸は……」

アスタロトは繰り返す。その台詞は次第にか細い悲鳴へと変わり、消え去ってゆく。僕は悪魔に、ある意味で勝ったのだ。

アスタロトが去ると同時に、金沢先輩が興奮した様子で声をかけてきた。

「おめでとう。契約は完了した。君はアスタロト派に属し、むしろ悪魔から庇護される存在へと昇華したのだ」
「まあ……結局、僕の願いは叶いませんでしたけどね」

僕は疲れを悟られまいと、皮肉で返す。けれども、僕と同じく悪魔と契約した金沢先輩には、その演技もバレているような気がしてならなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4523t/

ザ・トリガー「学園サクセスストーリー」

2012年1月10日05時49分発行